
仮面ライダーエターナル - NEVER SIDE STORY -

K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーエターナル - NEVER SIDE STORY -

【Nコード】

N8083R

【作者名】

K

【あらすじ】

風都の街で起きたT2ガイアメモリを巡る仮面ライダーと『NEVER』の戦い。
その舞台裏で起こった語られることのない傭兵集団『NEVER』のもう一つの戦い。

Eの開戦／大道克己の章

一人の男の足音がアスファルトの上をコツコツと一定のリズムを刻み鳴り響く。

周りには年季の入ったビルが建ち並ぶため、太陽の光が当たり難く薄暗い場所になっている。

陽の光が当たらないため、やや湿気の帯びた空気の中、男は淀み無く歩き続ける。

男は、赤のラインが入った黒の革製のジャケットと、同じく黒のスポンを身に纏い、そして先程からアスファルトを叩く靴は、市販されているものではなく、靴底に鉄板が入っているような、装飾を一切省き、機能のみを重視した革靴を履いている。また頭髮の一部を青く染め上げ、特徴的なものとなっている。

そして、最も目につくのはジャケットと左胸と背中に描かれた紋章である。そこには、林檎を突き刺した剣、それを取り巻く四匹の蛇があった。

男は、どんどんと人気の無い方へと足を進めていく。薄暗い道を抜けた先にあつたのは、開けた空間と朽ちた建物があった。かつては工場だったのであろう、そういったものを連想させるような残骸があちらこちらに置かれていた。

大きく開かれたシャッターの奥には、かつては使われていただろうと思われる資材、塵や埃にまみれたガラス窓やそれが砕けたガラス片が散り、もう何年も人が使用していなかったことが一目で分かる。

男は、躊躇うことなく廃工場の中へと入っていた。

破れた天井からは幾筋の光が射し込み、工場内に舞い上がっている埃を浮かび上がらせている。

工場内の中心に当たる、広がった空間に差し掛かったとき男の歩みは止まる。

その瞬間、工場内に無数の人間が一気に駆け込んできた。年齢はバラバラだが全員が黒のスーツで統一した格好をしている。

男達は、一糸乱れぬ動きで、先に工場内に入った男を包囲する。その数二十人以上。

「よお、随分と豪勢に歓迎してくれるな。さすが、自分たちの庭なだけであって行動が早いな」

大勢の人間が自分を囲んでいるという状況にも関わらず、男は知人にでも話し掛けるかのような軽い挨拶する。しかし、言葉とは裏腹にその表情は、口の端を吊り上げた不敵な笑みを浮かべ、間違っても知り合いに向けるような顔ではなかった。

「大道克己だな…」

囲んでいる黒服達の中から少し離れた場所にいる、三人の男うち、真ん中にいる男が表情に不快感を表し、苦り切った口調で言う。

「来た早々、随分と派手な真似をしてくれたな…」

二十人を越える殺気に満ちた視線が大道克己と呼ばれた男に集中するが、当の本人は全くといって言い程に動じた様子も無く、涼しげな態度をとっている。

「死に損ないの傭兵風情が、あれは我々ミュージアム相手に挑発のつもりか……」

自分たちをミュージアムと呼ぶ黒服の男達のリーダー格に当たる男の怒りを滲ませた声。それに対して克己は――

「お前はパーティーを始める前に何をする？」

「……何だと？」

突然関係の無い話を振られ、リーダー格の男の疑問の声が洩れる。

「パーティーを始める前にすることだよ」

口の端を吊り上げた皮肉に満ちた笑みを浮かべる克己。男達は、相手の意図が分からず互いに顔を見合わせる。その様子に克己はやれやれ、といった感じで肩を竦める。

「パーティーを始めるには、いつだってクラッカーを鳴らして祝うもんだろ？」

克己の言葉を聞いた瞬間、リーダー格の男の額に青筋が浮かぶ。

「貴様は……あのへりの爆破が……それだと言つつもりか……！」

「まあ、あれは少し予想外だったがな。もっと別の方法で派手にいきたかったんだが……あれじゃ始まりを祝うには少々地味過ぎる」

怒りに満ちた言葉に、困った困った、といった感じ返す克己。火に油を注ぐような言葉に、リーダー格の男を含め、黒服達のボルテージが一気に上昇する。

「これ以上の会話は不要だな！」

男の言葉を合図に、克己を囲む黒服達は、懷から一斉に共通した物体を取り出す。長さは数センチ程度の長方形の形をし、パソコン

などで用いられるUSBメモリに酷似しているが、ケースは骨のよ
うな装飾が施され、中心には仮面の形を使って『M』の文字が描か
れている。

「殺れ！」

『MASQUERADE』

金属端子付近にあるスイッチを指で押すと共に発せられる電子音
声、と同時に男達は一斉にそれを首筋に押し当てる。

押し当てられたメモリは、溶け込むように肉体へと吸収され、男
達の肉体を変化させる。

顔から頭部にかけて覆うように黒く仮面のように変化し、顔の中心
には背骨のようなラインが走り、それを中心に幾筋の白い骨のよう
な線が装飾のように顔全体に施されている。

人間から怪人へと変化した黒服達。しかし、克己の余裕に満ちた
態度は崩れない。

「早速、ガイアメモリを使ったか。いいだろう、相手をしてやる」

挑発的な言葉と共に、ジャケットのしたから一本のナイフを取り
出す。

取り出されたナイフは刃渡り15センチ程、装飾など一切無い、
実戦を想定して作られた両刃のダガーナイフである。

「来い、せめて退屈だけはさせないでくれよ？」

右手にはナイフを持ち、左手は挑発するように手招きをする。完
全に相手を見下した行為、マスカレードたちは殺気を一層強め、両
足に力を込め一気に克己に襲い掛かった。

全方向から迫るマスカレード。最初の一撃は、克己の正面から来る。通常の間人よりも優れた肉体から繰り出されるマスカレードの右ストレート。克己の顔面目掛け繰り出されるが――

「はっ！」

捉えたと思えた一撃は、克己の頭があつた場所を通過していた。既に克己は頭のみを傾け、回避をしていた。そのまま、反撃の一発が克己の左手から放たれる。拳が唸りを上げるような勢いのまま、マスカレードの脇腹を直撃。若枝が折れるような音とともにマスカレードの体はくの字になる。

悲鳴すらあげぬまま倒れこむが、トドメを刺す前に、別のマスカレードの蹴りが克己を狙う。が、殴つたままの姿勢から放たれた克己の横蹴りが、マスカレードの胸部にめり込み後ろへと吹っ飛んでいった。

息つく暇もなく背後から襲うマスカレードたちがチャンスだと言わんばかりに迫る。その数四人。

前方に意識が向いているうちに攻撃を与えようと拳を振り上げるが――

「遅い」

放つよりも先に克己の振り向きざまに出されたナイフの刃がマスカレードの首筋に刺し、そのまま引き抜く。

「……！っ……！」

喉をやられ、溺れている人間のように手をバタつかせ崩れ落ちる。仲間がやられたのにもかかわらず、それを無視しマスカレードたちは克己を襲うが、飛び掛かってきた一人の顎を鞭のようにしなる左

のバックブローが捉え、直撃すると同時に殴られた勢いのまま地面のコンクリートに頭から叩きつけられる。

克己は地を蹴り、マスカレードの一人を襲う。マスカレードを越える身体能力から生まれる脚力は、マスカレードに防御の暇すら与えず、懷に簡単に入らせてしまう。勢いを殺さぬまま克己のナイフがマスカレードの心臓を貫き、ナイフを引き抜くとそのまま近くにいたマスカレードの喉を切り裂き、血の華を咲かせる。致命傷を受け絶命するマスカレードたち。すると突然、体が内側から爆破されたかのように弾け飛び、塵芥も残さずに消え失せた。

克己の視界の端にあるものが入る。拳銃を構え、こちらを狙うマスカレードたちの姿。

銃弾が放たれる直前、最初にあばら骨をへし折られ、地面で痙攣を起こしていたマスカレードの襟首を掴み上げ、拳銃の射線上に突き出す。

マスカレードたちの放った弾丸は、克己に盾にされた同じマスカレードの体に命中。弾丸が体内に入る度にマスカレードの体はビクン、と跳ね上がり、そのまま倒れてしまいそうになるがマスカレードの襟首を持つ手は緩まず、それを許さなかった。

無数の弾丸を浴び、今にも他の死体と同様に塵になって消えて無くなる直前、克己の右足がマスカレードの背中を蹴り飛ばす。

重力を無視したかのような地面と水平な軌道を描き、銃弾を撃ち続けているマスカレードたちに向かって飛んで行き、マスカレードたちと接触した直後、その体を爆散させた。

同じマスカレードの爆発により、思わず両腕で交差しし顔を覆うようにしてそれを防ぐ。がそれにより克己の姿を視界から外してしまう。

慌てて克己の方を見るマスカレードたちだが、先程まで克己のいた場所には姿が見当たらなかった。

「上だ！」

リーダー格の男の取り巻きの一人の怒鳴り声に反射的に上を向く
マスカレードたち、しかし――

グシャ

マスカレードたちの一人の顔面を靴底で踏みしめ地面に叩きつけると同時にに碎きながら克己は着地する。

克己は、拳銃を持ったマスカレードたちが目を外した瞬間、マスカレードたちの頭上へと跳躍、そのままの流れで一人始末したのである。

着地したのと同時に直ぐ隣にいたマスカレードの心臓に逆手に持ったナイフを突き立てる。一瞬にして二人のマスカレードを始末する。

残る一人を始末しようとしたとき、何処からか発せられた銃声とともに克己の体が一瞬震えた。

少し離れた場所で地面に座った状態から拳銃を構えたマスカレードの姿があつた。

克己のジャケットの左胸には空いた穴、始末しようとしたマスカレードが放った銃弾が命中した証拠であつた。常人ならば死んでもおかしくない状態。

「残念だな。心臓はもう少し右側だ」

しかし克己は、何事も無かつたかのようにマスカレードの方に顔を向け、ニヤリと笑いながら指先で撃たれた箇所をトントンと叩く。慌てて次の弾を撃とうとするマスカレード。だが――

「ガアッ!？」

「覚えておけ。そこが心臓の位置だ」

引き金を引くよりも早く、克己の投擲したナイフがマスカレードの左胸を貫いていた。

「チッ！この死に損ないめ……」

マスカレードたちが次々と殺られていく光景に舌打ちと共に、呪のような言葉がリーダー格の男の口から洩れる。

戦闘が始まってほんの数分足らずで、初めにいたマスカレードの約三分の一が克己の手によって葬られていた。

「……あまりコレは使いたくは無かったんだが……仕方ない」

リーダー格の男がそう呟くと左右にいる取り巻き二人に視線を送る。その視線の意味を理解したのか二人は無言で頷く。

三人はそれぞれスーツのポケットからマスカレードたちが使用したガイアメモリと同型のモノを取り出す。形は似ているがマスカレードたちの使用したモノとは少し違い、マスカレードのガイアメモリはケースの中央に仮面の形を使って『M』の文字を現していたが、三人のメモリはそれぞれ異なる生物が『M』『A』『T』の文字を現していた。

『MAMMOTH』

『AMMONITE』

『TRILOBITE』

ガイアメモリ下部に設置されているスイッチを押すことで発せら

れる電子音声。そしてそのまま三人は、右首筋に浮かび上がる回路図のような痣に差し込む。

体内へ吸い込まれていくガイアメモリ。

地球の記憶から作り出されたガイアメモリは、その内部に蓄えた情報を放出し、人間を越えた存在、ドーパントへと変化させる。

三人の全身を光の膜のようなものが包み込み、それが消えたとき三体の異形がそこにいた。取り巻きのうちの一人は、半月状の頭部に触覚を生やし、全身を分割するような甲殻で覆った三葉虫に酷似した姿になり、もう一人は、体の半分以上が中心に向かい螺旋を描く貝の殻のように変化し、人間でいう腹部の辺りに何十本の触手と眼球がある。古代に生息したのアンモナイトという生物に手と足を無理矢理付け加えたような外見をしていた。

リーダー格の男は、全身を赤茶色の長い体毛で覆われ、腕や足が人間だったときの二倍程の太さとなり、顔の中央からは地面に着いてしまいそうなほどに長く伸びた鼻、その付け根の辺りからは弧を描く白い牙を伸ばしている。その姿は古代に生息し、既に絶滅したマンモスそのものだった。

「貴様を排除するのに製品版のガイアメモリの使用を許可されている。死人は大人しく土に還るんだな」

くもぐったような声で話すリーダー格の男改めマンモスドーパント。その言葉の中には優越感のような響きがあった。

「ようやく本腰を入れてきたか…」

三体の異形に対し鋭い目線を送る克己。先程まで浮かんでいた笑みは消え失せ、戦う者としての表情が浮かんでいた。

「例え『NEVER』でもドーパントには勝てない。それはお前自

身が分かっている筈だが？」

「確かに……」

マンモスドーパントの挑発的な言葉に対して意外なことに肯定で返す克己。

「だが……」

言葉と同時に左手を懷に伸ばし、中から何かを取り出した。

「ただの『NEVER』だったらの話だ」

懷から出したそれは、一見すればバツクルのようにも見えたが、機械的なフォルムをし、中央の右側だけにL字状の挿し込み口を付けられた左右非対称の物体である。しかし、それを見たマンモスドーパントから驚愕に満ちた声が漏れる。

「バカな……！？ ロストドライバーだと！？ 何故だ！ 何故『NEVER』のお前がそれを持っている！」

ロストドライバーと呼ばれたそれを腹部に当てると右端からベルトが表れ、ぐるりと一周し固定する。

「答える義理も義務も無いな。だが一つだけ教えてやる」

克己の右手には、いつ出したのか白色のケースに『E』の文字が刻まれたガイアメモリらしきものがあつた。ミュージアムたちが使用したガイアメモリとは違い、ケースには骨のような装飾が無いシンプルで洗練されたものになっており、金属端子部分もマスカレー

ドたちやマンモスドーパントたちとは違い、青い金属で出来ていた。

「ガイアメモリもだと……！？」

呻くように呟くマンモスドーパント。

「今の俺は『NEVER』でもあり、そして……」

『ETERNAL』

「仮面ライダーだ」

ガイアメモリのスイッチを押すとともに鳴り響く声。

「変身」

ロストドライバーのスロットに挿し込み、右手で払うようにして右側に倒す。

全身を青い電流のような力が駆け巡ると同時に克己の体は作り替えられていく。全身を穢れ一つ無い純白の装甲のような姿へと変えられていき、額には山形の触覚が王冠のように創られている。

白の装甲の上には、ガイアメモリを挿し込む為に造られたコンバットベルトが右胸と左胸、右腕、左脚に身に付け、更にその上に黒のローブを身に纏っている。

眼は黄色の複眼へと変化、目頭の繋がった複眼は単眼にも双眼にも見え、妖しい輝きを放つ。

大道克己の全てが変わったとき、変身によって生まれた力の余波が風を作り、黒のローブをなびかせる。

「仮面……ライダーだと……！？」

「そうだ。仮面ライダーエターナル、それが俺の新しい名だ」

誇るように自らの名を名乗る大道克己あらため仮面ライダーエターナル。

そのとき、うつつ、と呻くような声とともにマスカレードドーパン
トが頭を押さえフラフラとエターナルの方へと歩み寄っていった。

それは、克己が最初の方で胸部を蹴り飛ばしたマスカレードドー
パントであった。蹴られた勢いで地面に強く頭を打ち付け、今まで
気絶をしていたのが今になって目を覚ましたのである。

しかし、頭部への衝撃のせいで意識の方はハッキリとしないのか
足取りはおぼつかなく、自分が何処に向かっているのかすら分かつ
ていない様子である。

「おい！そいつに近づくな！」

トリロバイトドーパントの荒げた声にマスカレードドーパントの足
が止まる。

「え？」

声の方に体を向けようとした瞬間、エターナルの右腕が一瞬消え
た。

消えたと同時にパアン、と弾ける音と一緒にマスカレードドーパン
トの頭部は消失、そのまま体も連鎖的に弾け飛んだ。

目視出来ない程の早さで振るわれたエターナルの拳がマスカレー
ドドーパントの頭部を砕き散らしたのである。

その光景にマンモスドーパントたちは思わず息を呑む。

エターナルはそのままマスカレードドーパントを瞬殺した右拳を
マンモスドーパントたちに向ける。

指先から肘まで青く燃える炎のような紋様を描かれた右拳は――

「さあ、ミュージアムの諸君」

天に向かって親指を突き出す形となり――

「地獄を楽しみな！」

一気に下へと向けられた。

Eの開戦／大道克己の章その2（前書き）

本作では、本編の設定上存在するガイアメモリのドーパントを出していると思います。

Eの開戦／大道克己の章その2

いくつもの足音が一人の標的に向かって鳴り響く。

その距離約十五メートル、だがその標的は動かない。

殺気をたぎらせ自分たちを鼓舞するかのように猛々しい叫びを上げ標的に迫る。

その距離約十メートル、標的は今だ動く気配は無い。

もしかしたら、一斉に攻めてきたせいで相手は反撃する糸口が見えていないのでは？という楽観的な考えが脳裏に浮かぶ。

標的との距離約七メートル、標的は微動だにしない。

何故動かない、その考えが動揺と焦りを生むが、今更足を止めることは出来ない。一斉に襲いかかれば、と考えたとき。

パン、という破裂音とともに仲間の一人の上半身が消失する。

「な……？」

間の抜けたような声が口から溢れる。何故ならさっきまで七メートルほど先にいた標的が目の前に立っているのだから。

「よお」

仮面ライダーエターナルによる蹂躞が今始まった。

先程までの克己の拳の一撃が銃弾だとしたら、エターナルの放つ拳の一撃は爆弾のような威力を秘めていた。エターナルの拳を受け、吹き飛んだマスカレードドーパントの上半身が数メートル離れた場所に落下した。

啞然としているもう一人のマスカレードドーパントに向けエターナルは中段蹴りを放つ。白い軌跡が弧を描きマスカレードドーパントの胴体に吸い込まれるように当たると、マスカレードドーパントの体は一気に変形する。くの字を通り越して頭と足が接触するのではないかと思う程に二つ折りになり、ちょうど平仮名の「つ」という字と似たような形になったまま塵と化した。

エターナルは二体のマスカレードドーパントを葬ると直ぐ様、次の標的を決めすかさず行動に移る。

地面を蹴ると同時に数メートル離れた距離を一瞬にして零にし、雷の如き早さで繰り出された右肘がマスカレードドーパントの顔面の中央に突き刺さった。顔の中心は陥没し、受けた攻撃の勢いのまま体全体がその場で一回転し、顔面から地面へと勢いを殺さぬまま叩きつけられて塵と化した。

再び狙いをつけ動こうとしたとき、エターナルは後方から迫る気配に咄嗟に左腕をつきだす。

鈍い音とともに衝撃がエターナルの左腕全体に広がる。

「そこまでしてもらおうか！」

背後から攻撃を放ったのは、トリロバイトドーパントであった。トリロバイトドーパントは、頭を軽く振りそれを合図にマスカレードドーパントたちを後ろに下がっていく。

光沢を放つ黒茶色の鎧のような甲殻を身体中に張り巡らせ、両腕は盾のように幅広い甲殻を纏っている。盾のような甲殻が付いた左腕はエターナルの左腕と交差し力の押し合いを行っていた。

「フッ！」

短く息を吐くと同時に直ぐ様体を反転させ、そのままの勢いで右足の回し蹴りを放つエターナル。

避ける暇すらなくトリロバイトドーパントの脇腹に命中。金属に金属を叩きつけるような音が響くが、攻撃を受けたトリロバイトドーパントは微動だにせず、すかさず先程までぶつかり合っていたエターナルの左腕を掴み取る。

「むず痒いな」

マスカレードドーパントの胴体を一撃で粉碎する威力を秘めたエターナルの蹴りを受け、笑いすら溢す余裕を見せるトリロバイトドーパント。

左腕を掴まれたエターナルであつたが、すかさず右拳が白い閃光となつてトリロバイトドーパントの胸に突き刺さると金属音が数回鳴り響く。

一瞬の間に数発の拳を叩き込まれたが、蹴りのときと同様にトリロバイトドーパントからダメージを受けた気配は無い。エターナルの腕を掴む力は緩むことは無かつた。

トリロバイトドーパントの口周辺に円形に並んだ歯牙状の器官が開く、何かを仕掛けてくる前にエターナルは動く。身に纏つたローブの端を掴み、それをエターナルとトリロバイトドーパントの前に翳した。

次の瞬間、開いた牙の奥から光が溢れ、トリロバイトドーパントの口から光弾が放たれた。

ほとんど距離の無い位置から放たれたバスケットボール程の大きさの光弾、エターナルの前に翳されたローブに接触すると爆音とともに白煙が巻き起こる。

「おお！」

アンモナイトドーパントが歓声を上げる。並のドーパントでも致命傷を免れることは出来ない距離で放たれた攻撃。そのままトリロバイトドーパントに近寄ろうとし――

「来るな！」

トリロバイトドーパントからの怒声に足を止めてしまった。

「まだまだ……まだこいつは……！」

白煙が徐々に薄れていくなか、トリロバイトドーパントは見た。

白煙の中で弱まることなく爛々と輝く黄色の妖眼を。

再びトリロバイトドーパントの口の奥が光を放ち始めるが、それよりも早くエターナルの右の掌底がトリロバイトドーパントの顎を打ち上げる。

「がつ！」

思わず口から苦鳴を洩らす、後頭部を覆う甲殻と背中に生やした甲殻が激しくぶつかり合い、頑強な甲殻の下にあるトリロバイトドーパントの骨が軋み、脳が揺れる程の威力を秘めた一撃。

激しく頭部を揺さぶられ、その結果、エターナルの左腕を掴んでいた力が僅かに弛む。その隙をエターナルは見逃さず、トリロバイト

ドーパントの首にエターナルの上段蹴りが叩き込まれる。

先程までのダメージが残っているうちに更なる追撃を喰らわされ、
たまらずエターナルを掴んでいた手を放してしまう。

左腕の自由を取り戻し、ダメージを抜けきれていないトリロバイトドーパントに追い討ちをかけようとしたとき――

「むっ！」

今度は右腕に何かが絡みつки、強い力で引き寄せる。エターナルの視線に映ったのは、子供の腕くらいの太さを持った何本もの白い触手。その先には、それを伸ばすアンモナイトドーパントの姿があった。

「はあああ！」

雄叫びとともにアンモナイトドーパントが触手を振り回す。それに合わせてエターナルの体が宙を舞う。

ハンマー投げのように体を回転させ、勢いをつけたままエターナルの体を壁目掛けて放り投げる。

壁目掛け、矢のような早さで飛んでいくエターナル。背中から壁に衝突するかと思われた瞬間。

「ハッ！」

咄嗟に体を縦に回転させ、両足で壁に着地。そのまま何事も無かったかのように地に降り立つ。

「まだだ！」

アンモナイトドーパントとトリロバイトドーパントがともに並び

立つ。口の周りに生やした触手が広がり、奥にある口から、巨大な水の塊が砲弾のように発射、それに合わせてトリロバイトドールパンが光弾を放つ。

エターナルに向けて放たれた攻撃。しかし、エターナルから逃げる素振り微塵も感じない。迫る水弾と光弾。

エターナルは直撃する直前、体ごと身に着けたロープを振るった。振るわれたロープの流れと同調するかのように、二つの攻撃は軌道を逸らされ、地面を破壊し消失した。

あまりにも呆気なく自分たちの攻撃を無力感されたことに呆然とする二人。そんな二人と同じように周囲も静まりかえる。

「一人だろうが、二人だろうが何人だろうが関係ない。」

そんな連中を見たエターナルの確信に満ちた言葉。

「メモリの格が違う」

沈黙の中、その声はよく響く。

「呆けている場合か！」

怒声とともに、何本もの鉄骨がエターナル目掛け、目にも止まらぬ早さで迫るが、エターナルはその場で跳躍し、それを避ける。

目標を見失った鉄骨は、壁に勢いよく突き刺さり、その衝撃で建物全体が揺れ、天井から埃が落ちてくる。

「ハッ！威勢がいいな」

「ほざけ、死に損ないが」

突き刺さった鉄骨の上に音も無く着地するエターナル、それに強烈な敵意の視線を向けるマンモスドーパント。二人の間で見えざる火花が衝突し、闘争の炎を燃やす。

「お前ら、相手に恐れを感じている場合か！」

マンモスドーパントは視線を向けずに声だけを周りにいるドーパントたちに向ける。

「ミュージアムの一員として逃げることは許されん！死んでも逃げるな！死ぬなら相手に一矢報いてから死ね！」

叱咤するマンモスドーパントの言葉。思い遣りも情けも何も無い言葉。

『う…う…おおおお！』

しかし、ミュージアムという組織に所属している人間を動かし、奮い立たせるには十分な威力であった。

マンモス、トリロバイト、アンモナイトの三体のドーパントに残りのマスカレードドーパントたちが今まで以上の覇気を持ってエターナルに向かっていく。

「命を懸けて……か」

迫るドーパントたちに向けて、嘲笑とも感心とも取れるような正と負の二つの感情が入り交じった言葉をエターナルが呟く。

「なら、お前たちの命がどれ程の見せて貰おうか」

ヒュンヒュンと空気を切り裂く音とともにロープの下から鈍色の光を放つ一振りのナイフが右手の中で回されながら取り出される。暖かな日の光を反射するだけで冷たい光へと変えてしまう鈍色の刀身、やや弧を描いた柄、その柄元にはベルトと同様にメモリを差し込むためのスロットが設けられている。

「来い」

エターナルの専用武器、エターナルエッジを突き付け静かに言葉を放った。

少し離れた位置でマスカレードドーパントたちは一斉に拳銃を取り出し構える。

先程、自分たちの拳銃よりも遥かに強力な攻撃を防いだエターナルには意味の無い行為である。しかし、マスカレードドーパントたちは構わず引き金を引いた。

一斉にに鳴り響く銃声。しかし、エターナルは自らに降り注ぐ銃弾の雨の中を疾走する。

いくつもの弾丸がエターナルのロープに命中する度に力をロープに吸い取られたかのように勢いを殺され地面へと落下。

いくつも弾丸が鈍く輝くエターナルエッジが軌跡を描く度に分割され、無力化されていった。

走るエターナルの刃がマスカレードドーパントたちに届く距離まで来たとき、突然エターナルは後方へと飛ぶ。

一秒も満たない間の後に、高々と飛び上がっていたマンモストーパントの太い鞭のような鼻が地面へと叩きつけられた。

地面を覆う周囲一帯のコンクリートに蜘蛛の巣状のヒビが入り、振り下ろされた鼻も地面深くに潜り込んでいる。

「おおおお！」

マンモスドーパントが雄叫びを上げるやいなや、地面にめり込んでいた鼻を引き抜くのではなく、周りのコンクリートごとそのまま持ち上げられる。

幅が二メートル以上、厚みも数十センチ以上あるコンクリートの塊をエターナル目掛け投げ飛ばす。

エターナルと同じくらいの大きさの物体が、常人では反応出来ない早さでエターナルに迫る。

しかし、エターナルの右手が霞み、銀の光が一瞬煌めく。と同時に目の前の巨大な塊に縦の線が走る。

当たる直前、コンクリートの塊は二つに分断されて、エターナルを避けるようにして、壁に直撃し大穴をあけた。

瞬時にコンクリートの塊を両断したエターナル、しかし休む暇無くエターナルの顔面目掛け何かが飛来する。

反射的に左手の甲でそれを払う。軽い衝撃が走るが、ダメージという程の破壊力はない。ただし、あくまでエターナルにとってはと付け加える必要があるが。

払った左手を見ると、微かに濡れている。

この攻撃を行った者が誰だか容易に想像でき、そいつに視線を向けたとき、先程の小さな水弾が数百の礫となってエターナルに迫っていた。

攻撃を行っているのはアンモナイトドーパント。口から水の礫を絶えず吐き続ける。最初にエターナルに放った水弾がバズーカだとすれば今の攻撃は機関銃のような攻撃である。威力は落ちるが、その分を圧倒的な連射力でカバーしている。

「チッ」

舌打ちをするとともに、エターナルは身に纏ったローブを掴み、盾のようにして自分の前に翳す。

水弾の一発一発の威力は低いが、決して無視できるような威力ではない。

確実に防ぐ為にローブを使用することを選択した。

無数の水の礫が、ローブに当たり、そのまま飛散して唯の水へと戻っていく、エターナルのローブが全ての水弾を弾き飛ばしたとき、構えを解く。

構えを解いたエターナルの眼に写ったのは、視界一杯に迫るトリロバイトドーパントの拳。

マンモス、アンモナイト、マスカレードの攻撃全てはこれに繋ぐ為の牽制であつた。

唸る拳がエターナルの顔面を捉える直前、パシンという乾いた音とともにトリロバイトドーパントの拳の軌道が逸れる。

見れば、エターナルの左手の甲がトリロバイトドーパントの腕にあてられており、それによってトリロバイトドーパントの拳の軌道を無理矢理変えさせられたのである。

攻撃が外れると同時に、エターナルの左手がトリロバイトドーパントの腕を掴み、素早く背後に回り込むと、そのままトリロバイトドーパントの腕を鉤状に曲げ、背中に押し付けて関節を極める。

「ガアアアア！」

曲げれない方向に力尽くで関節を曲げられているトリロバイトドーパントは苦鳴を上げ、拘束から逃げ出そうとするが、両膝の後ろを蹴りつけられると、ガクンと膝から力が抜け、地面に跪いてしまい、そのままの体勢で無理矢理マンモスドーパントたちのいる方向へと体を向けさせられる。

「放せ……！ 放せ……！」

なおも必死になって自由な方の腕で抵抗するトリロバイトドーパント、しかし――

「まあ、落ち着けよ」

エターナルの言葉の後に、右手に持ったエターナルエッジがヒュンヒュンという音を鳴らし、逆手に持ち替えられる。

「何だ！ 何をするつもりだ！」

本能的に危険を感じたのか、焦りを帯びたトリロバイトドーパントの声。

「なあに、大したことじゃない。……ただお前に地獄を楽しませてやるだけさ」

振り下ろしたエターナルエッジの刃が、トリロバイトドーパントの腕の甲殻と肩の甲殻を繋ぐ僅かな隙間に潜り込み、外の甲殻よりも遙かに柔らかい肉を切り裂き、骨を抉る。

「アアアアアアアアア！」

絶叫、恥の外聞も無い心の底からの絶叫。

肺の中にある酸素を全て声に変えても足りないほどトリロバイトドーパントは叫ぶ。

そんな、トリロバイトドーパントの悲鳴を無視するかのように、今度はトリロバイトドーパントの腕の関節を極めている左手に力が籠る。

ミシミシと自らの内部に響く音にトリロバイトドーパントは恐怖し、許しを請う声を上げる

「やめろ！ やめてくれえええ！」

関節の可動域を越えたとき、ゴキリという生々しい音とともにトリロバイトドーパントの腕の関節は完全に破壊された。

エターナルがそのままエターナルエッジを抜き、手を放すと、そのままのめりに力なく倒れる。うつ伏せの状態で小刻みに痙攣を続けたままで、起きる気配はなかった。

「次は誰がこうなりたい？」

マンモスドーパントたちに向け、嘲笑うかのようにエターナルは言った。

Eの開戦／大道克己の章その2（後書き）

いろいろと描写を入れていたら、話がどんどん長くなっていきますね。

克己編はあと二話ほどで完結する予定です。

Eの開戦／大道克己の章その3（前書き）

今回は、前回よりもやや残酷な表現があるのでご注意を

Eの開戦／大道克己の章その3

イタイ……イタイ……イタイ。

今までの生きてきた人生の中で、いまだかつて味わったことのない痛み。

体が少しでも動くたびに、両腕から灼熱のような痛みが走り脳髓を焼く。

クルシイ……クルシイ……クルシイ……。

痛みが走るたびに息が止まりそうになり、体中が震え、満足に呼吸することもできない。

ダレカ……ダレカ……タスケテクレ……。

心の奥底から助けを呼ぶが、誰にも届くことはない。

ナゼコウナッタ……ドウシテコウナッタ……。

なぜ？ どうして？ そんな言葉が心の中で、何百、何千と呟かれては消えていく。

ふと意識の朦朧としている彼の耳に声が途切れ途切れ入ってくる。初めは絶叫、次は悲鳴、その次は苦鳴。

どれもこれもが恐怖に彩られ、そのまま消えていく。

「地獄を楽しみな」

最後に聞こえた声、その声を聞いたとき、彼の中に火が灯る。

アア……ソウカ……アレモコレモゼンブ……。

火は、彼の中にあるあるものを糧とし、どんどんと燃え上がる。

オマエノセイカ……！

彼の内にある負の感情によって燃え上がる憎悪の火、それが他者を焼き尽くそうと動く時は近い。

振り下ろしたエターナルの一撃がマスカレードドーパントの頭から入り股間までを一刀両断する。

左右別々に体を分断されたマスカレードドーパントは右と左の半身が地面に着くとそのまま爆発し塵と化した。

トリロバイトドーパントが戦闘不能状態になってからほんの数分足らずで、マスカレードドーパントたちの数は片手で数え切れる程に減少していた。初めに見せていた動きは微塵もなく、恐怖に引き攣った体でエターナルの攻撃を受けるだけの木偶へと成り下がっていた。

原因は、トリロバイトドーパントに対する拷問紛いの攻撃の結果

である。マスカレードドーパントたちの目の前で慈悲の欠片もない行いによって、マスカレードドーパントたちの心の内に恐怖という感情が強く根付いてしまったのである。

もしかしたら自分もあのような目に合うのではないか？ という考えがマスカレードドーパントたちの動きに制限を与えてしまい、精彩さに欠けた動きにしまっていた。

組織に対しての忠誠心は大いにある。しかし、忠誠心の上から縛り付ける恐怖という名の鎖。逃げてしまいたい、だが逃げられない。不一致な二つの思考の代償はエターナルから送られる「死」という形によって払われていた。

地を滑るようなステップで、新たな犠牲者の前に立ち塞り、刃を構える。また一人マスカレードの数が減らさるかと思われたとき、ヒュンという空気を裂くような音と共に、複数の白い影がエターナルに向かって襲い掛かる。

白い影の正体は、アンモナイトドーパントの長く伸びた触手であった。それが鞭のようにうねり、エターナルを引き裂こうとする。

エターナルは、その攻撃を身を屈め、素早く回避する。先程まで頭部があつた場所にて触手同士が激しくぶつかり爆ぜるような音が響く。すぐさま触手に目掛け、エターナルエッジを振り上げる。弾力のあるアンモナイトドーパントの触手はエターナルエッジによって切り落される。しかし、すぐに切断面から新しい触手が再生され、傷一つない元の状態へと戻ってしまった。再生した触手の群れが、再びエターナルに襲いかかる。

振り下ろすように振るわれた触手をバックステップで回避、空振りした触手が地面を砕く。が、そのままエターナルを追撃する。

槍のよう迫る何本もの触手を手に持ったエターナルエッジや素手で弾き、攻撃を防ぐ。

アンモナイトドーパントの攻撃を防いだのも束の間、エターナルの視界の端に、側面から突進してくるマンモスドーパントの姿を捉える。前面に突き出した自らの牙を武器に、鈍重そうな体格からは

想像できないような速度で向かってくる。

直撃すれば、ただでは済まない威力。しかしエターナルはその場から逃げるのではなく、逆にマンモスパンとに向かって走る。体格では、エターナルを上回るマンモスドーパント。それに自ら走り寄る。

「おおおおお！」

雄叫びとともに更にスピードを上げるマンモスドーパント。その姿に「フッ」と鼻で笑うような仕草をするエターナル。

両雄の姿が交差する。キーンと響く音は小さく、すぐに消えてしまった。交差した後も二人の足は止まらず、そのまま数メートル程離れる。

ちょうど両者が最初に立っていた位置と入れ替わったようであった。一瞬の間の後に地面に何かが落ちる音が響く。

「ぐうおお……！」

その場に膝をつき、顔面を押さえ、声を絞りだしたかのようなマンモスドーパントの苦鳴。

マンモスドーパントの長く伸びた牙の片方は根元から切断されている。地面に落下した物体の正体はマンモスドーパントの牙であった。

「本当ならその自慢の鼻を断ってやりたかったんだが、上手くいかないもんだな」

軽口を言うエターナルに、憎悪を込めたマンモスドーパントの視線が向けられる。しかし、当の本人は涼風にでも当たっているかのように平然とし、手の中にあるナイフをクルクルと回しながら、余

裕に満ちた態度であつた。

顔を押さえるマンモスドーパントにアンモナイトドーパントと残りのマスカレードドーパントたちが集まってくる。

「大丈夫か？」

アンモナイトドーパントの気遣う声。

「……問題ない」

そう答えを返すマンモスドーパントであつたが、既に心身供になり消耗をしていた。恐らく自分を気遣うアンモナイトドーパントも同様であるとマンモスドーパントは思っていた。

自分とアンモナイトドーパントの能力ならば直ぐには、エターナルに命を奪われる可能性は低いと思っている。しかし、周りのマスカレードドーパントたちの能力は一般人を上回るが、ドーパントには遠く及ばない。

そのマスカレードドーパントたちを庇うようにして戦うことによつて、かなりの力を消耗していた。

それでもマスカレードドーパントたちの数を減らすことは防げず、一人また一人と塵と化していった。

二体のドーパントの攻撃を掻い潜り、マスカレードドーパントの命を奪うエターナルの能力を讃えるか、能力的にドーパントを上回るエターナルの猛攻からマスカレードドーパントたちの全滅を防ぐ二体のドーパントを讃えるか、どちらにせよ状況を刻一刻と変化していく。

「そんな風に一ヶ所に集まっていいいのか？　まとめて地獄を楽しむことになるぞ」

言つと同時に黒のローブを翻し、今度はエターナルの方からドーパントたちを攻める。

慌てて拳銃を構えるマスカレードドーパントたち。照準を合わせようとするが、地面は滑るかのように重さを感じさせないエターナルの走りに合わすことが出来ない。

銃口を向けたと思つた次の瞬間には右に移動、再び合わせたら左に移動するなど、左右に激しく移動しながら前進してくる。

そのうちにマスカドーパントの一人が耐えきれずに発砲。照準の合わせてない弾丸はエターナルに掠りもせず飛んでいく。

更に悪いことに、銃口のすぐ近くには仲間のマスカレードドーパントがあり、耳のすぐそばで発砲。そのため発砲音に驚き、銃口の隣にいたマスカレードドーパントが発砲したマスカレードドーパントに思わず顔を向けてしまう。

サクツと軽い音が鳴った。

振り向いたマスカレードドーパントの側頭部に何かが生えていた。黒く弧を描いた物体。

それが柄の部分であると理解したとき、マスカレードドーパントたちの心臓が跳ね上がった。頭にナイフが突き刺さっているという事実に。

「あ……ああ……」

頭部にナイフを突き刺されたマスカレードドーパントは、震える手でそれに触れようとした。しかし――

響く風切り音。

その後に続く破砕音。

先程まで震える手でナイフに手を伸ばしていたマスカレードドーパ

ントの姿は消え、変わりにエターナルがその場に立っていた。

全ては一瞬のこと、ナイフを抜こうとするマスカレードドーパントに、エターナルはまるで獲物を狩る猛禽類のように飛びかかり、マスカレードドーパントに刺さったナイフを抜き取ると同時に頭部を踏みつけ、そのまま地面へと着地。

マスカレードドーパントの頭部は地面とエターナルの足に挟まれ無惨に砕かれた。

慌てて、マスカレードドーパントの一人が銃口をエターナルに向ける。しかし、引き金を引くよりも早くエターナルのナイフを持つ手が動く。

消失したかと錯覚させるようなエターナルのナイフの一撃。エターナルエッジによる銀の閃光は、マスカレードドーパントの拳銃を抵抗無く通過し上下に分割させた。

あっさりと目の前で自らの武器を破壊され、壊れた拳銃を握る手をガタガタと震わせながら立ち尽くすマスカレードドーパント。

「地獄を楽しみな」

そんなマスカレードドーパントの様子など構いもせず、エターナルの無慈悲な言葉とエターナルエッジの斬撃をその身に受ける。

手に持った拳銃と同様に、エターナルエッジを胴体に受け、体を上半身と下半身に分けられそのまま塵と化した。

続けざまにもう一体のマスカレードドーパントを葬ろうとしたとき、エターナルの中で背筋が泡立つような感覚が走り、反射的にその場から離れる。

エターナルが離れたとき、地面から泡が弾けるような音がした後に一瞬にして地面の一部分が赤く染まった。白煙を上げていることから、高熱によって地面が赤熱していることが分かる。

「お前の仕業か……」

エターナルの視線の先には、体を細かく震動させているマンモスドーパントの姿があった。

マンモスドーパントの体は、恐怖によつて震えているわけではなかった。その証拠にマンモスドーパントの体の周囲は歪んで写っている。マンモスドーパントの体からでる熱によつて空気が歪み陽炎が起きていた。マンモスドーパントは鼻先をエターナルに向ける。

エターナルは鼻先を向けられた瞬間にその場から移動。一瞬間の後、エターナルの背後にあった壁が溶け、炎を上げた。

見えない高熱の攻撃。

それを避けたのは、純粹に大道克己が長年培ってきた感覚によるものであった。

「くそ……！」

自分の持つ奥の手を使い、何とか最小限の犠牲で抑えることができたが、またもやマスカレードドーパントたちをあつさりと葬られ、マンモスドーパントは毒づく。

今の現状を打破しようにも、エターナルの力の前に完全に手も足も出ない。エターナルへ使った攻撃は、自らの体温を急激に上昇させ、それを体内の空気と一緒に放出するものであるが、それなりの威力はあるが、射程はあまり長くなく、相手が離れる程威力は下がる。また体温の上昇にはかなりのエネルギーを使用するため限られた時間しか使用できず、使えば使うほどマンモスドーパントは衰弱していくため、多用することも出来なかった。

どうすればいいのか、マンモスドーパントの頭の中で何度も策を捻り出そうとする。

そのとき――

「あつ……」

アンモナイトドーパントの何かに驚いたような声、
アンモナイトドーパントを見ると何かに視線が釘付けになっている。

マンモスドーパントも釣られて、その視線の先を見た。

「なっ……」

そこには、不自然な方向を向いた腕と体液で染まったもう片方の腕をダラリと垂れ下げて立っているトリロバイトドーパントの姿があった。正直、マンモスドーパントの中では、もう戦うことが出来ないと思っていたトリロバイトドーパントが、立ち上がっている。マンモスドーパントにとっては嬉しい誤算である。まともに戦うことは出来ないが、まだ援護する程の力は残っているはず、マンモスドーパントはまだ自分たちは戦える、そう思っていた。このときまでは――

イタイニクイタイイタイニクイタイアイツメアイツメアイツ
メイタイニクイコロシテヤル

トリロバイトドーパントの思考は一つの感情によって支配されていた。

その感情の名は憎悪。

エターナルへ対する憎しみや怒りは、湧水のように際限無く湧き、

ヘドロのようにトリロバイトドーパントの中で蓄積していく。

コロシテヤルコロシテヤルコロシテヤルアイツメアイツメアイツメ
メゼツタイニゼツタイニゼツタイニゼツタイニアイツヲコロシテヤル

トリロバイトドーパントの体内にあるガイアメモリは、それそのものに強い力を内包し、その力は人にとって毒と同じであり、挿入した人間の人格に多大な悪影響を与える。

そして強い感情は、ガイアメモリの力と深く結び付きより強く引き出す。ガイアメモリの毒がトリロバイトドーパントの精神を歪ませ、それによって生まれた負の感情はガイアメモリの力を更に引き出し、強まった力でトリロバイトドーパントの歪みをますます強める。

ガイアメモリと負の感情による途切れることの無い無限連鎖。それによりトリロバイトドーパントの精神は人を逸脱しはじめていた。

コロシテ……コロシテ……ヤ……キギキギ……ギギ……ココココ……
……ヤバババギギギギギギギ……

それが頂点に達したとき――

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアア！」

彼は人では無くなっていた。

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアア！」

トリロバイトドーパントが突如として放つけたたましい咆哮。

マンモスドーパントたちは思わず耳を押さえ、エターナルも仮面の下で僅かに顔をしかめた。それほどまでの音量であった。

咆哮を上げ続けながら、トリロバイトドーパントの体は変化する。手や足がまるで空気を入れられた風船のように内側から膨らみ続ける。それに合わせて顔や胴体も膨らみ続けた。またそれだけでは留まらず、胴体からは複数の足が生え始め、顔も巨大な複眼と触角を備えていた。

全ての変化が終わったとき、そこには大型トラックを上回る程の大きさの巨大な三葉虫がいた。

ガチガチと複数ある足で地面を叩き、全身を覆う甲殻は黒々と大理石のように変化していた。

突然の仲間の変化にマンモスドーパントたちは戸惑い、息を呑む。が、それを無視するかのように巨大化したトリロバイトドーパントはエターナルの方を向き、上半身を立たすと、変化前よりも更に長く鋭さを増し、凶悪になった歯牙状の器官を開き、その奥の口を見せる。

そして、今までとは比較出来ない大きさの光弾を口から放った。バスケットボール程の大きさだった光弾は、直径一メートル程の巨大さになり、エターナルを襲う。

「ふん！」

エターナルエッジを構え、声とともに巨大光弾を一刀両断。二つに別れ、エターナルの背後の地面を砕く。がトリロバイトドーパントはお構い無しに続けざまに何発も放ち続ける。

エターナルは、エターナルエッジで防ぐのを止め、その場を飛び去る。先程までいた場所に巨大トリロバイトドーパントの光弾が立って続けに命中、大きく地面を抉った。

走るエターナルを追うようにして、体をエターナルに向けながら光弾を吐き続ける。

直撃することはなかったが、それでもエターナルの接近を許さないほどの弾幕で一方的にエターナルを攻め続けていった。

自分たちを追い詰めた存在が逃げている。その光景はマンモスドールパントたちを痛快な気持ちにとさせていた。しかし、事態は思わぬ方向に変わっていった。

巨大トリロバイトドーパントの放った光弾、エターナルが避けた
それが射線上にいたマスカレードドーパントに直撃する。

「ぎゃあ ああああああ！」

断末魔を上げ消失するマスカレードパンツ。

しかし、巨大トリロバイトドーパント仲間一人巻き添えにしても全く反応することなくエターナルに攻撃し続ける。

「お、おい！ お前なにをしたと思ってるんだ！」

堪らず巨大トリロバイトドーパントに近寄るアンモナイトドーパント。

しかし、巨大トリロバイトドーパンはアンモナイトドーパンを見ると返事をする代わりに大きく口を開き。

「え？」

アンモナイトドールの殻の上から喰らいついた。

鋭い牙を使い殻を割る。バリバリと固いものが砕ける音とともにアンモナイトドールパントの体は巨大トリロバイトドールパントの口内へと入っていく。

「うわあああああ！だ、誰か誰かたすけてくれえええええ！」

なりふり構わずにアンモナイトドーパントは泣き叫ぶ。が誰も動かない。マンモスドーパントたちは巨大トリロバイトドーパントの凶行に呆然とし、エターナルにいたっては最初から動く気配はない。

「暴走か」

ドーパントがドーパントを喰らう光景を見ながら冷静にエターナルは呟く。

古代生物のガイアメモリと強く結びすぎたせいで、頭の中まで古代生物並みの状態になってしまったとエターナルはそう判断した。

「だがまあ……」

固いものが碎ける音が消え、柔らかいものがクチャクチャと引き千切られ、潰される音へと変わる。

巨大トリロバイトドーパントの口から垂れ下がる二本の足、先程までもがいていたが今は動く気配はない。

「もう人間じゃないな」

冷静に呟くエターナルの言葉の後、アンモナイトドーパントの体全てを喰らい尽くした。食事を終えた巨大トリロバイトドーパントは再びエターナルに視線を向ける。例え暴走してもエターナルに対する憎しみは消えることはないらしい。

「もう食事はいいのか？　せっかくだしゆっくり楽しめよ」

エターナルはエターナルエッジを巨大トリロバイトドーパントに突きつける。

「それがお前の最後の晩餐なんだからな」

エターナルの言葉を理解したのかそうでないのかは分からないが巨大トリロバイトドーパントは咆哮を上げるとエターナル目掛け突進していった。

Eの開戦／大道克己の章その3（後書き）

次回で克己編はラストです。次は一躍有名になったあのキャラが主役の話を書いてみたいと思っています。

Eの開戦／大道克己の章その4（前書き）

これにて克己編は終わりです。ようやく次のキャラの話に移れますね。

感想・質問などお待ちしております

10/4文章の一部を変更及び加筆しました。

Eの開戦／大道克己の章その4

見上げんばかりの巨体をもつトリロバイトドーパントがエターナルに目掛け、エターナルの存在全てを粉碎せんといわんばかりの勢いで頭から突っ込んでくる。大型トラックを上回る体からは想像できないような速さで複数の足を動かし、それが驚異的なスピードを生み出す。

自らの体を武器にしての攻撃。しかし、エターナルの姿に怯えも動揺もなく一分も無駄のない構えを取り、それを迎え撃つ。

巨大トリロバイトドーパントの頭部がエターナルに接触するかしないかの瞬間、エターナルの体が一瞬霞む程の速さのサイドステップで回避、そのまま相手の速さを利用し、頭部の側面にエターナルエッジを突き立てる。ガガガという凄まじい音と火花を散らし、頭部から胴体まで、一気にエターナルエッジで斬りつけた。しかし、エターナルエッジから伝わってくる感触にエターナルは短く舌打ちする。巨大トリロバイトドーパントの甲殻を斬りつけたが、返ってきたのは甲殻の表面を浅く削った程度の手応えしかなかったからだ。エターナルエッジの切れ味を持っても、巨大トリロバイトドーパントの甲殻に刃を突き立てることは出来なかった。

突進をかわされた巨大トリロバイトドーパントは、そのままの勢いのまま壁に向かって一直線に駆け抜けていく。

誰もがそのまま壁に衝突し、壁に大穴を開けるものだと思っていたが、ここで予想外のことが起きた。

壁が迫ってきたとき、巨大トリロバイトドーパントは上半身を一気に持ち上げ壁にいくつもの足を突き立て、勢いを殺さぬまま壁を垂直に駆け昇る。

「なっ!?!」

ミュージアムの誰かが驚きの声を挙げる。しかし、それを誰も咎めない。巨大トリロバイトドーパントが地面と変わらない速さで壁を這う姿は余りに衝撃的で、他のメンバーも声を出さないだけで、その心中は驚愕に染まっていた。

壁に張り付く巨大な三葉虫の姿、まともな神経の持ち主ならば生理的な嫌悪感を感じて、身体中に鳥肌を立ててもおかしくない光景である。

壁に張り付いた巨大トリロバイトドーパントは、ある程度の高さまで昇ると、巨体の上半分の足を壁から放し、後ろに反らせる。

上下逆さまの状態の巨大トリロバイトドーパントの複眼がエターナルを見る。

「ギアアアアア！」

巨体を震わせ、建物全体が揺れる程の音量で鳴き声をあげる巨大トリロバイトドーパント。巨大化前はまだ人間の声であったが、今のトリロバイトドーパントの鳴き声は、生物の鳴き声にガラスを引っ掻いた音を足したような、酷く不快感を与えるものであった。

鳴き声が終わると今度は、エターナルに向けて巨大光弾を吐き出す。すでに光弾の速さを放たれるタイミングを覚えたのか、エターナルは光弾が放たれときには移動しており、さっきまでいた場所から数歩先に立っていた。だが巨大トリロバイトドーパントは、すぐにエターナルのいる位置に目掛け、次の光弾を吐き出す。それも避けるエターナルであったが、別の位置に移動した次の瞬間には、また新たな光弾がエターナルに迫っていた。

再び光弾を回避するが、今度は立ち止まらずに、巨大トリロバイトドーパントに向かって駆け出す。

遠距離用の攻撃を回避し続け、チャンスを狙うことよりも、あえて危険を覚悟して巨大トリロバイトドーパントの懐に潜り込むことを選んだのである。

しかし、巨大トリロバイトドーパントも相手の狙いがわかったのか、それともただの本能に従った行動なのかはわからないが、上体を仰け反らせたまま壁に張り付いた下半分の足が高速で動き、壁を平行に移動し始めるた。

下半分の足だけにもかかわらず、その速度はエターナルの走るスピードを上回っており、エターナルは巨大トリロバイトドーパントとの距離を縮めることが出来ない。

壁を碎きながら走る巨大トリロバイトドーパント、距離がある程度空いたならば、直ぐ様仰け反らせた状態の上半分の口から光弾を吐き出し続ける。前後左右へ素早く移動することが出来るエターナルの能力と克己自身が持つ高い身体能力によって、光弾は直撃することはなかったが、エターナル自身の攻撃も届かせることが出来ず膠着状態となっていた。

何発目かの光弾を回避したときに、エターナルの視界にあるものが映る。

それは、今や完全に傍観者となっていたマンモスドーパントたちの姿であった。

その姿を見たときに、エターナルは何かを思いつき、仮面の下で口の端を吊り上げ、誰にもわからない冷たい笑みを浮かべる。

巨大トリロバイトドーパントの光弾を回避したと同時に巨大トリロバイトドーパントに背を向け、一気に駆け出すエターナル。目指す先にあるのは、マンモスドーパントたち。

巨体からは想像も出来ない程の速度で動き、絶えず攻撃を繰り出し続ける巨大トリロバイトドーパント。そのトリロバイトドーパントの攻撃を回避し続け、いまだに無傷の状態であるエターナル。文字通り人外同士の戦いに、マンモスドーパントたちは手を出すこと

が出来ず、ただ見ていることだけしか出来なかった。

エターナルは勿論のことだが、仲間だった筈のトリロバイトドーパントに恐怖の感情を覚えてしまったからだ。自分たちの目の前で仲間であった筈のアンモナイトドーパントを同じく仲間であったトリロバイトドーパントが貪り喰う。マンモスドーパントたちの精神に多大な衝撃を与えるには十分過ぎる程の光景であった。

恐怖と圧倒的な実力差によって動けないのは、マスカレードドーパントたちだけではなく、一見平静を保っているマンモスドーパントも同じであり、心の中は焦りと混乱に満ちていた。

マンモスドーパントは今の状況を必死になって冷静を装いながら考える。敵であるエターナルは、今巨大トリロバイトドーパントの相手に集中しており、今なら不意打ちを成功させる可能性が高い。しかし、今戦っている巨大トリロバイトドーパントもほとんど敵のような状態となっている。

今手を出せば、必ずどちらかの攻撃をされる可能性が高く、最悪の場合両方を敵に回してしまう可能性もある。

下手に手を出したならば火傷ではすまない、それこそアンモナイトドーパントの二の舞になってしまう。

マンモスドーパントの選択肢の中に逃走という言葉が浮かぶ、だがここで逃げたのならば、ミュージアムの中でのマンモスドーパントの地位は確実に落ちる。

今まで築き上げてきたものを自らの手で壊す。ある意味では死を選ぶよりも困難な選択である。

しかし、そう思ったのも束の間、エターナルが巨大トリロバイトドーパントの攻撃を回避すると、自分たちに向かって走り始めた。そうそう簡単には、自分の思惑通りにはいかないことは百も承知であるが、いかにして自分にとって有利な状況へと持ち込むか、エターナルがこちらに向かってくる短い時間の間、焦燥にかられながら必死になって頭を働かせる。

それと同時に、エターナルが自分から離れていつているのに気付

いた巨大トリロバイトドーパントは、後ろに反らせた上半身を更に反らせ、二つ折りのような状態になると一気に上半身を戻し壁に叩きつける。

建物全体が揺れる程の衝撃が走ると同時に壁に叩きつけた反動の勢いで巨大トリロバイトドーパントの巨体が、壁に当たったスーパーボールのように飛ぶ。その大きな体を球体のように丸め、自らの体を武器にしてエターナルを狙う。マンモスドーパントたちに向かってくるエターナル、更にそのエターナルに向かってくる巨大トリロバイトドーパント。

マスカレードドーパントたちは慌てて逃げようとするが間に合わない。そしてマンモスドーパントは、二つのうちどちらかに決断をしなくてはならない。しかしその猶予は最早残ってはいなかった。

巨大な塊が地に衝突するとともに、地面が一気に捲り上がる。地面を覆うコンクリートは粉碎され、その下にある土砂が噴出する。

エターナルに狙いを定めた巨大トリロバイトドーパントの体ごと使った一撃により残り少ないマスカレードドーパントも巻き添えをくらう。着弾のすぐ近くにいたマスカレードドーパントは、トリロバイトドーパントの体から生まれた衝撃に体全てが吹き飛び、自らが死んだことに気付かぬまま塵と化し、それよりも離れた位置に立っていたマスカレードドーパントもその余波によって、突風の中を舞う木の葉のように飛ばされ壁に激突、そのまま息絶えた。

巨大トリロバイトドーパントがいる場所からちょうど真正面にあたる位置にマンモスドーパントが仰向けに倒れている。頭の前から爪先までピクリとも動かずまるで死体のような姿でそこにいた。

土煙がまだ舞い続ける中、球体の状態から戻った巨大トリロバイトドーパントの複眼が有るものを捉える。

それは、エターナルが身に付けていた黒のローブ。ローブ越しに

ら見て分かる凹凸が一人がロープの下にいることを証明していた。そのロープに近寄っていく巨大トリロバイトドーパント。巨大トリロバイトドーパントがすぐ側まで来たとき、ロープが僅かに動き、ロープの端から震える指先が現れた。

それを見た瞬間、巨大トリロバイトドーパントの上半身が大きく持ち上げられ弓なりの状態となると、戻す勢いのまま大槌のように振るった頭部をロープの上越しにエターナルへと叩きつけた。

建物全体が震えたかのような錯覚を覚える程の揺れ、例え耳を塞いだとしても脳髄を揺さぶるのではないかと思える程の破碎音、巨大トリロバイトドーパントの渾身の一撃は事情を知らない人間が建物の近くを通ったならば一種の天災が起こったと思わせる威力であった。

降り下ろした頭部を持ち上げる巨大トリロバイトドーパント。持ち上げた下にあるのは凹凸が無くなり、巨大トリロバイトドーパントの頭部によって無理やり平面にされたエターナルのロープがあった。

巨大トリロバイトドーパントの円形に並んだ牙がカシャカシャと音をたてる、それはまるで笑っているかのような光景であった。

「どうした？随分楽しそうだな」

それを打ち破るかのように巨大トリロバイトドーパントの頭上から響く声、それと同時に白い影が巨大トリロバイトドーパントの頭の上に降り立つ。

「俺にも教えてくれないか？何が面白かったのか」

巨大トリロバイトドーパントの頭上に降り立ったのは、先程巨大トリロバイトドーパントの一撃で葬られたかと思われたエターナルであった。ただ前の姿とは少し違い身に纏っていたロープは無く、

全身に巻き付けてあるコンバットベルトがあらわになった姿をしていた。

「ああ……もしかしたら自分のお仲間を潰したのが面白かったのか？ いい趣味をしているな」

エターナルが巨大トリロバイトドーパントから姿を隠した方法はいたって単純な方法である。背を向けて、マンモスドーパントたちに向かったあと、エターナルが巨大トリロバイトドーパントの全身を使った体当たりを避けると同時に近くにいたマスカレイドドーパントに飛び掛かり、死なない程度の勢いで頭を地面に叩きつけながら押し倒し、ともに動けない状態にする。その後、身に纏ったロブを被せ巨大トリロバイトドーパントの視界に入る位置に適当に放っておき、相手の視線が囷に釘付けになっているうちに相手の頭上へと飛び上がる、いたって単純な策であるが、殆ど本能で動いている巨大トリロバイトドーパントには十分な策であった。

頭の上に飛び乗ったエターナルを必死になって振り払おうと、巨大トリロバイトドーパントは頭部を左右に大きく振るう。

「おっと」

しかし、巨大トリロバイトドーパントの抵抗をエターナルは巨大トリロバイトドーパントの頭部に生えた触覚を片手で掴み、落とされないようにする。

それでも巨大トリロバイトドーパントは動くのを止めない。必死になってエターナルを振り払おうとする。

「やれやれ、大人しくしてくれよ」

余った片方の手に握られたエターナルエッジが光を反射し、銀色に

輝く。

「なあ？」

頭部と胴体の中心、繋ぎ目に位置する甲殻と甲殻の僅かな隙間の部分にエターナルエッジの刃が滑り込む。刃が深々と入ると共に黄土色の体液が噴出する。

「ギアアアアアアア！」

巨大トリロバイトドーパントの苦痛に満ちた絶叫が響く。巨大な体を激しく震わせ、痛みを生み出す原因となったエターナルを必死になって振り落とそうとするが、しっかりと触角を掴んだエターナルの手は離れず、また柄元まで巨大トリロバイトドーパントの体内に突き刺さったエターナルエッジも抜けず、巨大トリロバイトドーパントが身を捻らせる度に更に傷を深く抉っていく。

「フン！」

激しい抵抗の中でもエターナルは、突き刺したエターナルエッジを引き抜くともう一度同じ場所にと突き刺す。

再度上がる巨大トリロバイトドーパントの絶叫。その中には、痛みによる苦痛だけではなくもっと切実な感情、いわゆる恐怖の色が混じっていた。一度はエターナルに再起不能寸前にまで追い詰められたトリロバイトドーパント、そのときの記憶が今甦り始めているのかも知れない。

「さて、もう暴れ続けるのも疲れただろ？」

エターナルが突き刺さったエターナルエッジの柄を一気に捻る。

粘着質な音が鳴り、巨大トリロバイトドーパントの体液がより一層強く噴き出す。

その傷を抉られる行為に巨大トリロバイトドーパントは絶叫を上げ、背を大きく仰け反らせ、一瞬動きが止まる。

「ゆつくりと休め」

柄から手を放し、大きく振りかぶると手の五指を軽く曲げる。

「永遠にな」

引き絞られた弓の弦が矢を放つように、腕に溜め込まれた力が一気に放出、白い影の軌跡を描きながら振り下ろされた。

振り下ろされた位置にあるのは突き刺さったエターナルエッジの柄、その柄頭に掌底が叩き込まれる。その一撃によってエターナルエッジ全体が巨大トリロバイトドーパントの中に侵入する。

肉を裂き、体液を掻き分け、その先にあるものを断ち切ったとき巨大トリロバイトドーパントの体が一瞬震えた。

巨大トリロバイトドーパントの絶叫はもう建物の中で響くことはなかった。

「う……うああ……」

体中を走る鈍い痛みとともにマンモスドーパントは気絶から目を覚ます。強い衝撃を頭にも受けたので、いまだ覚醒仕切っていない頭を軽く振りながら立ち上がった。

どこか腑抜けのような様子で周りに目を向けるマンモスドーパント。もうマスカレードーパントたちの姿はない。

気絶する前とは違い、静か過ぎる建物に不安を感じながら視線を

動かしたとき、ソイツはいた。

気絶前とは違って身に纏ったロープは無く、白い背中をマンモスドーパントに向けて立つエターナル。そして、その足元でうつ伏せになって倒れている黒いスーツの男。

マンモスドーパントの心臓が跳ね上がる。その黒いスーツの男には嫌という程に見覚えがあるからだ。

マンモスドーパントの部下にしてトリロバイトメモリの力に吞まれ暴走していた筈だった男。

「お目覚めか？」

エターナルが背後のマンモスドーパントに気付いたのか最初から分かっていたのかは分からないが、マンモスドーパントがトリロバイトドーパントだった男を見つけたと同時に声をかける。

振り返るエターナル、その手の中には何かが握られていた。

「そ、それは……！」

エターナルの手の中に握られているモノに気付きマンモスドーパントは動揺の声を上げる。それはトリロバイトドーパントが使っていたガイアメモリだった。

ドーパントと同化したガイアメモリを強制的に体内から排出する方法は限られている。一つは『マキシマドライヴ』と呼ばれるガイアメモリの力を倍以上に引き出し、その威力を相手に叩きつける方法であるが、これは仮面ライダーと呼ばれる人物たちしか使えない。またこの攻撃を受けるとガイアメモリは破壊されてしまう。エターナルは原型を保った状態のガイアメモリを持っているのでこの方法を行ってはいない。ドーパントからガイアメモリを取り出すもう一つの方法、それは使用者が死亡した場合である。

ガイアメモリは基本的には、使用する前に使用者の体に使用するガ

イアメモリの登録を行うコネクター処置がある。これにより使用するガイアメモリは専用のコネクター以外では使用出来なくなる。そのため、万が一使用者が死んだ場合自動的に登録は解除され、また新しい使用者が使えるようするシステムが組み込まれている。

故にエターナルの手に握られたトリロバイトのガイアメモリは、エターナルの足元で倒れている男がどうなっているのかを示す答えとなっていた。パキリという音が鳴り、エターナルの手に握られたガイアメモリが砕かれ、手からガイアメモリの残骸が溢れ落ちる。

「く……くそ……」

エターナルがマンモスドーパントに向かって一歩一歩近寄ってくる。マンモスドーパントは呻くように言葉を洩らしながら、エターナルへ対する恐怖を無理矢理心の奥底に押さえつけ身構える。

「そんなに必死になって構えるなよ。今お前が俺に恐怖の感情を抱いているのが透けて見えるぞ」

構えるマンモスドーパントに嘲笑を混ぜたエターナルの言葉を浴びせる。

「だ……黙れ！」

「凶星か？」

マンモスドーパントの怒声を再度嘲笑で返すエターナル。

「貴様に……貴様なんぞにいいい！」

咆哮のような声とともにマンモスドーパントはエターナル目掛け

突進する。

「おおおおおお！」

大きく振り上げた拳がエターナルの顔面に向けて放たれる。しかし――

「フッ！」

それが届くよりも早く、膝を軽く曲げ身を低くした姿勢のエターナルが前に踏み出す。繰り出された拳はエターナルの頭上を通過して回避される。パンチを避けられたことにより、前のめりの体勢になったマンモスドーパントの鳩尾にエターナルの膝が突き刺さる。

「ッ！？」

マンモスドーパントの体がくの字となり、声無き悲鳴と肺の中の酸素が吐き出させられる。しかし、エターナルの攻撃は止まらない。直ぐ様、下から突き上げる掌底がマンモスドーパントの顎を跳ね上げ、無理矢理姿勢を真っ直ぐにさせると、脇腹にエターナルのミドルキックが叩き込まれる。肉が潰れるような鈍い音、マンモスドーパントは激しい痛みの中、反射的に蹴られた場所に手を当ててしまう。

それすらもエターナルは許さないのか脇腹に手を当てた方の肩に手刀を叩きつける。エターナルの手刀によって湿り気を帯びた破砕音のあとに脇腹に当てていた手がだらんと垂れ下がる。

「うぐあああ！」

苦鳴を上げるマンモスドーパント。だがエターナルは一切の迷い

も無く先程蹴りを当てた脇腹にエターナルエッジを突き刺し、そこから肩にかけて斜めに切り上げた。

「う……あああ……」

立て続けの攻撃にマンモスドーパントの足は力を失い、その場に正座のような形で座りこんでしまう。

エターナルが左手を握り締めると、描かれた青い炎の紋様が具現化したかのように燃え立つような蒼炎と酷似した力が生み出され、エターナルはそれを左拳に纏わせたまま、座り込むマンモスドーパントの顔面に放った。

砕け散る残りの牙と血の軌跡を描きながら、マンモスドーパントの体が宙を舞う。

「それじゃあ、これで幕引きとするか」

エターナルはロストドライバーのスロットに差し込まれたエターナルメモリを引き抜くと、エターナルエッジに設置されたもう一つのスロットに差し込み、指先でスロットのスイッチを起動。

『ETERNAL MAXIMUM DRIVE』

「さあ、地獄を楽しみな」

エターナルメモリが生み出す力が、エターナルエッジを通じてエターナルへと流れ込む。

流れ込んできた力は、エターナルの右足へと収束されていくと同時にエターナルは飛び上がり、マンモスドーパントを穿つ凶器へとその身を変える。

宙を舞うマンモスドーパントが放たれたソレ回避出来る筈もなく、

マキシマムドライブによって生まれた力の余波が青の螺旋を創り出し、捻じり込むよう突き刺さるエターナルの右足に込められたエターナルメモリの力がマンモスドーパントを襲ったとき、建物の内部全体を照らす青の閃光が走った。

「う……う……」

先程までマンモスドーパントだった男は呻き声を上げながら倒れている。その顔は病人のように青ざめ、目の下には重度の不眠症患者のような隈が出来ていた。

男のすぐ側には男が使用していたガイアメモリが砕けて残骸となつて落ちていた。

「さてと」

呻く男の状態を無視し、男の首を掴みそのまま持ち上げる克己。既にエターナルの変身は解かれ、元の大道克己の姿となっていた。

「こいつの慣らし運転には丁度いい手応えだったな、お前たちは」

そう男に笑いかけながらも徐々々に首を締め上げていく克己。男も力無い手で克己の手を離そうと試みるが全く成果は無い。血走った目を克己に向けながら口をパクパクと動かす。

「ぐ……」
「ぐがが……！」

「何だ？ 何か言いたそうだな。聞いてやる、言ってみろ」

歩いている途中、何かに気付きその場に立ち止まり、ポケットに手を伸ばすと中から手の平に収まるほどの大きさの通信機が取り出される。

「俺だ」

通信機に耳を当てる克己。通信機の方こうから誰かが喋る。

「ああ、そうか成る程。構わない。そのまま接触してくれ」

克己は口の端を吊り上げて笑う。

「ああ、奴等にもメモリ集めの手伝いをして貰おう。……ああ、大丈夫だろう。一応探偵なんていう肩書きを持っているからな。探し物は得意だろ？」

皮肉気に笑う克己。

通信機の先の誰かが二、三言喋る。

「ああ、頼むよ。プロフェッサー・マリア」

その言葉を最後に通信機を切り、ポケットに仕舞う。

再び歩み始める克己。今の彼の歩みを止める者は誰もいない。

大道克己は進み続ける、自らの野望^{ゆめ}を成し遂げるその瞬間まで。

Eの開戦／大道克己の章その4（後書き）

最後辺りに使ったエターナルのマキシムドライブは、今度のVシネマで使ってくれないかなー、という個人的な願望で出してみました。

もし、使ってくれたらきちんとした描写を入れてみたいですね。

克己編ドーパント設定（前書き）

克己編に出てきたドーパントたちの設定です。
公式サイトを参考につくってみました。

克己編ドーパント設定

マンモス・ドーパント

身長・230cm

体重・250kg

特色/力：分厚い毛皮と筋肉による天然の鎧を纏い、強力な腕力や鋭い牙を持ち、体内で高熱を生み出し放射することも出来る。

約400万年前に生息し氷河期に絶滅したといわれる「マンモス」の力を持った動物型ドーパント。非常に強力な腕力を持ち、中央に垂れ下がった長い鼻も同じくらいの力を持ち、手のように器用に動かすことが出来る。鼻の左右から伸びた牙は鋭く、鋼鉄も貫通させることが出来る。

マンモスドーパントの奥の手に高熱放射があるが、この技はあくまで生物としての能力を応用したもので、本来のマンモスのガイアメモリの力ではない。そのため急激な体温上昇に必要なエネルギーを大量に消費するので多用出来ず、また上昇させる体温にも限度があり、一度使った後には体温を下げるためにある程度のインターバルを置かなければならない。

変身するのはマスカレードを率いていたリーダー格の男。生体コネクタの場所は右の首筋。

自分の地位を守るためには周りの人間を良く扱うことが重要だと思っているので人望はそこそこあるが、地位に固執する傾向もある。エターナルと戦うがエターナルと克己の能力の差に終始押されっぱなしであり、仲間の暴走もあって惨敗した。最後にはエターナルに膝を尽かせられる程の連撃を受けたあとに至近距離でマキシマドライブを受けメモリブレイクされ、変身が解けた状態で克己に首を締められ、絶命した。

アンモナイト・ドーパント

身長：205cm

体重：200kg

特色／力：伸縮自在で再生も行うことのできる十数本の触手、口から発射する威力の調節が可能な水弾。

中生代白亜紀、およそ3億5000万年前に海洋で広く生息していた「アンモナイト」の力を持ったドーパント。巨大な貝殻を背負ったような姿をしており、水中では非常に俊敏に動くことができる。地上での速さは水中での速さの約三分の一程度まで落ちる。貝殻の口からは触手と顔を覗かせている。貝殻から手足も出ているが中に仕舞うことも出来る。触手は自由に伸ばすことができ、最大でも数十メートル程の長さにすることが可能。この触手は非常に弾力性が強く鞭のようにして使えば、コンクリートも決ることが出来る。またこの触手は切断されてもいくらでも再生することが可能。触手に覆われた口からは、体内で生成した水を弾丸のように飛ばすことができ、連射速度や弾の大きさも調節することが可能、小さな水弾を機関銃のように連射したり、大きな水弾を砲弾のように飛ばすなど使い分けが出来る。

変身するのはリーダー格の男の取り巻きその一。生体コネクタの場所は右の首筋。他の構成員たちよりもやや上の地位におり、リーダー格の男からの信頼も厚く、下の人間と上の人間とを繋ぐパイプラインの役目をしているので、仲間の輪を重要視している。

エタールとの戦いでは、直接的な戦闘よりも仲間の援護をすることが多かったが、途中暴走したトリロバイトドーパントがマスカ

リードドーパントの一人を殺害したことに堪らず問い詰めようとするが、暴走したトリロバイトドーパントに敵とみなされ捕食されるという無惨な最期を遂げる。ちなみにメモリはこのときトリロバイトドーパントの口内に排出され、そのまま一緒に噛み砕かれていく。

トリロバイト・ドーパント

身長：210cm

体重：220kg

特色／力：非常に頑丈な甲殻で全身を覆い、口からは光弾を吐き出すことが出来る。また自由には出来ないが巨大形態にも変身が可能。

カンブリア紀に存在した節足動物「トリロバイト」いわゆる三葉虫の力を持ったドーパント。

全身を頑丈な甲殻で守っており、戦車砲にも耐えられ強度をほこっている。しかし、あくまで頑丈なのは外側を守る甲殻だけなので、関節部分や体内の骨などの固さは平均なドーパントたちと変わらず、そこを攻められると非常に弱い。

口からはガイアメモリの力を収束させた光弾を放つことが出来る。連続して放つことは出来ないが、ともに直撃すれば並のドーパントを行動不能にする程の威力が秘められている。

変身するのはリーダー格の男の取り巻きその二。生体コネクタの場所は右の首筋。

リーダー格の男の取り巻きその一とほぼ同じ地位にいるが、自分よりも取り巻きその一がリーダー格の男に気に入られていることに若干の不満を覚えており、取り巻きその一の立場を自分のものにするために危険なことを率先してやり、点数を稼いでいる。

エターナルとの戦いでは、率先して戦いを挑むが圧倒的な実力の前に尽く攻撃を防がれる。マンモスドーパントたちとの連携で隙をつくり、攻撃をするがあっさりと防がれ、逆にエターナルに拘束され、片方の肩にナイフを突き立てられ、無事な方の腕もエターナルによって折られ、そのまま失神という悲惨な目に遭う。

しかし、その後エターナルの拷問紛いの攻撃によって怨みと怒りが爆発し、ガイアメモリの力を限界まで引き出した巨大形態になるが、ガイアメモリの影響を強く受けすぎて暴走してしまい、エターナルへの攻撃中に仲間のマスカレードーパントを巨大光弾によって吹き飛ばし、それを咎めに来たアンモナイトドーパントを喰い殺すという暴挙に出た。

ガイアメモリの力を限界まで引き出したお陰でエターナルとは一進一退の攻防をするが、ガイアメモリの影響を受けすぎて、本能の赴くままに動くという弱点を衝かれ、エターナルの簡単な策に引っ掛かり、残りのマスカレードーパントたちを全滅させたばかりか、エターナルに絶好のチャンスを与えてしまった。

最期は、背中に乗ったエターナルのエターナルエッジによって首の骨を断ち切れ命を落とした。

Lの抱擁／泉京水の章（前書き）

NEVER随一の色物キャラ、泉京水が主役の話です。
気になった点があればご指摘のほどお願いします。

Ｌの抱擁／泉京水の章

人通りがまばらな道の近くにあるオープンカフェ。

テーブルが十個程並び、それに合わせるかのように観葉植物が囲むようにして置かれている。テーブルの半分に客が座っており、まずまずの賑わいを見せている。一つ一つテーブルの近くに大きめの観葉植物たちが置かれているのは、お客に対してささやかな心配りなのか、それともただ単純に店側の趣味のどちらかであろう。

誰もがこの時間、テーブルの上に置かれたサンドイッチやケーキ、紅茶などを楽しんでいるはずなのだが椅子に座っている誰もが手を止めて、ある一点を見つめている。

その視線の先にあるのはオープンカフェの端にあるテーブル、正確に言えばそのテーブルで食事を摂っている人物が周囲の視線を集めていた。

まず気になるのは、その人物の服装。全身を上下ともに黒一色に統一し、背中にはでかでかと危なげな感じのするマークが刻んである。どうみてもカフェで食事を摂るような恰好ではない。

次に気になるのは容姿。テーブルに座っているのは大柄な男性である。ただ大きいだけではなく腕や脚や背中など男が着ているジャケット越しに素人が見ても鍛え上げた肉体をしていることがよくわかる。また頭髪は短く切り揃えてあり、顔立ちはやや細めだが鋭さ感じさせる目、整えられた顎髭など気の弱い人ならば萎縮してしまいかもしれない強面である。女性客ばかりいるこのカフェには確かに場違いかもしれないが、客たちの最も注目している点はそのではない。客たちが最も注目している点、それは男の拳動にあった。

男の拳動を一言で言えば「変」その一言に尽きる。

テーブルの上に置かれたティーカップの取っ手を小指を立てながら指先で掴み、中にある紅茶を飲んだならば「おいし」と一言いった後に同じく小指を立てた手で紙ナプキンを使って口を拭う。

仕草の一つ一つが妙に女性的であり呟いた声も妙に高く、見た目とのギャップが有りすぎるせいで、その男の一挙一動に妙に注目してしまう。人の個性は人それぞれであると客たちは自分に言い聞かせながらも、やはり視線は奇妙なインパクトを持った男に向けてしまっていた。

気にならない方が無理のあるような存在感を男は出しながら、テーブルに置かれたケーキや紅茶を実に機嫌良さそうに食べていった。目の前に置かれた数種類のスイーツに舌鼓を打ちながらもその手は休むことなく動き続け、数分後には全て空になり、最後に残った紅茶を飲み干した。

「はあゝ満足、満足！」

実に嬉しそうに言う男であつたがすぐにその表情は曇る。

「それにしても、ぜんぜん見つからないわね。こっちの方の筈なんだけど」

頬に手を当て本当に困つたという態度をとる男。誰かに聞かせているかのような独り言である。

「アレが落ちていったときは、『間違いなくあそこよ！』て思ったんだけどね」

「『アレ』と言うのがお前の探しているものか。『アレ』とは何だ？」

「『アレ』っていったら『アレ』に決まっただけじゃない……あら？」

男の独り言に突如として割り込んできたもう一人の男、黒のスーツを纏い、髪を後ろになでつけたオールバック、どこか神経質そうな顔立ちをしている。

オールバックの男は席に座っている男の断りも得ずに同じ席の真正面に座った。

「よくもまあどうぞ」

「もう！『アレ』って言ったら『アレ』じゃない！　ずっと探しているのに全然見つからないからイヤになっちゃうわ！　方角はあつてる筈なのに！　もう疲れちゃって仕方ないから、休憩とストレス発散にここでヤケ食いしちゃったんだから！……あ！　でも太っちゃったらどうしましょ……」

「……………」

何かを言おうとしたオールバックの男の言葉を遮って、マシンガンのように一気に自分のことを喋る男。目の前に座ったオールバックの男に何の動揺も見せず、いたってマイペースであった。

「ああ！　このまま見つからなかったらどうしましょ！　克己ちゃんに迷惑かけちゃう！　あつ！　でも克己ちゃんの言葉を信じるならいずれ出会えるはずよね！　あつ！　？　もうあたしのバカ！　『信じるなら』って！　あたしはいつでも克己ちゃんのこと信じているじゃない！　あたしのお馬鹿さん！　そしてファイトあたし！」

「……………おい」

話が途切れることの無い男にオールバックの男はコメカミをひくつかせ、苛立ちの混じった声を出す。

「あら！ どうしたのそんな怖い顔しちゃって！ 何かを嫌なことでもあったの！ 言っちゃいなさい！ 言っちゃいなさい！ 少しい間だけだったら相談にのってあげるわよあたし！」

再び喋り続け始める男を無視し、オールバックの男は懷から数枚の写真を取り出し、テーブルの上に置く。その写真には、四人の男性と一人の女性がそれぞれ写っていた。写っている四人の男性のうちの一人は、今オールバックの男の前に座っている男であった。

「傭兵集団『NEVER』の副隊長、泉京水。お前にいくつか聞きたいことがある。無駄な会話は止めて、大人しくこちらの質問に答えて貰おうか」

先程まで喋り続けていた男、泉京水は高圧的な態度で言うオールバックの男に対して、さっきまでと変わらない笑みを浮かべる。

「えゝ！ 何！ 何！ 何が知りたいの！」

「お前が言っていた『アレ』というモノについての詳細。そして、他のメンバーの居場所を教えて貰おうか」

「それはダメ」

オールバック男の質問をあつさり拒否する京水。

「ほお……拒否するか……」

京水の即答に対し目を細め、冷たい殺気を込めた言葉を放つオールバックの男。

「『アレ』は私たちの目的のために必要なモノなの。だ・か・ら！
何があっても絶対に教えてあげない！ あっ、あと克己ちゃん
たちのこともね！」

頼に手を当てマイペースに言う京水であつたが、その言葉には強
固な意志が含まれていた。

「何があつてもか……？」

「そう！ ナニがあつても！」

「例え死んでもか……？」

「そう！ 死ん」

最後まで言うよりも早く、オールバックの男が懷から拳銃を取り
出し、銃声を響かせる。

京水の額に一センチ程の穴が開くと同時に後頭部から赤い華を咲
かせ頭を後ろに仰け反らせた。

「なら死ね」

白昼堂々と銃を発砲するオールバックの男。しかし、それに対し
ての悲鳴、パニックは起こることはなかった。何故ならば、今この
場所には京水とオールバックの男しかおらず、先程までオープンカ
フェ内部にいた客、及び歩道にも人一人おらずゴースタウンよう
な状態になっていた。

オールバックの男の銃声が静寂の中を木霊のように響き、その余
韻が消えた一瞬の沈黙。

「もう！ いきなりなんてびっくりするじゃない！」

その沈黙を破ったのは、銃弾によって頭を撃ち抜かれたはずの京水であった。

仰け反らせた頭部を跳ね上がるように戻し何事もなかったかのように撃った張本人に喋りかける。

「イヤねもう！ そんな危ないモノを私の中に撃ち込むなんて！ 頭を撃ち抜かれたのは久しぶりだったから意識が飛んじやいそうになっちゃったじゃない！ もう！ でもその大胆さ嫌いじゃないわ！」

喋りながらも頭に空いた穴は塞がっていき、ほんの数秒ほどで完治してしまい。最初から何もなかったかのような傷痕一つない綺麗な状態へととなっていた。

「情報通り……いや、それ以上の再生速度の速さだな……頭を撃ち抜かれても死なないか……」

ケロリとした京水の状態に苦々しげな表情を浮かべるオールバックの男。

「どうやら頭を完全に粉碎しなければならないようだな、貴様は」

今度は京水の額に直接銃口を突きつけようとする。が京水は特に抵抗する様子なくすなりと銃口を突きつけさせた。

「あらやだ！ 今私に固いモノが当たってる！ すんごく固くて熱いモノが当たってる！」

銃口を突きつけられた状態でも態度は変わらず、むしろ余裕しか感じられない程の態度であつた。

「この変態が……！」

オールバックの男は奥歯を噛み締めながら殺気しない言葉を吐き捨て、引き金を引こうとする。

「こついうのは嫌いじゃないけど、今はだゝめ！」

引き金が引かれるよりも早く、京水の体がイスごと後ろに傾ける。そして、次の瞬間、テーブルがロケットのように真上に飛び上がり、拳銃を持ったオールバックの腕に直撃し鈍い音をたてる。その衝撃のせいでオールバックの男は持っていた拳銃を落としてしまう。

「ぐああああ！」

大人が二人がかりで持ち上げなければ動きそうもないテーブルが飛び上がるという予想外の一撃。ましてや腕に重大なダメージを与える程の勢いで。

オールバックの男は痛む腕を抑えながら、京水を見る。そこにはイスに座り、右足だけを水平に上げた京水の姿があつた。

「ごめんなさ〜い！私足癖が悪いみたい」

オールバックの男は京水の言葉で理解する。かなりの重量のあるテーブルを京水の右足一本だけで蹴り上げられたことに。そして同時に今まで散々ふざけた態度をとっていた目の前の存在は、今ここで排除しなければならぬ存在であることに。

「チッ！　それが死亡確定個体復還術の力か……この化物が！」

吐き捨てるように言うオールバックの男に京水はニンマリと笑う。

「化物だなんて失礼しちゃうわね！　あたしたちは死を乗り越えることで生まれた新しい人類。これからの世界の中心になって、世界を変えていく存在よ！」

自らの存在を悲観することなく、むしろ誇りにすら感じている京水。そんな京水を心底気に入らないといった様子でオールバックの男は睨み付ける。

「ふざけるなよ……！　この死に損ないのゾンビが……！　世界の中心……イヤ！　この地球の中心にいるべき存在は我々ミュージアムだ！　断じて貴様のような存在ではない！」

感情のままに京水を罵倒すると、スーツの懷に手を伸ばし、そこから十センチ程の大きさの長方形の形をしたモノを取り出した。

「あら！　それって……」

京水はオールバックの男が取り出したモノに気付き、少々驚いた顔をする。オールバックの男が取り出したモノ、それはパソコンなどで使用するUSBメモリに酷似したモノであり、ケースの中心にはアルファベットの『B』の文字が描かれていた。

「本来、ミュージアムの構成員が使えるガイアメモリは限られているが、非常時の場合、上位の構成員のみ個々の判断でそれ以外のガイアメモリを使用することが出来る。今は非常時、そして俺はその

上位の構成員の立場にある。後はわかるな？」

『BEAN』

ガイアメモリと呼ばれたその端子の上部にあるスイッチを押すと共に電子音声が発する。

オールバックの男は左腕の袖を捲り、手首と肘との中間にある回路のような痣にその端子部分を突き刺した。

突き刺したガイアメモリはそのままオールバックの男の腕の中に吸い込まれていく。全てが吸い込まれたときオールバックの男の全身を深緑の光が包み込んだ。

数秒間、光続けそれが収まったときその場にはオールバックの男はなく、替わりに異形の怪人が立っていた。

全身は緑色の蔦が絡みあつて人の形にしたかのような姿をしており、足の先から手の指先まで全て蔦によって形にされていた。頭部も何十もの蔦が絡みあつて球状になったかのようなものであり、眼にあたる位置は縦長の隙間があり、そこから赤い眼らしきモノが輝いていた。そして身体中の至るところに豆の莢を吊るしており、それが一層不気味さに拍車をかけていた。

「さて、この姿になったからには、万が一にも貴様の勝機はない。挽き肉以下の生ゴミになる前にもう一度聞こう。『アレ』について」

ボイスチェンジャーにかけられたかのような変換された声で問う元オールバックの男。

それに対する京水の答えは。

「イヤよ」

何の躊躇いも無い拒絶であった。

その答えに緑色の怪人は肩を震わせる。表情が無いために分かりにくいがどうやら笑っているようであった。

「せっかく楽に死ねるチャンスをくれてやったのに……どうやら本物のバカのようなだ。たかがゾンビ如きがドーパントに勝てると思っっているのか？」

自信に満ちた様子で自らをドーパントと呼ぶ元オールバックの男もといビンドーパント。

ビンドーパントの挑発的な言葉に京水は答えかのように口の端を吊り上げ笑みを作る。しかし、その笑みは先程まで浮かべていた笑みとは違い、好戦的な笑みであった。

「あなたこそあたしたちのことを見くびってない？ 『NEVER』の実力、その体で知りたい？」

頬に手を当て、ビンドーパントと同じく挑発的な言葉をぶつける京水。その言葉にビンドーパントは肩を震わせるのを止め、京水を見据える。

「なら教えて貰うじゃないか」

だらりと両手を下げながら、爛々と赤く輝く眼で射殺すかのように睨み付けるビンドーパント。

「ええ！ たつぷり体で教えてあ・げ・る！」

左手を腰に当て、右手をクイクイと動かし、手招きをして挑発する京水。

この瞬間、不死身の傭兵集団『NEVER』副隊長京水と『B

E A N の記憶をその身に宿したビーンドーパントとの戦いの火蓋は切って落とされた。

Lの抱擁／泉京水の章（後書き）

いまさらですが、ミュージアムの構成員の方々は、克己たちの情報は有るけど、T2ガイアメモリについては一切知らされていないという設定で書いてます。

Lの抱擁／泉京水の章その2（前書き）

なんとかできた京水編その2です。
京水編は次でラストです。

Lの抱擁／泉京水の章その2

薦が絡んで出来た両手の指先が地面に着くほど垂らし、やや前屈みの姿勢をとるビーンドーパント。

その視線の先にいる敵、京水は片手を腰に当てた構えらしい構えをしていない状態で立っている。

相手の動きを見るビーンドーパントはいつでも攻撃が出来る攻めの状態に対して、京水は対照的に相手を攻撃する意志が感じられず守りの状態となっていた。

数メートル離れた両者。前触れもなくビーンドーパントの右腕が動く。

残像が残る程の速さで京水に向けて振るわれた右腕は、数メートル離れた京水目掛け肘から先が一気に伸びた。

伸びるビーンドーパントの右腕の先は、腕よりも更に速く、常人には反応することの出来ないスピードで京水に襲い掛かる。しかし、その前に京水の右足が目の前に向かって靴底を見せるように突き出された。

ガギユン

金属が削れるような甲高い音が響く。

京水の靴底にビーンドーパントの鞭のような右手がぶつかり合うと、京水の靴底はやや削られ、ビーンドーパントの右手は軌道を逸らされ、京水の立っているすぐ横の舗装された地面を砕いた。

ビーンドーパントは短く舌打ちすると直ぐに右手を動かし、京水の両足を薙ごうとするが、京水は相手の行動を読んでいたのか両足で地面を蹴り、後方へとバク転、それを回避する。

着地した京水に再びビーンドーパントが攻撃を仕掛ける。先ほど

とは違い、今度は左手を京水に向け一気に伸ばす。

指先を揃えた手刀の形にしたビーンドーパントの左手は京水の胴体を狙って投げ槍のように一直線に空を駆ける。

それと同時にビーンドーパントの右腕も京水の足元を払うように動いた。上下同時の攻撃。だが京水は慌てることなく、片足軽く上げると足元を狙ってきたビーンドーパントの右手を地面に埋まる程の力で踏みつける。

「ぐっ！」

たえ伸びていたとしても神経はしっかりと繋がっているらしく、右手を踏まれことで生まれた痛みはビーンドーパントの脳まで一気に駆け抜け、短い苦鳴をあげさせるとともにビーンドーパントの左手の動きを僅か鈍らせる。

同時に来たのなら避けることは困難であったが、ビーンドーパントが受けた痛みによって出来た一秒にも満たない攻撃のずれ、それを見逃す程、京水という存在は甘くなく、またNEVERの力は脆弱ではない。

鈍くなったビーンドーパントの左手の手首に当たる部分目掛け、下から突き上げるようにして放った京水の拳が命中する。

上へと跳ね上がるビーンドーパントの左手、両手を自由に出来ないこの隙に京水は一気に攻撃に出る。

両者の距離は数メートル離れたいるが、京水が地面を蹴るようにして走ると一瞬にしてゼロとなる。

ビーンドーパントが捉えられる距離まで詰めた京水、ビーンドーパントの両手はまだ戻ってはいない。

「もっらった！」

京水のハイキックがビーンドーパントの首筋に突き刺さり、ビー

ンドーパントの首を傾けさせる。しかし、傾けさせただけでビーン
ドーパントの両足は地に根付いたかのように微動だにしない。

「舐めるな！」

ビーンドーパントの怒声とともにビーンドーパントの顔面に変化
が起きる。人間ならば口に当たる部分に新たな裂け目ができ、そこ
から一センチ程の粒が無数に吐き出される。

京水の顔目掛け飛んできたそれを反射的に手を翳して防ぐ、そし
てそのまま後方へ飛び距離をとった。

粒自体の威力は殆どなく、手の貫通するようなことはなかった。

「あら？」

しかし、すぐに京水は違和感を手のひらから感じる。むず痒いさ
と何かが抜けていくような感覚が手のひらから伝わってきたからで
ある。

京水が自らの手のひらを見たとき、そこには植物の双葉が芽吹い
ていた。

人間の身体から植物が生える、あまりにも衝撃的な光景である。更
にその双葉はビデオの早回しのような勢いで急速に成長し続けてい
る。それと同じく先程感じた感覚が手のひらから内部にと伝わり、
今では肘の位置まで感じてきていた。

植物の双葉が芽吹いたことでこの感覚の正体を京水は理解した。
今凄まじい勢いで自分の体内に植物の根が伸びているということに
すぐに京水は行動に移る。自分の手に根付いた植物を掴み、一氣
に引き抜こうと力を込める。

「させると思っか？」

しかし、その行動はビーンドーパントの振り下ろした拳によって阻まれる。

ハンマーのように勢いを込めて迫る攻撃を京水は咄嗟に両腕で防御しようとするが、芽を生やした腕は軽く震えただけで自由に動かすことが出来ず、片腕だけの不十分な形でビーンドーパントの攻撃を受けざるえなかった。

「あん！」

ビーンドーパントの拳が京水の腕に振り下ろされたとき、メキリという音が鳴り、腕が不自然な形に変形した。

ビーンドーパントはそのまま折れた京水の腕を掴むと自分の前に引き寄せ、その勢いのまま京水の腹部に拳を捻り込む。

「きゃん！」

京水の悲鳴とともに赤い血が京水の口から吐き出される。そして、京水の手に生えた植物もどんどん成長をしていき、京水的首筋の辺りにまで侵食、皮膚の下で生物のように蠢いている。

「ふふふ、それはお前の血肉を栄養にして成長する。どうにかしなければ脳にまで到達するぞ」

京水の手ひらで植物が成長していく様が愉快で仕方がないといった様子のビーンドーパント。顔を覗き込むようにして笑う。

しかし、この瞬間、京水は地面を勢いよく蹴りつけ、それによって生まれた力をビーンドーパントの顔面に頭突きという形で喰らわす。

「ぐお！？」

思いもよらない一撃にビンドーパントが仰け反る。さらに京水は仰け反るビンドーパント顔面に追い討ちの二度目の頭突きをお見舞いした。

「がふっ！」

二度の頭突きにより、たまらず京水を掴んでいた手の力が弛む。それを見過ごす京水ではない。相手の鳩尾に京水の爪先が突き刺さる。

貫くような衝撃がビンドーパントの体内に走り、息を無理矢理吐き出させられる。初めに受けたハイキックは、京水の攻撃を受け止めるために体に入力していたが、この攻撃には対応することが出来ずにまともに受けてしまった。

この攻撃により思わず掴んでいた手を離してしまうビンドーパント。さらに京水は近くに倒れていた椅子に器用に足を絡めるとビンドーパントに向けて足で投げつける。

「こんなもの！」

椅子がビンドーパントの顔を目掛けて飛んいく。この瞬間、ビンドーパントの視線は京水から外れ、椅子へと集中する。その隙に京水は走る。姿勢を可能な限り低くして地面スレスレを滑るように。

ビンドーパントが椅子を片手で払い、京水のいた場所に視線を戻す。

「小細工など……！？」

京水に向けて放とうとした言葉が止まる。何故なら先程までいた

京水の姿がそこにいないからだ。

「どこに！」

「ここ」

焦るビーンドーパントの言葉に、すでにビーンドーパントの足元にいる京水が答える。

それと同時に京水は地面に既に骨折から回復した片手をつき、素早く倒立する。

咄嗟に下を向くビーンドーパントの目に映ったのは自分に向かってくる二本の太い脚、それがビーンドーパントの頭部を凄まじい力で挟み締め上げる。

振りほどこうと手を伸ばそうとするが、突然ビーンドーパントの視界が百八十度回転。

ビーンドーパントが事態を把握するよりも早く、ビーンドーパントの頭は地面に叩きつけられた。

「がつ！」

そのまま京水はその場を離れ距離を置く。ビーンドーパントは、さすがに脳天から垂直に地面に叩きつけられたのがこたえたのか、すぐに立ち上がることが出来ず、頭を抑え膝をついたまま全身を震わせていた。

「もう！ 勝手にあたしを苗床にするなんてひどいわね！ こんなのがうしてやるんだから！」

ビーンドーパントから距離をとった京水は、言うと同時に植物の根元を掴み、一気に引っ張る。ブチブチと生々しい音とともに赤黒

いモノを纏った根が顔を出していく。すでに顔面まで伸びていた根も這い上がるのを止め、下へと下がっていく。

「あ〜んもう！こんなのがあたしの中に入ってたなんて気持ち悪いわね！」

引き抜いた植物を地面へと放り捨てる。青々とした葉は急速に色を失い、やかで茶色く変色し最後には枯れ果て、風が吹くと塵となつて飛ばされていった。

京水は問題がないか確認するために寄生されていた手を何度か握ったり、開いたりをしながら軽く肩を回す。問題がないことが分かったとビーンダーパントへと意識を向けた。

頭を叩きつけられた場所で、いまだに体を震わせているビーンドーパントであったが、さっきまでとは違うことが一つだけあった。痛みによって震えているのではなく、抑えきれない程の怒りによってその身を震わせていた。

自分は選ばれた存在だ。

だから、こそガイアメモリという存在に出会い、この力を使って
高みへと上っていくのにふさわしい人間だ。

それは今までも、これからもずっと変わらない決められた運命だ。なのに何故だ。

何故、自分はこんな場所で屈辱にまみれ、怒りで震えている。

自分とはこんなこととは無縁の筈ではないのか。

何故あんなわけの分らない奴にいいようにやられている。

何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故
だ何故だ何故だ！

許せない、自分にこんな思いを味わわせる存在が。
あつてはならない、存在してはならない、自分に屈辱を与えた存在など認めない。

この世から消し去ってやる！

ゆらりとビンドーパントが立ち上がる。全身から溢れ出る怒りを隠そうとはせず、感情のままに京水を睨み付けた。

「あら怖い、そんなに感情的になっちゃってビックリ！ でもその焼き殺されそうな程の情熱的な視線！ 嫌いじゃないわ！」

変わらない京水の態度、しかし、ビンドーパントは反応することなく無言で自らの体に吊るされた豆の莢を掴み、引きちぎる。

ビンドーパントの様子に京水も疑問に思ったのか僅かに怪訝な表情を浮かべる。

ビンドーパントは手に持った莢を上空へと放り投げる。すると、パアンという弾ける音とともに莢の中に入っていた豆たちが地面に向かって飛び出し、ビンドーパントの足元に三つの穴を作った。

ビンドーパントの行動の意味を理解出来ない京水。そんな京水の内心を見抜いたのかビンドーパントは口を開く。

「考えなくてもいいぞ……お前は……何も考えなくていい……ただ願ってればいい……」

途切れ途切れに喋るビンドーパント、その声は不気味な程に静かであった。

「願うって何を？」

京水が質問するが、ビーンドーパントは答えず、うつ向く。そのとき、ピシリという音が鳴る。音の発生源はビーンドーパントの足元にある三つの穴。蜘蛛の巣状にあったヒビが音とともに大きく広がっている。

「願うといったら決まっているだろ……？」

顔を上げるビーンドーパントの声を合図にしたかのように、地面を覆っていた舗装が破片と土砂とともに巻き上げられる。

そこから現れたのは三本の腕らしきもの。蔦が絡みあって出来たかのようなそれは、ビーンドーパントの腕と酷似していた。

そのまま地面を引っ掻くようにしてどんどん這い上がっていく。ある程度まで這い上がってくると同じ穴から今度はもう一本の腕が姿を現す。

両手を使い地面から這い上がってきたそれは、腕だけでなく全身までもが全く同じ、唯一違う点を挙げれば豆の莢を全身に吊るしていないぐらいだけで、あとはほぼ完璧にコピーをしたかのようなビーンドーパントたちであった。

「あら！ 増えた！ 増えちゃったわ！」

驚きの声を上げる京水。再びビーンドーパントは体に吊るされた豆の莢を両手で一つずつ千切り、放り投げる。数秒後にはビーンドーパントの前に九体のビーンドーパントたちが立っていた。

「くくく……願っている……一秒でも早くこの世から消えてなくなることをなあ！」

ビンドーパントの怒声をきっかけに九体のビンドーパントが一斉に京水に向かって走りだす。

「最も！楽に死なせることは私が許さないがなあ！」

「ああんもう！ それって少しズルくない！」

京水が抗議するが、コピービンドーパントたちは一切反応せず機械のように黙々と動く。

コピービンドーパントの一体が京水に向けて本物と同じように両手を伸ばす。咄嗟に後ろに飛び、それを回避。外れたコピービンドーパントの両手が地面を砕く。しかし、回避した場所目掛け二体のコピービンドーパントたちが左右から挟むようにして襲い掛かる。

顔目掛け放たれた拳を上半身を後ろに反らして避けるが、その隙にもう一体のコピービンドーパントの蹴りが京水の膝に命中、ガクンと京水の体が沈む。

それに追い討ちをかけるように京水の背中に組んだ両手を打ち降ろし、京水を地面にと叩きつけた。

「あふん！」

勢いよく叩きつけられたが、京水は何とか立ち上がろうと四肢に力を入れようとする。

「手伝ってやろうか？」

京水の頭上から掛けられた声。見上げようとする京水の顎が下から突き上げた膝によって跳ね上がる。

「あうん！」

浮き上がる京水の体。そのまま再び地面に落ちるかと思われたが、京水の両腕を二体のコピービンドーパントが掴み、そのまま拘束した。

「いい様ななあ……だがまだまだ足りないなあ……」

愉悦に満ちたビンドーパントの声。今の彼にとって、京水を痛めつける事は自らの傷付いたプライドを癒すことでもあり、それと同時に快感となっていた。

「もう……こんなに一杯で迫ってきちゃって……あたしも大変よ」

それでも軽口を止めない京水。口の端から血を流しているが、その口は笑みを形作っていた。

「減らない口だなあ！」

ビンドーパントの拳が京水の腹に叩き込まれる。

「こぶっ！」

内臓に傷が出来たのか、京水の口から血が吐き出される。

「たかが死人がドーパーントに勝てる訳がないだろうがあ！」

京水の右頬を殴り飛ばし、顔が横に向くと今度は左頬を殴り飛ばす。

何度も何度も殴り続けるビンドーパント。顔面を殴打され続け

る京水、傷が付く度に自らに備わっている再生能力で傷を治しているが、ビンドーパントもそれを承知で殴ることを止めない。先程言ったように京水を痛め続ける事が目的だからであろう。

感情のままに振るわれ続ける暴力。終わりの見えない殴打が続いた。

「はぁ……はぁ……はぁ……はははは！ 大した再生力だなあ！
まだまだ殴りがいがある！」

一息つくために手を止めるビンドーパント、声に若干の疲労の色が見えるが、ビンドーパントはまだ京水への暴力を止める意思はない。

「あら……もう終わり……こんなんじゃ……あたし満足出来ないわよ……」

血にまみれた顔にはぎこちないがまだ笑みが浮かんでいる。それを見たビンドーパントの頭に一気に血が昇っていく。

「減らず口を……！」

ビンドーパントは足を大きく振り上げる。

「叩くなあ！」

渾身の力を込めて振り抜いた足が京水の胸中央に叩き込まれ、その威力にボキボキと骨の碎ける音になる。ビンドーパントの蹴りはそれだけでは終わらず膝から下がバネのように一気に伸び、京水の体は椅子やテーブル、観葉植物などを巻き込み、壁に背中から叩きつけられ、地面にへと崩れ落ちていった。

地面に倒れた京水。NEVERの力で何とか生き延びているが、常人ならば何度も死んでいてもおかしくないダメージを負っている。

（さすがに……これは不味いかしら……）

傷は回復しているが、ビーンドーパントを倒す術は今の所、京水にはない。

このままダメージを喰らい続ければ、いずれ回復が追いつかなくなり、京水は元の死体へと戻ってしまう。

何か手はないのか、そう思う京水の目にあるものが写る。

「あら？」

京水の視線の先にあるのは、鉢ごと倒れた観葉植物。その観葉植物の木々の間に光るモノ。

「あららら？」

その光に向けて手を伸ばす。そして、それに触れたとき――

「見いゝつけた！」

京水の顔に再び笑みが浮かんだ。

ビーンドーパントが京水に歩みよろうとしたとき、突然京水が跳ね起きる。その顔に晴れ晴れするような笑みを張り付けて。

「何だ？ この期に及んでその顔は？」

笑っていること自体、不愉快で仕方ないといったビーンドーパントの苛立った声。

「やゝつと！ 探してものが見つかったのよ！ 笑わずにはられないじゃない！」

最初にあつたときのようなテンションで喋る京水。そして、ビーンドーパントに手に持っているモノを見せつける。

「……！？ 馬鹿な何故お前がそれを持っている！？」

京水が見せつけたモノ、十センチ程の黄色の長方形の中央に『L』と描かれた物体、ビーンドーパントが使用したガイアメモリと酷似していた。

「『T2ガイアメモリ』それがあたしたちの探していたモノ」

ウインクをしながらも言う京水。ビーンドーパントは京水の手を持ったガイアメモリに混乱をしていた。

「『T2ガイアメモリ』だと……！？ 馬鹿なそんなモノ聞いたことがないぞ！」

「まあいいじゃない！ 知っていようがいまいが関係無いもの！」

京水は手に持ったT2ガイアメモリのスイッチの押す。

『LUNA』

「これから死んじゃうんだし！」

電子音声が鳴るとそのまま前方にガイアメモリを投げる。空中に放り出されたT2ガイアメモリは、まるで見えない糸に引かれたかのように京水へと向かっていく。

「いろいろとやってくれたわね！ 一方的にやられる、そういうのあたし……」

T2ガイアメモリが京水の額に当たるとそのまま吸い込まれていく。

「きらい！」

京水の全身が閃光を放った。

Lの抱擁／泉京水の章その2（後書き）

そつえば京水の生前はヤクザという設定らしいですね。
刺されて死んでアッチの道に目覚めたとか。

Lの抱擁／泉京水の章その3（前書き）

Wの映画のDC版がレンタルされていて見ましたが、改めて見ると本編の京水とは大分感じが違ってましたね。やっぱりこのキャラは表現が難しい。

Ｌの抱擁／泉京水の章その３

「ああ！ 来るわ！ 来るわ！ 来るわ！」

山吹色の光を身体中から放ちながら興奮した様子の京水の声。体内へ同化していった『LUNA』のガイアメモリの力が光の中で京水の体は作り替えていく。

「させるかあ！」

しかし、それを阻止しようとするビーンドーパント。彼の掛け声とともにビーンドーパントの周りに立っているコピービーンドーパントは一斉に両手を突き出す。

「死人ごときがガイアメモリを使うなど！」

京水に目掛けてコピービーンドーパントたちの両手が一気に伸びる。風を切り裂きながら伸びていくそれは、ビーンドーパント怒りが乗り移ったかのような鋭さと激しさを感じさせる。

勢いのままに無数のコピービーンドーパントたちの両手が、光りの中を突き刺したていく。

響く音、しかしそれはビーンドーパントが想像していた音ではなかった。人体を貫いたものとは違い、ドオンと響く鈍い音。何か固いモノにぶつかったような音が光の中から聞こえた。

光が収まるとそこには、楕円形の黄色い物体が立っていた。上から下まで何かが螺旋状に帯のようなモノが巻き付いており、それがコピービーンドーパントたちの攻撃を防いでいた。

「何だ……？」

動揺を隠しきれないビーンドーパントの声。もう一度コピービーンドーパントたちに攻撃を指示しようとしたとき。

「きたー！ー！」

楕円形の物体からの叫びとともに巻き付いていた帯のようなモノが、コピービーンドーパントたちの両手を吹き飛ばすようにして開き、その中から異形が姿を現す。

全身が眩く光る金色に変化し、顔の部分には鼻や口などといったパーツらしき存在せず、黒い筒のような形をしており、筒の中心にレンズのような目らしきモノが上下に並んでおり、それを囲むように黄色いラインがひかれていた。両肩と胸元辺りから弧を描いた黒い爪のようなモノが伸びている。

両手は、子供の胴体ぐらいありそうな幅と厚みを持った太い鞭のような形状に変化しており、自分の身長よりも長く、地面にベタリとつくほどだった。形状からして最初に巻き付いていた帯のようなモノの正体はこれのようである。

『LUNA』のガイアメモリの力よって変身したドーパント、ルナドーパントがここに誕生した。

「ああ！ 凄い！ 凄い！ 全身から不思議な力が溢れてきちゃう！」

長くなった両腕を波打たせ、それに合わせるかのように腰を左右に振って、沸き上がる力に興奮した様子を見せる。

「汚らわしい死人が！ ガイアメモリは貴様のような奴に相応しくない！」

怒りをたぎらせるビーンダーパントの声と意思を感じ、五体のコピービーンダーパントが京水に向かって駆け出す。

「決りだしてやれ！」

一切の無駄を省いたような動きで京水に近付き、一斉に飛び掛かるコピービーンダーパントたち。

「えい！」

鞭のような右手を京水が振るったとき、ブオンという空気を全て巻き込んだかのような音を鳴らし、一番端にいるコピービーンダーパントの胴体にめり込む。

京水の腕は、平均的な成人男性と変わらないコピービーンダーパントの胴体に半分以上食い込み、コピービーンダーパントを持ったまま、残りのビーンダーパントたちに叩きつけ、そのまま片手で払い飛ばした。

破砕音が響き、砕けたテーブルなどとともに固まりのように一ヶ所に集まって倒れるコピービーンダーパントたち。そのうちの一体、先程、京水の攻撃を最初に受けたコピービーンダーパントは体色が急激に変化していく、京水の攻撃で体力の限界を迎えたのか緑から土色へと変わりそのまま崩れるようにして消えていった。

「ビンビン来るわ〜！ 今あたしビンビン来てるわ〜！」

未だに興奮の冷めない様子で悦に入っただかのような声を出す京水。感情のままに体を震わせていた。

そんな様子の京水の姿が隙だらけに見えたのか――

「立て！」

ビンドーパントの発した声に残りのコピービンドーパントが糸で引つ張られた人形のように不安定な体勢から一斉に跳ね起きる、その中で一番京水に近い距離にいた一体がいまだに震えている京水へ走り出す。二人の距離は数メートルほど離れているが、複製ではあるがオリジナルのビンドーパントと殆ど変わらない身体能力を持つコピービンドーパントには一瞬にして縮められる距離、拳を作り地を蹴ったときには、その拳はすでに京水の眼前にと迫っていた。

「あら？」

ようやく気づいたのか、それとも最初から知っていてわざと誘ったのか分らないが、京水の口から出た声に驚きも動揺の色はない。コピービンドーパントの迫ってくる拳に京水はレンズのような瞳を向ける。

全力を込めた一撃、それが直撃しようとしたとき、バシンと砕けるような音と土煙が舞い、その後にブオンという空気が唸ったかのような音が鳴り、舞い上がった土煙を吹き飛ばす。

煙が晴れるとそこにあるべき京水の姿は無く、コピービンドーパントの空振りした姿だけが残った。

何処だ、と言うように京水の姿を見つけようとするが――

「何処を見ている！」

「こっこよーん！」

二つの異なる内容と声、一つはコピービンドーパントの背後にいるビンドーパントの怒声。もう一つは今探そうとしていた京水の声、それがコピービンドーパントの頭上から聞こえた。反射的

に頭上を見上げる。

そこには両腕を大きく振り上げた状態で宙にいる京水の姿だった。京水は拳が迫ってきたあるとき、鞭のような両腕を勢いよく地面にと叩きつけ、その反動で宙へと飛び上がり、それを回避したのだ。

ルナドーパントが足元にいるコピービンドーパントに腕を振り下ろそうとするが、それを妨害しようとする別のコピービンドーパントがルナドーパントに向けて手を伸ばす。

一直線に伸びてくるコピービンドーパントの手。しかし、ルナドーパントは視線を足元に向けたまま、片腕だけを迫ってくる手に向ける。するとルナドーパントの腕がビンドーパントたちと同じように伸び始め、まるで独立した生物のように螺旋を描くと、枝を伝う蛇のようにコピービンドーパントの手に絡まりながら這い上がっていき、そのまま手の動きを拘束する。

「よいしょ！」

攻撃を防ぐと同時に、足元にいるコピービンドーパントの脳天に落下の勢いを加えたルナドーパントの鞭の一撃が炸裂、頭から地面にめり込まれる。

「もういつちょー！」

着地と同じくタイミングで絡めていた片腕を大きく振り上げる。

当然、ルナドーパントの腕に拘束されていたコピービンドーパントもルナドーパントの動きに合わせて空高く持ち上げられ――

「いつてらっしゃーい！」

最高点にたどり着いた状態で絡みついてた腕を離され、一瞬の空中浮遊のあとに重力に従い落下、数十メートルの高さから地面に

激突した。

地面に叩き伏せられたコピービンドーパントと地面に頭から墜落したコピービンドーパントは、最初に消滅したのと同じように色褪せ、塵となって消えていった。

「あゝん！ ダメダメ！ こんなんじゃ、あたしの火照りは静まらない！」

ルナドーパントは屈むと、両腕を一気に伸ばす。地を這って進むそれはまるで金色の大蛇のようであった。二匹の大蛇が獲物を見つける。獲物は二体のコピービンドーパント。その足に絡み付き、柔軟そうな動きから想像出来ない力で締め上げる。

その力にコピービンドーパントの足は潰され、そのまま体勢を崩し片膝を着く格好となった。

「あつそゝれ！」

ルナドーパントの掛け声で捕まっていたコピービンドーパントの体が持ち上げられる。体勢を崩されたコピービンドーパントは抵抗することも出来ない。

ルナドーパントの持ち上げられた腕の先に逆さに吊るされたコピービンドーパントたち、脱出しようと手を伸ばそうとして構えたが――

「それぞれそゝれ！」

勢いよく両腕を回し始めるルナドーパントによってそれを封じられてしまう。

「さあさあ！ いくわよー！」

高速に回転する片腕を振るう。人体一体分の重みと遠心力から繰りだされるその破壊力は、ルナドーパントの振るった腕の先にいるコピービーンドーパントの上半身を一撃で粉碎したことによって物語られた。

もう片方の腕を振るうと今度は別のコピービーンドーパントの胴体へと命中、下半身が消失し地面にと残った上半身が落下、そのま

ま二、三度震えた後に枯れて消滅しといった。ルナドーパントがフレイルのように回していた腕を止める。当然、殴りつけた方も無事ではなく、回転を止めると同時にルナドーパントの手の中で二体のコピービーンドーパントは塵となって消えた。

「く……なんという……」

動揺と焦り、困惑、認めたくない現実に向き合わされたビーンドーパントの絞り出したかのような掠れた声。九体もいた分身があつという間に二体まで減らされてしまう。ついさっきまで圧倒的に有利な戦いを進めていたのにも関わらず、もう形勢逆転しようとしている。

「まだまだ……まだこんなものではない！」

自分を奮い立たせるように声を挙げると、自らに吊るされた豆の莢を全て引き千切り放る。莢から豆が飛び出し、地面に埋まると数秒後には、コピービーンドーパントが生まれた、その数三十体以上ビーンドーパントの前に壁のように立ち並ぶ。

「あらあら、そんなに一杯出しちゃって」

圧倒的数の差を前にしても変わらないルナドーパント、むしろ興

奮状態から冷めてきたのか言葉に先程までの熱が無い。

「さっきまでスンゴイビンビンな感じだったけど……よ・う・や・く！ 冷えてきたわー！」

そう言い体を波打たせる。口調はルナドーパントの言う通り幾分落ち着いてはいるが、動きの怪しさは全くと言っていいほど変わらない。

「手に入れたからにはメモリの力を存分に奮わないとね！」

この言葉にビーンドーパントは身構える。先程までは奮った力は京水が使ったメモリの力の一端に過ぎないことを知らされてしまったからだ。

「そうだ！ あなたばかりさっきから増えてズルいから——」

ルナドーパントが片腕を振り上げる。

「あたしも増えちゃおっと！」

ルナドーパントが腕を振るう。するて腕の先から現れた光りを放つ球体、それが瞬時に拡大し形を造り上げていく。剥がれるように光が消えたときそこにあったのはもう一人のルナドーパントだった。

「おほほほほほ」

現れたもう一人のルナドーパントが本人と変わらない声で笑い声を上げる。

「なっ!？」

思わず驚愕の声を出してしまうビーンドーパント。彼の前でルナドーパントが腕を振るう度に新たなルナドーパントたちが現れていた。

ルナドーパントこと京水が差したガイアメモリは『LUNA』のメモリ、その内に内包した記憶は『幻想』。幻想とは本来、現実にはあり得ないことを心の内に思い描くことを意味する。しかし、ガイアメモリとして産み落とされた『LUNA（幻想）』は触れれば消えてしまうような儚げなものではなく、実体をもった幻として現実干渉する程の力を人に与える。

今なお現れ続けるルナドーパントたちは幻でありながら現実の存在なのである。

「おほほほほほ!」

「おほほほほほ!」

「おほほほほほ!」

『おほほほほほ!』

いくつものルナドーパントたちの声が重なりあい不協和音のような笑い声が木霊する。現れたルナドーパントの幻の数は既にビーンドーパントの分身と同等の数となっていた。

「こんな……こんなことが……」

数というアドバンテージを得ていたビーンドーパントにとっては絶望的な光景であった。認めたくないはないがドーパントとしての

実力はルナドーパントに分があつた。それゆえ彼はルナドーパントを数の暴力という実力では覆せない力を用いることにした。しかし、その考えは脆くも崩れさってしまった。

「まだまだいくわよー！——と行きたい所だけど、あんまり待たせたら悪いわよねー！」

「そうねそうね！」「はやくいきましょー！いきましょー！」「あとし我慢できな〜い」「もう！あたしもウズウズしてるんだから我慢しなさい！」「この焦らされる感じ……嫌いじゃないわ！」

ルナドーパントの生み出した幻が口々に喋り出す。命を持たない幻の筈なのにその光景は非常に生き生きとしたものであつた。

「それじゃあ……」

ルナドーパントは大きく両腕を振り上げる。

「楽しましょー！」

降り下ろすと同時に一斉にルナドーパントの幻が駆けていく。

「楽しましょー！」

両者入り乱れての乱闘。ルナドーパントたちとビーンドーパントたちが真正面からぶつかり合う。

ルナドーパントたちの一体がビーンドーパントの頭を吹き飛ばす、頭を失ったビーンドーパントは崩れ落ちて塵に還る。そのルナドーパントの胴体に別のビーンドーパントの手刀が突き刺さり背中まで貫通、貫かれたルナドーパントは光の粒子となって消え去った。そ

してさらにそのビンドーパントを二体のルナドーパントが叩きのめす。

瞬きをすれば、その瞬間には誰かが倒れ、また瞬きをすれば、それを倒した者が別の誰かにやられる。一秒ごとに勝者と敗者が入れ替わる大混戦。

しかし、徐々にだがこの戦いにも終わりの兆しが見え始める。ほとんどこが一対一で戦っていたルナドーパントたちとビンドーパントたちであったが、次第に二対一、三対一とビンドーパント一体が戦うルナドーパントたちの数が多くなりつつあった。

他のビンドーパントたちから少し離れた位置にいたため、オリジナルのビンドーパントはその変化に嫌でも気付いてしまった。彼の脳裏に浮かんだのは『逃走』という二文字。彼自身のプライドを激しく傷つける行動であった。しかし、今の現状を考えるならばその選択しかなかった。

この逃走は怖じ氣ついたからじゃない、自分は手に入れた情報を組織に持ち帰るだけだ。逃げるわけじゃない、これは重要な意味を持つ行動だ。今だけの我慢だ、今だけ我慢すれば、次こそあいつを倒せる。

いくつもの言葉を頭の中で並べ、必死に自分の受ける傷を和らげるビンドーパント。

やがて決心し、足を一步後ろに下げ、そのまま一気に振り向くと同時に走った。

一秒、二秒と走ったとき、突然片足が強く後ろに引かれ、走っていた勢いのままうつ伏せに倒れる。

「ッ……！？」

ビンドーパントの足に巻き付いたルナドーパントの触手。

「逃がさないわよ」

ビーンドーパントが振りほどこうとするよりも早く、ビーンドーパントの体が宙を舞う。

「それ！ 高い高い！」

ルナドーパントに持ち上げられたビーンドーパント、そのまま引き寄せられていった。

背中から地面に叩きつけられ、衝撃で身悶えするビーンドーパント。起き上がった彼の目に写ったのは自分を取り囲むルナドーパントたちの姿。

数は減っているが十体ものルナドーパントたちがビーンドーパントを見下ろしていた。

『うふふ、うふふふ。もう！ 逃げるなんて酷いじゃない！』

一語一句重ねて喋るルナドーパントたち、ビーンドーパントは呻くことも叫ぶことも出来ず、絶望が心を塗り潰していく。

『いくわよー！』

ルナドーパントたちは、ビーンドーパントの頭上に向けて両手を伸ばす。

『そ・お・れ！』

そしてそれがビーンドーパントに一斉に振り下ろされた。

「うあああああー！」

ビーンドーパントの悲鳴ごと叩き潰すように鞭の雨が降り注ぐ。

「はい！ ペッタン！ ペッタン！」

間の抜けた掛け声とは裏腹に、スドドドという轟音とともにアスファルトは砕け、粉塵が舞い、地面を揺れ動く。

ビーンドーパントの姿が見えなくなる程の殴打の嵐、それが数十秒間絶え間なく続いた。

ルナドーパントたちは手を止め、舞い上がった土埃が収まるのを待つ。

そして、土埃が収まったあとに現れたのは、クレーターのように陥没した地面に横たわった見るも無惨な姿に変わり果てたビーンドーパントであった。

手足は関節が増えたかのように何カ所も折れ曲がっているが、微かに胸は上下しており、辛うじて生きていることが分かる。

ルナドーパントは周りの幻を消し去り、ビーンドーパントに手を伸ばす。伸ばした手はビーンドーパントに巻きつき、ルナドーパントへと引き寄せた。

「……………」

ビーンドーパントが微かに声を発する。最早人に聞こえる程の音量を出すことは出来ず、虫の羽音のように小さい。

しかし、超人となっているルナドーパントの耳にはしっかりとその声は聞こえていた。掠れた声で「やめてくれ」という声を。

「だゝめ！ あたしが抱き締めてあげる！」

が、ルナドーパントにはそんな言葉を聞こうが聞こえないが関係なく、巻きついた両手に力を込める。

「……………！」

ビンドーパントの声無き悲鳴の変わりに、ミシミシという軋む音になり、やがて一際大きな音がなったとき、ビンドーパントは上半身を後ろに仰け反らし、その姿を人間の姿に戻した。

「あら逝っちゃた？ 凄すぎて逝っちゃた？」

人一人締め殺してもルナドーパントの態度は変わらず、どこまでもマイペースであった。

「あ！ 克己ちゃん！ 聞いて！ 聞いて！ あたし手に入れたわ！」

通信機に向けて興奮した様子で話しかける京水。
通信機の向こうの声を聞くと頬に手を当て、嬉しそうに身をクネらす。

「ああん！ 克己ちゃんに褒められたら、あたし！ あたし！」

次に聞こえた通信機の言葉に京水は体をクネらすのを止める。

「あら、レイカちゃんが……まあ！ そうなのわかったわ。あたしもすぐに行くわ！ ……剛三も？ メモリはもう見つかったの？ ……あら無謀」

ダダダダ、といういくつもの足音。

楽しげに会話している京水の背後ではどこから現れた黒服の男たちが次々と集まっていた。

「はあゝい！ 分かったわ！ 少し遅れそうだけど、レイカちゃんによろしくね！」

通信機をしまつとクルリと振り返る。

「あら、いっぱい」

数十人もの黒服の男たちが、京水を逃がさないように囲んでいる。しかし、京水の笑みは消えない。

「それじゃあ楽しみましょうか！」

自分の全てを捧げ忠誠する人の夢のために戦える。この思いがある限り京水の笑みは消えることはない。

Lの抱擁／泉京水の章その3（後書き）

これにて京水編は終了です。次は紅一点のあの人。

京水編ドーパント設定（前書き）

京水編のドーパント設定です。

京水編ドーパント設定

ビーン・ドーパント

身長：200cm

体重：150kg

特色/力：伸縮自在の手足に、人体に寄生する植物の種を体内から飛ばし、自らのコピーを造り出すことが出来る。

植物の「豆」の記憶を持ったガイアメモリを使い、変身したドーパント。

自らの手足を何倍もの長さに伸ばすことができ、それを利用して強力な攻撃を放つことが出来る。

体内には人体に芽を生やす植物の種を蓄えており、それを相手に目掛けて口から飛ばす。相手の肉体に接触すると同時に根を生やし、寄生した相手の血肉を養分として、通常の植物の何十倍もの早さで成長して、相手の身体中に根を伸ばし最終的には脳まで浸食する。

ただし、相手の肉体に接触しなければ発芽しないので、衣服などに当たると効果を發揮できない。

そして、身体中に吊るされている豆の莢にはビーンドーパントと同等の能力を持つコピービーンドーパントの種が入っており、これを千切り地面に種を埋めると数秒でコピービーンドーパントが生えてくる。コピービーンドーパントは手足を伸ばす能力はあるが、種を飛ばす能力とコピーを造り出す能力はない。また豆の莢を再生やすには、変身を解除して数時間待たなければならない。

変身するのはオールバックの男。生体コネクタの場所は左腕の中心部分。

非常に神経質でプライドの高い性格をしており、自分の力に絶対的な自信を持っており常に他者を見下している。更に極度の人間不

信のため人に頼るようなことは絶対にしない。

この性格のため組織内での人望は皆無に等しく常に一人で行動している。だが彼にとって自分以外の人間は足手まといと思っているので、別にそれを苦にしてはいない。

オープンカフェにて京水と接触、その後交戦する。ちなみにこのときいなくなった客たちは、コピービーンドーパントたちを使って適当な場所に連れていかれた。

ドーパントの力を使い戦うも京水の攻撃を何度も受け、プライドを大きく傷つけられ激怒し、コピービーンドーパントを使い京水をリンチにするが、その後ルナのT2ガイアメモリを手に入れルナドーパントに変身した京水の逆襲をうける。

圧倒的に不利な状況となり、プライドをかなぐり捨てて逃亡しようとするが、読んでいた京水に捕まり、幻影で造り出されたルナドーパントたちに囲まれ絶望的な心境の中で、今度は自分が集団暴力をうけることになった。

心身共にズタズタされたあとに京水に掴み上げられ、消え入りするような声で命乞いをするが、それを無視され締め殺された。

Hの灼熱／羽原レイカの章（前書き）

三人目の主役の話ができました。

展開的に最近見た映画の影響を受けたような内容になってますが、
楽しめて頂けたら幸いです。

Hの灼熱／羽原レイカの章

とある廃ビルの屋上、タイルの隙間から雑草が生え、草花が芽吹いている。それは人が長い間、足を踏み入れていなかったことを物語っていた。

所々錆び付いた手すりには鳥たちが止まり羽を休めている。

そんな人気の無い場所であったが、一つの変化が起こった。

ギギギギと強く擦れるような音が屋上に鳴り響く。その音を聞き、鳥たちは一目散に空へと羽ばたいていった。再び、ギギギギという音が鳴る。その音を鳴らしているのは屋上に入るためのドアからだった。

「固っ！ 何だこれ開けられねえ！」

若い男性の声の後に何度もドアノブがガチャガチャとなり、屋上は一気に騒がしくなり始める。

続いて、ドアがドンドンと叩かれ始め、ドアに積もった埃や張り付いていた植物が地面に落ちていく。

ドン、という一際大きな音が鳴ったと同時に屋上のドアが一気に開いた。

「おお……開いて良かった」

ドアの向こう側から現れたのは二十代ぐらいの男性。髪を茶色く染め、黒のスーツを身に纏っていたが、スーツの前は留めておらず、中のシャツも上三つのボタンを外しておりだらしく着ていた。顔の造りは悪くはないが、どこか飄々とした印象を与える顔立ちをしていた。

「ふ〜ふふふ〜ん」

茶髪の男は、調子外れな鼻歌を歌いながら屋上へと足を進める。手すりまで進むと立ち止まり、右手に着けた腕時計に視線を向ける。

「もうそろそろかなー」

茶髪の男はそう呟くと手摺にもたれ掛かる。そしてスーツの懷から双眼鏡を取り出す、片手で構えレンズの向こう側を見つめる。反対の手でコツコツと手摺に一定のリズムを刻みながら周辺を探すように双眼鏡を動かす。やがて見つかったのか双眼鏡の動きが止まった。

屋上から百メートルほど先にあるのは朽ちた倉庫街。網目状に走る道の両脇に一列に並んでいる倉庫。屋根は所々剥けており、窓や壁には穴が開き、すでに過去のモノとなっているのがよくわかる。

「お！ きたきた」

双眼鏡を覗いていた茶髪の男は楽しげに笑う。

朽ちた倉庫街の道に現れたのは一台の赤いバイク。

その赤いバイクを走らせるのはおそらく女性。フルフェイスのヘルメット被っているせいで顔はわからないが、ヘルメットに収まりきれないほど長く伸びた髪、黒のジャケット越し見える細身の体、ジャケットと同じく黒のショートパンツから伸びるスラリとした脚、それらのパーツがバイクに乗っている人物が女性であると主張していた。

バイクは倉庫街の中心部辺りで止まり、バイクに乗ったまま女性はいまきた道を振り返って見る。

女性が走ってきた道に再びバイクが現れる。しかも一台ではなく十台ものバイクが走ってきた。そのバイクに乗っているのは、全員

が同じ黒のスーツを纏い、顔には節足動物が張りついたかのような白いラインがはいった黒のマスクをかぶった怪人であった。

「おお！ 時間ピッタリ！ 優秀、優秀」

黒のマスクをかぶった怪人たちと全く同じ服装をした茶髪の男は、双眼鏡を覗きながら本心から言っているのか、それとも茶化しているのか、どちらとも取れるような口調で一人、言葉を洩らす。

黒のマスクをかぶった怪人たちは、女性から十メートル程離れた場所にバイクを止め、横一列に並ぶ。

それに対して女性は、跨がっていたバイクから降りると、かぶっていたヘルメットを脱ぐ。

「おおー！」

女性の容姿を見た茶髪の男から感嘆の声が上がる。

ヘルメットの下から現れた顔は眉をよせ、不愉快そうな表情をしているが整った顔立ちをしている。眉、唇、鼻、目、どのパーツも完成度の高い造りをしており、間違いなく美女と呼ぶに相応しかった。

「いいねえ……写真で見るよりも三割増しに美人じゃないか！ これは嬉しい誤算！」

双眼鏡を食い入るように覗き込み、興奮した様子で独語する茶髪の男。

「こんな仕事じゃなきゃ、是非ともお近づきになりたいんだけどね……」

「はあー、とため息を吐き、実に残念で仕方ないといった様子で肩を落とす。

「あーあ、もつたない、あの……えーと……あれ？ 何て名前だったけ？」

茶髪の男はスーツの懷に手を入ると中から四つ折りの紙を取り出す。紙を開くと折られていたせいでしわくちゃになっているが、双眼鏡の向こう側の女性の写真と文章が書かれていた。

「あー、ハイハイ、羽原レイカちゃんね。よしよし覚えた覚えた」

双眼鏡から目を放し、紙を一瞥するとすぐに双眼鏡を覗き、紙を再び懷にしまいこむ。

「一対十ねえ……この数のドーパント相手にどれだけ出来るか見ものだなあ、ま、ドーパントと言ってもマスカレードだけど」

自分の言葉の何かが面白かったのかクスクスと笑う茶髪の男。

双眼鏡のレンズには、羽原レイカと呼ばれた女性とマスカレードと呼ばれたドーパントが何か言葉を話している。

最も口を動かしているのは、羽原レイカだけで仮面を着けているマスカレードドーパントたちはレイカが何かを言う度に指を指すなどの行動をとっているだけに過ぎないが、離れた場所にいる茶髪の男にはわからないが、会話はしていると予想は出来た。

「さあて、そろそろ始めるなあ。どつちが残るか……出来ればコイツのことをレイカちゃんに聞きたいなあ」

コツコツと手すりを叩くのを止め、その手に持ったモノを見つめ

る。

形は長方形、長さは約十センチ、青みかかった金属端子が付いており、中心には炎によって『H』の文字が形作られていた。

ここに来る途中、前触れもなく気付いたら足元に落ちていたコレ。試しに起動スイッチを押してみたが、起動したことを示すガイアウイスパーも鳴らず、カチカチと虚しい音が鳴るだけであった。

壊れているのかと思ったが外部には傷一つ無く、偽物という可能性を男は考えたが偽物にしては造りが精巧過ぎており、明らかにガイアメモリというモノに深い知識がなければ出来ない代物であった。よくよく見ると男性の扱うガイアメモリとはいくつか共通点があるが、彼の記憶の中で、このデザインのガイアメモリは見たことが

「いや、待てよ……」

この形に隅の方に書かれた『HEAT』の文字、この二つの情報が頭の奥から一つの情報を取り出す。

「『仮面ライダー』っていうのが使うガイアメモリにそっくりだな……」

この街の住人達がヒーローとして慕う存在『仮面ライダー』、複数のガイアメモリを使いドーパントと戦う存在。彼の中では、正直興味が無かったのですっかり忘れていた。

組織が動くことになった爆破事件、それを行った国際的テロリスト、そして見たことのないガイアメモリ、この三つに関係性がないとは考えられない

「やっぱり、上の人達も知っているのかな？」

彼の脳裏に幹部達の姿が浮かぶ、組織を束ねる初老の男性、目つきが少々きつめの美女、この街のアイドル、ガイアメモリのバイヤーから一気に出世し幹部になった元同僚。

「まあ、知ってても言うわけないか」

先程まで浮かべていた笑みとは違い、冷めたような笑みであった。基本的には上の人間がしたことは下には伝わらないのが、この組織の暗黙の了解である。

ここ最近はその更に顕著になっている、と彼はそう感じていた。幹部の内の一人は突然事故でなくなったが、組織の中では誰もが事故で亡くなったとは思っておらず、それを証明するかのようにその幹部の妻だった女性幹部も行方不明となっていた。

上の人間のゴタゴタのせいで、彼の只でさえ低い忠誠心は更に低くなり、本来ならばすぐに知らせるべきこのガイアメモリを組織に出すことを躊躇わせていた。

「あゝあ、本当、どうしようかね……」

男の意識が完全に別のモノに移ろうとしたとき。

パァ——ン

銃声が男の意識を連れ戻す。

「ん？ 始まったか？」

男は正体不明のガイアメモリを懷に仕舞うと、双眼鏡を覗き込む。そこに写るのは、羽原レイカとマスカレードたちの戦いが始まった光景。

「まあ、難しい話は後々。今はお仕事といきますか」

茶髪の男は、そう言つと薄く笑う。その笑みには暖かみも情も感じることが出来なかった。

「しつこいね、あんたたち」

赤いバイクから降りる女性——羽原レイカは眉間にシワを寄せ、不快感を露に目の前のバイクに乗った男たちを睨み付ける。

睨み付けられた男たち——マスカレードーパントたちは、針のように鋭い視線を受けても怯むことなく、中央にいるマスカレードーパントが代表し、余裕に満ちた態度で言葉を返す。

「ふん、あれだけのことをしておいて何も対処しないと思っていたのか？ ましてや国際的テロリストといった存在に？」

今度は逆に敵対心を剥き出しにしたマスカレードーパントたちの視線が射殺するようにレイカに向けられるが、向けられた本人は鬱陶しそうな表情を浮かべる。

「あたし、嫌いなんだよね……」

ため息を一つ吐く。

「ゴミ掃除って」

レイカのその言葉にマスカレードドーパントたちは、一斉に拳銃を取り出し、レイカに向ける。マスカレードドーパントたちの殺気を一身に受けながらもレイカは怯えることもなく、地面の状態を確かめるように爪先で二度、三度地面を叩く。

「さっさときたら？」

つまらなさそうに言うレイカ、それをきっかけに中央にいたマスカレードドーパントが引き金を引く。

炸裂音と共に発射される銃弾、そしてレイカも銃声が鳴ると同時に地面を蹴りつけ、走り出す。弾丸に向かって走るレイカ、しかし、その弾丸はレイカに直撃することなく、レイカの靡く長い髪を掠め、数本の髪を吹き飛ばしただけで終わり、外れる。

他のマスカレードドーパントたちも拳銃を撃つが、走るレイカには当てることが出来ず、走る位置を先読みして撃つがその場所に弾丸が届く前にその場所から数歩先の位置を走っている。

マスカレードドーパントたちは、レイカの間合いに入りそうになる前にすぐさまアクセルを全開にしてバイクを発進。

何人かのマスカレードドーパントたちは、レイカが迫ってくる前に左右へとバラバラに走っていったが、一人のマスカレードドーパントだけが勝てると踏んでの行為なのか、レイカへと向かって突進する。

突進するマスカレードドーパントのバイクは急激にアクセルを開いたことで勢いづき前輪が持ち上がる。それに対してレイカは足を止める気配もなく、走るスピードを維持したままマスカレードドーパントに向かっていく。

二人の距離がゼロになろうとしたとき、持ち上がった前輪を体を捻るようにしてレイカは車体の横へ飛ぶように回避、運転するマスカレードドーパントの背中が見えた瞬間、さらに体を回転、レイカもマスカレードドーパントに背を向ける形となりながらも振り回し

たレイカの踵がマスカレードドーパントの頸椎に直撃、マスカレードドーパントの手がハンドルから離れ、地面に叩きつけられる。運転手を失ったバイクもバランスを崩し転倒、上げられたスピードの勢いのまま車体から火花を走らせていった。

「ちっ！」

すでに安全な位置にまで退避していたマスカレードドーパントたちの一人が舌打ちをする。バイクから降ろされたマスカレードドーパントはまだ生きていたが、それを助ける様子は他のマスカレードドーパントたちからは感じられない。

マスカレードドーパントの一人が二本立てた指で他のマスカレードドーパントたちにサインらしきものを送る。それを見ると頷き、二手に分かれ倉庫街の奥へとバイクを走らせていった。

「逃げた——というわけじゃないか」

髪をかきあげ、無表情で呟くレイカ、その足元では空気が漏れたような、コヒュー、コヒューという音をだしながら辛うじて生きているという状態のマスカレードドーパントが倒れている。

「あーあ、ホント面倒」

倒れているマスカレードドーパントの喉元にレイカの靴底が叩きつけられる。マスカレードドーパントの一瞬痙攣し、そのまま絶命。何事もなかったかのように歩き始め、停めてあった自分のバイクにと跨がる。

「まあ、逃がさないけど」

エンジンを動かし、アクセルを回すと走り去っていったマスカレードドーパントの後を追っていった。

「あー一人やられたか……」

屋上から見ていた茶髪の男は、つまらなさそうに言う。

「『俺たちにやらせて下さい』って息巻いて言っただけにはいきなり死ぬなよ……」

はあ、と溜め息を吐く男。マスカレードドーパントたちの戦いに不満を感じているのが分かる。

「そりや名を売るのも大事だけどな……」

自分が監視をし、他のマスカレードドーパントたちが羽原レイカと戦うことになった経緯、一言で言うなれば出世の為であった。マスカレードドーパントたちが組織の敵を倒し功績を上げ、上司の立場にある茶髪の男がそれに口添えして後押しをする。言葉にすればひどく単純なことであった。

しかし、結果としては一人死亡。いくら国際的テロリストでも数で攻めれば、などという楽天的な考えと、資料で見た女性だからなどという浅い考えが今の現状を造り出しているのだった。

「ああ、つまらん！　つまらん！　俺なら……俺だったら……」

茶髪の男の脳裏に浮かぶのは先程レイカがマスカレードードパントに放った蹴り。不安定な姿勢から繰り出された後ろ回し蹴りが、マスカレードードパントの首を砕いていく光景。その姿は茶髪の男の体を興奮で奮わせる。

男は、自分が監視などという仕事ではなく、マスカレードードパントたちのように戦いの場に出ることが自分の性にあっていることを自覚していた。しかし、上の立場であるということがそれを許さず、本来の自分を縛りつけていた。

「凄かったよなアレ、あんなの出せるのと戦えたら……ん？」

そう呟いたとき突然、何かが男のスーツの中で動く。まるで心臓の鼓動のように脈打つような間隔で。

「なんだ……これ……」

スーツから取り出されたのは、正体不明だったガイアメモリ。男の手の中でも鼓動のような動きは止まらない。

「なにが……一体……どうなって……」

その鼓動を感じる度に男は、頭の中が霞みがかっていくのを感じる。危険だと思い捨てようとするが、意思に反して男の手は動かず、視線もガイアメモリから離れてはくれないかった。

立場、仲間、自分の本来の在り方、そういった考えがぐるぐると男の中で回り始める。

ガイアメモリの中央に描かれた文字が、光を放ったかのように見えたとき男の頭の中で何かが弾けたような衝撃が走った。

「……うん……ダメだなあいつらじゃ……俺が……俺が……」

呆けたような口調で、スーツに手に持ったガイアメモリをしまうと手摺に足をかけ、その上に立つ。

「邪魔だな……あいつら……あいつらがいたら……俺が……楽しめない」

再びスーツの中からガイアメモリが取り出されるが、今度は先程のガイアメモリとは違い、骨のような装飾をされた無骨な印象を与えるものであり、中央に描かれた文字も『H』ではなく『D』であった。

「本当……あいつら……邪魔……」

茶髪の男は何の躊躇いもなく手摺から飛び降り、空中に身を投げ出した。

倉庫街を走る複数のバイク、先頭を走る搭乗者のマスカレードードパーントは内心焦っていた。

自分たちの名を覚えて貰うよう上司に頼み、あえて傍観者の立場になってもらっていたが、始まって早々に仲間一人を倒されてしまい、失態を晒す羽目になってしまった。

だが、まだこの失敗を取り戻す算段はマスカレードードパーントの中にあつた。この人気の無い倉庫街の地理は完璧に把握しており、地の利を生かし攻めるつもりであつた。

仲間に作戦の内容を伝えよと振り向いたときあることに気づく。

「一人いない……？」

後ろを走る他のマスカレードパンツたち、二手に別れ自分たちは五人で来たはずなのだが、最後尾にいた一人がバイクごと消えていた。

「止まれ！」

慌てて他のマスカレードパンツたちに声を掛け、バイクを止める。少し待ったが最後尾のマスカレードパンツが来る気配はなく、道に迷ったという考えも浮かんだが、この場所の地理は全員が知っているのでその可能性も低かった。

突如、後ろを見ていたマスカレードパンツたちの目の前に黒い塊が落下し地面を碎いた。よく見ればそれは自分たちが乗っていたバイク、つまり消えたマスカレードパンツのバイクであった。

「な、何だ！ 一体何が！？」

動揺の声が上がる。その直後、タッタッタツという何かが走る音が周りの倉庫の上から聞こえた。

「走れ！」

この音を聞いたときマスカレードパンツ全員の体に悪寒が走る。思わず叫び、必死になってバイクを走らせこの場から離れる。アクセルを全開にして走らせるが、タッタッタツという音がいまだに聞こえ続ける。

「くそ、引き離せない！」

時速百キロメートル近く出ているのにもかかわらず、音は離れない。

タッタッタッタッタ

「うああああああ！」

仲間の一人が悲鳴を上げる。思わず皆が振り向くが、悲鳴を上げた本人は消え、乗っていたバイクは転倒し近くの倉庫に衝突していた。

バイクを止め、正体不明の襲撃者に対して迎撃する選択もあったが、それは出来なかった。恐怖という感情がこの場にいる全員を縛りつけ、逃走という選択しか選ばさなかった。

タッタッタッタッタ

消えることのない襲撃者の足音。それがマスカレードパンツたちの精神を大きく削る。

「くそ、くそ！」

突然、一人がバイクを止め、拳銃を取り出す。

「おい！」

咄嗟に声を掛けるが聞く耳を持たず、倉庫の屋根に向かって銃を乱射し始めた。

「出てこい！ 出てこいよチクショウ！ 殺してやる！」

いつ襲撃されるか分からない、この精神的な圧迫に耐えきれなかったのか、やけくそといった様子で銃を撃ち続ける。

「バカが……！」

奥歯を噛み締めながらそう言うのと停まることなくバイクを走らせる。今あそこで停まっても犠牲が増えるだけと判断した結果であった。

「ぎいあああああ！」

曲がり角を曲がったとき悲鳴が響く。悲鳴の主は考えるまでもない。

「いつたい……いつたいどうなってる！」

自分たちはあの女を始末しに來ただけではないのか、あの女には仲間がいたのか、そんな疑問がマスカレードードーパントの頭の中で渦巻く。

そのとき、目の前に落下する黒い物体。刹那、まるでスローモーションのように周囲の光景がゆっくりと動いているかのような感覚にマスカレードードーパントはおちいつていた。それゆえにそれが何か分かってしまった。

それは先程悲鳴を上げたマスカレードードーパント。

回避することが出来ず、落下してきたマスカレードードーパントと衝突、後ろを走るバイクも巻き込んで転倒してしまう。

バイクから放り出され、二転三転と地面を転がり、全身を叩きつけられる。やがてうつ伏せになって止まるが、全身を走る痛みで体を起こすことが出来なかった。

「ひああああああ！」

仲間の悲鳴、何が起こったのか嫌でも分かる。痛む体に鞭打ち、地面を這いつくばなりらも必死になってその場から逃げようとする。

しかし、それも無駄な抵抗であった。這いつくばるマスカレードーパントの後頭部が強い力で掴まれると、そのまま持ち上げられる。

「う、ああ……ああああ」

もはや抵抗することは出来ない。絶望がマスカレードーパントの心を塗り潰す。

最期の足掻きで、ほんの僅かな力を使い後ろに視線を向けるマスカレードーパント。

その眼に飛び込んできたのは、ヌメヌメと唾液で光る赤黒い舌に鋸のように並んだ牙。

それが最期の光景であった。

Hの灼熱／羽原レイカの章（後書き）

今回は、敵のドーパントの正体を明かさずに次回に続くという展開になりましたが、なんのメモリかは結構簡単にわかりますね。

Hの灼熱／羽原レイカの章その2（前書き）

ついにVシネマがレンタル開始しましたね。

まだ見ていませんが見た次第、色々修正していききたいですね。

Hの灼熱／羽原レイカの章その2

激しく唸るエンジンの音、曲がる度に磨耗して黒い線を残していくタイヤ、人気の無い倉庫街にもかかわらず、そこでは生死を賭けたバイクチェイスが行われていた。

狭い道をマスカレードドーパントたちの四台の黒いバイクが疾走し、その後をレイカの乗った赤のバイクが追う。両者ともヘルメットなど着けておらず、事故を起こせば只では済まないスピードで駆けていた。

マスカレードドーパントたちは何度も振り向きながらレイカとの距離を見る。最初は大分離れていたにもかかわらず、今ではレイカのとの距離の差も五メートル程しかなかった。何故両者の距離が縮まったのか。それは次の曲がり角で明らかになる。マスカレードドーパントたちが曲がり角に差し掛かるとブレーキを使い、速度を緩め曲がれる速度にまで落として曲がるが、レイカの場合、ブレーキを殆ど掛けず、体ごとバイクを倒し速度を維持したまま曲がり角に入っていた。

常人が見れば命知らずの方法である。しかし、その命知らずの方法を規格外の身体能力で確実な方法へと昇華させるのが羽原レイカであり、NEVERである。

この曲がり角を曲がったとき、最後尾を走っていたマスカレードドーパントと遂に並ぶ。隣を走るレイカに向けてマスカレードドーパントの裏拳が放たれるが、レイカはあっさりと片手でそれを防ぐ。顔面、肩、腹など狙う場所を変えて次々に攻撃を繰り出すマスカレードドーパント、しかし、それを片手で軽々といなししていくレイカ。両者とも片手運転という不安定な状況の中で激しい攻防が続くが、終始レイカに分があった。

数度目の拳がレイカの顔を狙うとき、レイカは防ぐのではなく、マスカレードドーパントの振るわれた拳の手首を逆に殴り返す。

「何度も女の顔を狙うもんじゃないよ」

その反撃に思わずバイクのハンドルの操作が狂い、バイクが大きくバランスを崩す。バランスを崩したバイクは倉庫の壁際付近まで近くが接触するかしないかの瀬戸際で何とかバランスを戻した。が――

「お返し」

レイカの声がマスカレードドーパントに届いた瞬間、レイカの靴底がマスカレードドーパントの顔の側面を踏みつけ、高速で動いていく壁に叩きつけた。

「あががががががが！」

まともな悲鳴すら上げること出来ず、マスカレードドーパントの顔面がすりおろされていく。

やがて壁面に押し付けられたマスカレードドーパントの体から力が抜け始めてきたとき、レイカは突き飛ばすようにして足を放す。放されたマスカレードドーパントはすぐにバイクのバランスを崩し、今度はバイクごと壁面に叩きつけられことで限界を向かえたマスカレードドーパントは塵となり、主を失ったバイクはそのまま横転、派手な火花を上げながらレイカの後方へと滑っていった。

その光景を見ていたマスカレードドーパントの一人は怒りの咆哮を上げ、拳銃を取り出すと後ろを走っているレイカに向けて発砲。

「おおおおおおお！」

自らの怒気を弾丸に込めたかのように、一気に銃弾を打ち続ける。

不安定な体勢で撃たれた銃弾はレイカに体に着弾することではなく、レイカも当たる可能性が低いと見たのかアクセルを開き更に加速、銃弾の発射されているなか一気に距離を縮めていく。

マスカレードーパントとの距離が五メートルを切ろうとしたとき、レイカは弾かれたように顔を右に傾ける。闇雲に撃っていた銃弾の一発が丁度レイカの顔の中央目掛け飛んできたのに気づいたからである。

超人的な反射神経によって直撃は避けたものの完全に回避することとは出来ず、頬をかすめ赤い筋を残していった。

「また顔……やってくれたね」

静かな怒りを込めた言葉を吐くとバイクの運転の中、右足に手を伸ばす。右手の先に在るのは足にくくりつけられたホルスター、その中に収められた拳銃を引き抜く。

握った拳銃をマスカレードーパントに向ける。その構えはバイクの運転中という状況にもかかわらず、一切のブレが無く、銃口は空中に停止しているかのように動かなかった。

レイカは引き金を引く。炸裂音が響くと同時に銃弾は拳銃から飛び出し、同じく葉莢も吐き出される。目視出来ない速度で空気の壁を突き破りながら狙った先にいるマスカレードーパント、その銃を握る腕に潜り込んでいった。

肉を軽々と抉り、潰し、穿つ。そして、その先にある骨を砕き割り、骨としての機能を奪う。

弾丸の蹂躪を受けたマスカレードーパントは絶叫し、その手に持った拳銃を落とす。

落とした後も叫び続けるマスカレードーパント。だが、その叫びも二度目の炸裂音によって消え去り、すぐそのあとに重々しい落下音と衝突音が鳴るのだった。

「ちっ！」

残ったマスカレードドーパントの屈辱と怒りに満ちた舌打ち。しかし、マスカレードドーパントたちは振り替えることも攻撃を与えすることもせずただ前を見てバイクを走らせる。ここで足を止め、レイカに対して攻撃をすることは悪手であり、一刻も早く仲間と合流することが最善の手であることがわかっていているからだ。

策も無く一時の感情のみで動くことは暴走に等しく、無謀なことではない。今の屈辱と怒りを成功の糧にするためにマスカレードドーパントたちは走る。――が、自分の考えることが相手も考える分けないという思考は結局の所は詰めの甘さに過ぎず、また羽原レイカという存在への認識の甘さであった。

マスカレードドーパントたちがバイクを全開にして走らせようとしたときには、既に銃口は前方に向いていた。

バイクが加速する瞬間、続けざまに鳴る二発の銃声。一発はマスカレードドーパントの左肩に命中、二発目はもう一人のマスカレードドーパントの乗るバイクの後輪に命中した。

「ぐあっ!？」

「なあ!？」

その結果、右手がアクセルを開いた瞬間、負傷した左手では抑えることが出来ず、バイクから投げ出されるようにして転倒。もう一人は一気に加速したためパンクしたタイヤがバイクのバランスを崩させる。バイクは左右にグラグラと激しく揺れ、そのまま壁に激突していった。

「くっ……くっ……」

撃たれた肩を抑え、震える手を地面につけ体を起こそうとするマスカレードドーパント。しかし、撃たれた痛みとバイクから落ちた衝撃で僅かに上半身を持ち上げることしか出来ない。

「その高さ、ちょうどいいね」

頭上から聞こえるレイカの声。マスカレードドーパントは首だけを声が聞こえる方向へと向けた。

「バイバイ」

そんな彼の目に映るのは、眼前に迫る黒い影。

それが靴の爪先であることに気付いたのは、顔面を頭部ごと蹴り碎かれた瞬間であつた。

その光景を見ていたもう一人のマスカレードドーパント。彼は幸いにも軽傷で済み、自力で立ち上がることができ、そして今の光景を見ていた。そんな彼の胸中によぎるもの、それは仲間を殺された怒りでは無く、失った悲しみでは無く、羽原レイカに対する恐怖では無く、ただ単純な諦めであつた。

逃げる手段もなく、勝てる実力もない、十中八九自分はここで死ぬ。確信に満ちたネガティブな答えが既に彼の中にあつた。

それゆえに彼はレイカに向けて歩み寄っていく。どうせ死ぬなら一矢報いるために。

人の歩みを止めるものは諦め、などという言葉があるが、諦めも極致に至れば人を動かす力となる。ただし、進む方向は逆となるが。

顔が覆面に覆われているため彼が今どのような表情をしているかは相手には分からない。もし、それが無かつたのであれば相手は、彼の死人のように色々なものが抜け落ちた顔を見ていただろう。

躊躇いも無く進む足はやがてレイカを前にして止まる。その距離約

二メートル。その位置でマスカレードパンツは構える。両手を顎の高さまで上げ、左手は引き右手は前に出すボクシングのような構えであった。

対するレイカは構えことはしなかったが、僅かに両足の踵を浮かせ、いつでも相手の攻撃に対処出来る状態となっていた。

相手の出方を見ているのかお互いに動かず静寂が場を支配する。自らの心臓の音が相手に聞こえるのではないかと錯覚してしまう程の沈黙を破ったのはマスカレードパンツの地を蹴る音であった。

地面を蹴って前に出ると同時に引いていた左手が最短の距離をなぞるようにして放たれる。レイカの顔に向かって迫る拳、それを顔だけを動かし難く回避する。しかし、それだけでマスカレードパンツの攻撃は止まず二撃、三撃と左拳が続けざまに放たれた。

だがそれもレイカには通じず簡単に回避されてしまう。四撃目、それが再度レイカの顔面に迫ってくる。再び避けようとするが、突然、拳の軌道が変わり顔面では無くレイカの肩に当たる。思わぬ一撃にレイカの体制が揺らいだ。こん瞬間、地面を震わすように踏み込み、温存していた右拳がバネのように収縮していた力とともに繰り出される。左手を上回る力を秘め右手の一発。

当たれば只では済まないこの拳がレイカの顔面を砕けると言わんばかりに襲いかかる。

迫る拳がレイカの前髪に触れ、そのままその奥にあるものまで一気に突き破る――がそこにある筈の頭部はなく空を切り裂く感触だけがマスカレードパンツの右拳に残った。

そんな拳を下から見上げるレイカ。当たる瞬間に上体を反らし攻撃を回避したのだ。

「うっ！」

それと同時にマスカレードパンツの呻く声。思わず激痛の走

る場所に視線を向けてしまう。痛みのあるのは踏み込んだ足、マスカレードドーパントの目に入ったのはその踏み込んだ足の脛に突き刺さるレイカの爪先であった。回避したと同時に追撃が出来ないように足を潰されたのである。

マスカレードドーパントがそれを理解したときには全てが終わっていた。視線を下に向いたのが分かるとレイカは蹴りつけた足を戻し体勢も整える。

マスカレードドーパントの視線がレイカへと戻ったときには振り上げた右足が吸い込まれるようにマスカレードドーパントの首筋に叩き込まれ、若木の折れるような音を響かせながら、ぐるりと体が百八十度回転し頭から地面叩きつけられていた。

哀しいかな決死の覚悟をし、刺し違える覚悟をもして一の力を二倍にも三倍にも高めて挑んだマスカレードドーパントであったが、結局のところ一が二や三になっても百には遠く及ばなかった。

マスカレードドーパントたちを全滅させたレイカ、すると突然背後からパチパチ拍手の音が鳴る。

振り向くレイカの先にいたのは、自分の赤のバイクのシートに足を組んで座っている茶髪の男、うつむいていたため表情を見ることが出来なかった。

うつむいたままその両手だけが機械のように一定の間隔で叩かれ続けており、その姿は不気味さすら感じるものだった。

「さすがだね……さすがレイカちゃん。惚れ惚れするような手際だったよ」

初対面の相手に馴れ馴れしい呼び方に不快感を覚えたのか、レイカの眉間に皺が寄る。

「誰？」

刺々しいレイカの口調に男は拍手を止め、代わりに肩を震わせ始める。どうやら笑っているらしい。

「あー俺ね、俺はさっきまでそこにいた人達の上司みたいなもんだよ。あつ、正確に言えば元がつくけど」

男は転がっているマスカレードーパントたちのバイクを指差して言った。

「部下がみーんな居なくなったら上司も何もあつたもんじゃないしね」

笑いを含んだ口調で話す男の言葉にレイカは微かに怪訝そうな表情を浮かべる。

「『あと五人いたはずでは？』何て考えているね？ レイカちゃん。大丈夫、俺の言っていることに間違いはないよ」

そこで男はうつむいていた顔を上げ、初めてレイカに顔を見せた。そこに浮かんでいるのは、晴れ晴れとした曇り一つの無い笑顔であつた。長年の難問に苦悩していた学者が、その難問を解いたような素面の大人には出来ない清々しいまでにスッキリとした顔。しかし、少し視点を変えれば底を見せない狂氣的な側面を垣間見るかのような二面性を感じる笑顔であつた。

「全員俺が殺したからね」

まるで何気ない日常会話のようにサラリと自らの行った凶行を話す男。それに対してレイカは呆気にとられてしまい、「はあ？」という間の抜けた声を出してしまった。

「そのまーんまの意味。俺が残りの五人を始末した。それだけだよ」

「一体何のつもり？」

レイカは、男の言葉に疑問を感じるしかない。

「まあ、何と言うか……俺は頭がおかしくなってしまったらしいね。気付いたらこの手で皆殺しだよ。ほーんとあの時は驚いた」

そう言つと座っていたレイカのバイクから降り、スタスタとレイカへと歩み寄っていく。

「何が驚いたかつて、自分の部下殺したのに、全く罪悪感が湧かないことなんだよねえ。名前は全員知っていたし、一緒にメシを食った奴もいたのにさ、何だかんだあったけど、それなりに信頼関係はあった筈なんだよ。それなのにさ……これってやつぱおかしいよね？」

早口でまくし立てながらレイカに近寄っていくが、ある一定の距離まで行くと男の足が止まった。

「でもね居なくなつてから気付いたんだよ。ああ、やつぱこいつら邪魔だった、ということに」

男の止まった場所はギリギリ、レイカの攻撃の届かない絶妙な位置であった。偶然かはたまた意図的にか、危なかしい男の言葉よりも、まだ見ぬ男の技量にレイカは警戒を強くした。

「何かをするにも立場つてやつが付きまどつてきたり、部下の連中

の面倒も見なきゃいけない。これも仕事だからと割り切っていたつもりなんだけどね……やっぱ心のどこかじゃ疎ましく思ったのかも――」

レイカは、自らの心の内を独語する男の言葉を無視するかのよう
に一步踏み出すとその顔目掛け、蹴りを放った。当たれば首の根元
から持つていかれそうな威力を秘めた上段回し蹴りに対し、男は間
一髪直撃を避けるが、僅かにかすったのか頬の皮がめくれ血が滲み
出す。

「おいおい、最後まで聞いてくれてもバチは当たらないぜ？」

「お喋りな男は嫌いだよ」

男の言葉を冷たく切り捨てると今度は男の胴体を下から掬うよう
に蹴り上げる。しかし、それもレイカの攻撃に合わせて後方へと曲
芸のように宙返りをしながら回避する。だが今度も完全に回避は出
来ておらず、黒のスーツの下に着たシャツを切り裂き、破片を宙に
撒く。後方へと跳んだ男はそのまま後ろ向きに走り、レイカとの距
離をとった。

「ふう、危ない危ない。見ていたのと、自分が喰らうのとじゃ早さ
もキレも全然違うな」

そう言いながらも楽しくて仕方ないといった笑みを浮かべながら
頬から流れる血を拭う。

「思ってたよりやるね」

「それでも結構武闘派なんだね」

機嫌良さそうにレイカの声に答える男は、そのままスーツの懷に手を入れる。その瞬間、レイカの手もホルスターに伸びるが、それを見て男は「違う、違う」と言い苦笑を浮かべる。しかし、それでもレイカの手はホルスターの中にある拳銃からは離れない。

「そんなに警戒しなくても大丈夫、ただのプレゼントだよ」

男が懷から取り出したのは二本のメモリ。ミュージアム製のガイアメモリ、もう片方はレイカが探していた特別製のガイアメモリ、T2ガイアメモリであった。

男はその内の片方、T2ガイアメモリを躊躇いもなくレイカに向けて放り投げる。突然の行動に驚くレイカであったが、つい反射的に受け止めてしまった。

「あんた……一体どういうつもり？」

相手の心裏が読めず、咎めるような口調で話すレイカに対し、男は大したことでもないように「あげる」と一言。さすがにレイカも呆氣にとられてしまう。

「いらないからあげるよソレ、俺には使えないし。それにねソイツがギアアギア喚くのを、君のところに行きたいってね」

「あんた……バカだね」

心の底から感じたことを口にするが、相手は傷付いた様子は無い。

「まあ、いろいろ言いたいことがあるかもしれないけど、使っんでしょソレ？ まあ嫌でも使って貰うけど」

男はスーツの袖を捲り上げる。肌をさらす男、その肘には生体コネクタが刻まれている。

「怪物同士の戦い……想像するだけでワクワクするねえ。レイカちゃんはどうだい？」

「興味ないね」

つれないねえ、とぼやく男を尻目にレイカは着ている黒のジャケットのファスナーを下ろす。それによって露になる胸元、そこには男と同じく生体コネクタが刻まれていた。

「まあ、やる気はあるみたいだし。それじゃあ一つ楽しむとしようじゃないか！」

『DOG』

手に持ったガイアメモリのスイッチを押したことによって響くガイアウイスパーがガイアメモリの起動を知らせる。

『HEAT』

同じくT2ガイアメモ리를起動させガイアウイスパーを響かせるレイカ。

男はドッグメモ리를肘に付けられた生体コネクタに挿入、体内へと吸収する。

レイカは起動させると同時に手に持ったT2ガイアメモ리를前方にと放る。放ったT2ガイアメモリは、空中を舞っているとそのまま何も無い位置で停止、そして時間を逆行させたかのようにレイカ

へと向かっていき胸元の左側に刻まれた生体コネクタへと吸い込まれていった。

両者ともガイアメモリを体内に挿入したことにより変化が起きる。茶髪の男は全身を白い光で包み込まれ、その光の中で体型が変わっていく。口は前に突き出すように伸びていき、腕や足は細くなっていくがその代わりに長さは倍近く程になっていた。また指や足の先からは鉤爪のような物体が生えてくる。

レイカは男とは違い赤い光に包まれ、その光からは地面を融解させる程の高熱が発せられ周囲の光景を熱によって歪ませていた。

やがて光は消え、その中から二体の怪人が姿を見せる。

『犬の記憶』によって変身したドーパント、ドッグドーパントは、全身を針金のような硬質な白い体毛で覆い尽くした人型の獣。低く唸り、吊り上げた口の中には鋭い犬歯が並んでいた。

そして、焼き尽くすような灼熱の中から現れたのは、透き通ったレンズのように変化した眼の奥に炎をたぎらせ、全身を赤く染め上げた異形。人だった頃の名残が顔の下半分に残っているのか病的なまでに白い肌に真紅の唇が対称的な印象を与える。

『熱き記憶』のガイアメモリによって生み出されたヒートドーパントが熱とともに姿を現す。

「へえ……」

変化した自分の体に何か思うことがあるのか、ヒートドーパントは赤く染まり変化した手をまじまじと見つめる。

「なかなかいい格好じゃないか、俺も燃えてくるね」

ドッグドーパントは軽口を叩きながら、細く長い両手を地面に着け片足を後ろに引き、短距離走のクラウチングスタートのような構えをとる。

「さあ……いくぜ？」

ドッグドーパーントの四肢が同時に地面を蹴りつけたとき、コンクリートの砕けた音とともにヒートドーパーントの視界から消える。

次に音が聞こえた場所はヒートドーパーントの背後、倉庫の壁に両足を着け再び蹴りつける。

壁に大きな亀裂が入る程の力で踏み出したことで驚異的なスピードで空中を疾走、そのままの勢いでヒートドーパーント目掛け、鈍い輝きを放つ爪を生やした右足から突っ込んでいく。

しかし、ヒートドーパーントも振り返ると同時に燃え上がる右足からの後ろ回し蹴りを放つ。

ぶつかり合う互いの蹴り、衝撃と炎が吹き荒れる。

「さあ、一緒に楽しいことしようぜ？」

「後悔するよ？」

ドッグドーパーントは犬歯を剥き出しにして笑うとヒートドーパーントも唇の端を上げ初めて笑った。

Hの灼熱／羽原レイカの章その2（後書き）

今回の章は敵のキャラを強調しすぎたような気がしますね。

あんまりこういうのはダメな感じがしますが……

トリガー編も似た感じになるかも……だって三種類ぐらいしかセリフなかったから。

Hの灼熱／羽原レイカの章その3（前書き）

これにてレイカ編は終了。

いまだVシネマを見ていないので、見ている方にはキャラの違和感を感じるかもしれません。
はやく見ないとな……

Hの灼熱／羽原レイカの章その3

衝撃と炎、二つの力が交差し、そして反発する。ドッグドーパント、ヒートドーパントの視線が一瞬ぶつかり、衝突した両者の脚が離れる。

ともにまだ全力などは出しておらず始まりを告げる挨拶を済ませただけにすぎない。

先に仕掛けるたのはドッグドーパント、脚が離れると体を捻り四つん這いの状態で着地、すぐさま地面を蹴り、今度は地面スレスレを滑るようにして突っ込む。狙う先にあるのはヒートドーパントの両足、それを刈り取るように足先と同じく鉤爪のような爪を生やした右手を振るう。

しかし、ヒートドーパントも相手の狙いをすぐに判断し、足を切り裂かれりるよりも早く地を蹴り宙返りをするように回避、さらにそれだけでは終らず、空中を舞うヒートドーパントの立てられた人差し指の先に火が点る。そしてその点った火をドッグドーパントへと放った。

攻撃を避けられたドッグドーパントは、直ちに視線でヒートドーパントを追う。その目に写ったのは指先に点る火を自分に投げつけるヒートドーパントの姿。投げつけられた火は直径数十センチ程の火球へと変化し、ドッグドーパントへと迫る。

低空を駆けるドッグドーパントは、左手を地面に突き立て急停止し、すぐに両足で後ろに跳ぶ。

後ろに跳び去った直後、火球が地面に着弾、地表を捲り上げ、中を溶かす程の爆発と火柱を上げた。溶けた地面は赤熱し火球に込められた威力を嫌でも知らしめる。

ドッグドーパントが立った場所に再び火球が飛んでくる。再度後ろに跳び去るが、またその場所に火球が放たれる。ドッグドーパントはバック転で回避するとその勢いのまま背後にある倉庫の壁に両

足の爪を起て、壁に対して垂直に止まった。地に降り立ったヒートドーパントは今だに指先に火を点しているが、放つ気配はない。ヒートドーパントとドッグドーパントとの距離は既に十メートル以上離れている。先程はその半分もない距離で火球を当てることが出来なかった。そのためヒートドーパントは今この距離で攻撃しても無駄だと悟り、相手の出方を待つ姿勢をとっていた。

ドッグドーパントも相手の意図が分かっているのか、口の端を吊り上げて笑い、体を反転させると倉庫の壁を駆け上がり、屋根の上へと姿を消した。明らかに何かを仕掛けてくるのは明白であった。

ヒートドーパントは短い時間で思考する。このまま相手の誘いにのらず、倉庫ごと炎で吹き飛ばす考えが浮かんだが、直ぐに考え直した。倉庫を吹き飛ばす程の炎を生み出すには多くの力が必要とするし、隙も大きく倉庫を吹き飛ばす前にドッグドーパントに逃げられたなら無駄な力を浪費したことになる。ゆえにヒートドーパントの選ぶ手段は正面から挑む方法であった。無謀ともとれる手段ではあるが、自らの持つ力と技を信じた上での判断であった。

ヒートドーパントは二歩、三歩と勢いをつける為に地面を蹴り、四歩目で大きく踏み出し十数メートルの高さがある倉庫の屋根まで一気に跳んでいった。

屋根に飛び乗ったヒートドーパントの目に最初に写ったのは、ヒートドーパントのいる方向に向けて大きく胸部を反らした格好をしているドッグドーパントの姿であった。

一瞬、何をしているのか理解出来なかったヒートドーパントだったが、すぐに相手の意図に気付くがその時には既に手遅れであった。

ウオオオオオオオオオオオオ！！

ドッグドーパントが極限まで吸い込んだ空気が肺から喉を通過していったとき、ドッグドーパントの口から秒速三百四十メートルの

見えざる暴力が吐き出された。

咆哮は倉庫の屋根を大きく震わせ、ヒートドーパントに直撃、ヒートドーパントの脳を圧倒的な力で無理矢理揺さぶり尽くされる。

たまらずその場で膝を突き動きを停めてしまう。

ドッグドーパントの爆音のような咆哮は、ヒートドーパントの動きを停めただけには留まらない。ヒートドーパントの耳は咆哮を聞いた瞬間から耳鳴りしか聞こえず他の音を一切感知出来なくなり、またヒートドーパントの平行感覚も大きく狂わせおり、足元が揺れるような感覚が続きまともに立つことも出来ない。またヒートドーパントの視界は激しい勢いで回転する光景が写っており、聴覚などと同じくまともに機能していなかった。

一撃で相手の運動能力を奪ったドッグドーパント、彼がこの機会を黙って見過ごす訳もなく、四肢を地面に着けると一気にヒートドーパントに目掛け駆けていく。

まともに相手を認識することが出来なくなったヒートドーパントであるが、彼女はドッグドーパントが今自分に向けて迫ってきていることを認識していた。

それは、視覚や聴覚などで認識したのでは無く、多くの戦いを通じて得た戦闘者としての感覚が迫るドッグドーパントの存在を囁いていた。

迫ってくることは認識出来ているが、肝心の相手の場所は戦闘者の感覚を持ってしても分からない。ゆえにヒートドーパントはある行動にでる。

ヒートドーパントが右手を振り上げる。軽く広げた右手に火が点る。ヒートドーパントはその燃え盛る右手を力の限り自分の足元へと叩きつけた。

「はあ！」

その結果起きるのは自分を中心にした爆発。炎を巻き上げ倉庫の

屋根を吹き飛ばす。

「おわ!？」

ヒートドーパントを中心に半径数メートルが炎によって崩れ落ちる。ヒートドーパントにあと数歩という位置にまで迫っていたドッグドーパントは突然の熱波と炎に思わず両腕を交差して顔を守るが、次に起きた足場の消失には咄嗟に対応出来ず、ヒートドーパントもろとも落下していった。

落下した倉庫の中、屋根の焼け落ちた資材が長年積もっていた埃を巻き上げ、辺り一面を曇らせていた。

落下していくなか空中で体勢を整えたドッグドーパントが両足から着地する。さほど離れた距離にはいなかったヒートドーパントを探すが舞い上がる埃が視界に制限を与え、すぐには見つからない。そのときドッグドーパントの鼻が微かに動く。舞い上がる埃の匂い、腐った木匂い、カビの匂い、焦げた匂い、多くの匂いの中から一つの匂いをかぎ分ける。匂いの発生元はドッグドーパントの背後、そしてこの匂いは動いていた。

ドッグドーパントが振り向くと、赤く光る物体が赤の軌跡を描きながらドッグドーパントの顔を狙い、飛んでくる。

振り向いたドッグドーパントはそれに対して躊躇うことなく右拳を叩きつけた。弾けるような激突音がすると二つのぶつかった衝撃の余波で、空中を舞う埃が吹き飛ぶ。

視界に塞ぐ埃が消え失せたとき、そこにあったのはドッグドーパントに向けて上段蹴りを放っていたヒートドーパントの姿があった。

「もうまともに動けるのか、タフだね」

「それが長所だからね」

攻撃を防がれたヒートドーパントはその場で追撃、振り上げた右足を戻すと同時に左の爪先をドッグドーパントの鳩尾を狙い突き出される。だがその攻撃も下から突き上げたドッグドーパントの膝によって防がれる。跳ね上がる左足、そのせいでヒートドーパントの体勢が崩れる。それを狙い今度はドッグドーパントの右手がヒートドーパントの喉元に手刀を繰り出す。指先に並ぶ刀剣のような爪、当たれば無事では済まない。

ヒートドーパントは、右足を地面から放す、それによりヒートドーパントの体が沈み、ドッグドーパントの手刀が頭上を通過する。両足が宙にある状態で、ヒートドーパントは片手を地面に着けると体を捻り、その勢いで生まれた力を右足に込めドッグドーパントの脇腹に横薙ぎに叩き込む。攻撃を避けられ前のめりの体勢になっていたドッグドーパントにそれを避けることは出来なかった。

「ぐう！」

短く叩くドッグドーパント、今度は突き刺さる足に狙いを定め、肘を振り下ろすが、ヒートドーパントは地面に着けた手を放すと再び全身を捻ると相手に背を向ける格好となりながらも振り下ろされる肘に反動で勢いのついた自らの踵を叩きつけようとする。

不安定な姿勢で放たれたせいで、ヒートドーパントの攻撃はドッグドーパントに比べれば軽い。衝突してもこのままでは強引に押しきられてしまう。相手もそれが分かっているのか、攻撃を潰すためにドッグドーパントの腕の筋肉が隆起していく。

ドッグドーパントの肘とヒートドーパントの踵二つが衝突する。骨と骨とがぶつかりあう鈍く、全身の肌を震えさせるような音。

均衡は一瞬、やはりドッグドーパントの攻撃が上回り軍配が上がるうとしたとき――

ヒートドーパントの踵から炎が噴き上がる。宇宙へと巨体を持ち上げるロケットの噴射孔、鉄をも焼き切るバーナーのように一点に

集中された直線的な熱の噴射。接触するドッグドーパントの肘だけに収まらず、その腕ごと焼き落とすかのような高熱の暴力であった。

「おおああああー！」

たまらず絶叫を上げるドッグドーパント。彼の纏う白い体毛は瞬時に灰となり、その奥の肉を容赦なく焼く。

ドッグドーパントはたまらず後方へと飛び、ヒートドーパントと距離をとる。

ヒートドーパントもそれを見るとすぐに立ち上がり、体勢を整えた。

「ぐう……ん……」

ドッグドーパントの喉から漏れる苦痛の声。ドッグドーパントの腕はは誰が見てももう使える状態ではない。高熱にさらされた皮膚は焼け爛れ、赤黒い肉を露出させており、一部は炭化までしていた。呻きは、本人は意識して止めようとするが、僅かに腕を動かすたび、風が当たるたびに激痛が走り、声が出てしまう。

「苦しそうだね？　そろそろ楽になる？」

ヒートドーパントの挑発にドッグドーパントは痛みで歪む顔に無理矢理笑みを浮かべる。

「まだまだ……こんな……楽しいこと……終わらせる……つもりはまだ……ないね」

ドッグドーパントの途切れ途切れの言葉、おそらく声を出すという僅かな動作でも激しい苦痛に苛まれているのがわかる。

「あつそう」

ヒートドーパントは短く応えようと、地を踏み出し一気に駆けた。もとより相手の状態など興味もなく、終わらせるつもりで仕掛ける。だらりと片腕をたらし、腕一本で構えるドッグドーパント。

走るヒートドーパントは指先に炎を生み出すとドッグドーパント目掛け容赦なく放る。

痛みによって萎縮する体に鞭を打って無理矢理体を動かし、左に回避する。しかし、それを読んでいたのか回避した先でドッグドーパントの目に再び迫ってくる火球が写る。

避けようにも間に合うタイミングではない。もし、ドッグドーパントの状態が完全であったのなら、この二撃目も回避することが出来たはずだが、今となつては無意味なことである。

「くおおおおお！」

避けることは出来ない、そう判断したドッグドーパントの行動は早い。空気の焦げる匂いを鼻先で感じたとき、ドッグドーパントの片腕が火球を横薙ぎに払い、打ち消した。

致命傷は避けた。しかし、代償も軽くはない。

白煙を上げるドッグドーパントの手、手の甲から腕の半ばまでの体毛は焼け落ち、手の甲は先程焼かれた腕ほどではないが剥き出しになった皮膚からは、赤い肉が生々しく光っていた。

両腕を使い物にならない状態にされたドッグドーパント。しかし、その眼から光が消えることはない。むしろ、今、この瞬間を一秒でも長く延ばすことを考え、貪欲な輝きに満ちている。

「まだだ……まだ……」

ヒートドーパントは接近戦で仕止めたいのか、火球を放るのを止め、一気に距離を積めていく。

ドッグドーパントにとつては有難い展開である。ヒートドーパントの身長は百八十センチ前後、対するドッグドーパントは二メートルを越えている。接近戦においては間合いの広いドッグドーパントが先手を取れる。

だが、ドッグドーパントすでに勝ち負けなどは考えてはいない。こちらが仕掛け、相手がどう返してくるのか、プレゼントの中身に心躍らせる子供のような好奇心だけしか今の彼にはない。

ヒートドーパントの足先が、ドッグドーパントの間合いに入ったとき、バネ仕掛けのような瞬発さでドッグドーパントの足が跳ねがあり、ヒートドーパントを穿つように突き出される。

怪我の状態など完全に無視したドッグドーパントがいま放てる最速の一撃。空気の壁を何層も一瞬で貫き、ヒートドーパントに迫っていく。

捉えた！

そう確信したドッグドーパント、しかし、彼の卓越した眼があるものを見た——ヒートドーパントの唇が笑みを形作る瞬間を。

突き出された蹴りの先にいるヒートドーパントの姿が突如として消える。

ドッグドーパントの眼だけがヒートドーパントの動きを捉える。ヒートドーパントはドッグドーパントの蹴り出された足の上に飛び上がった。そして、ドッグドーパントの伸びきった足に下から持ち上げるようにして左足の甲を当て、反対の右足は膝を曲げ、胸の辺りまで持ち上げられている。

これから何をするのか、ドッグドーパントは自分でも意外なほどに冷静な思考で判断し、そしてこの後の結末を思い浮かべ、残念そ

うな笑みを浮かべた。

ヒートドーパントの曲げられた右足が勢いよく垂直に落下する。落下した右足は下から持ち上げている左足と互い違いドッグドーパントの足を挟み込み、その足を砕く。

足を砕かれたドッグドーパントは悲鳴を上げることはず、折られた衝撃で体制を崩され膝をついてしまう。

片足では立ち上がることもすら困難な状態のドッグドーパントにさらに追い討ちをかけるようにヒートドーパントの前蹴りがドッグドーパントの胸部に叩き込まれる。

「……ッ！……ハッ！」

その蹴りの重さで満足に呼吸することが出来ないドッグドーパント。しかし、これは彼にとっては幸運であった。

ヒートドーパントの密着した足が、ドッグドーパントの胸部で激しい炎を生み出し爆発したからだ。至近距離でナパーム弾を爆発させたかのような威力。もし、呼吸が出来ていたならば灼熱の空気を吸い込み肺が焼け落ちていただろう。爆発の勢いで壁に叩きつけられたドッグドーパントの胸部は両腕よりもさらに酷い状態になっており、一般的な感覚の人間が見れば思わず眼を背け、全身に鳥肌を立てていたであろう。

壁に寄りかかり辛うじて立っていたドッグドーパント、生気を失いつつある瞳に見えたのは、灼熱の炎のその脚に宿し、紅蓮で弧の軌跡を描きながら、自分に飛び掛かるヒートドーパントの姿。

カッコいいなあ、などと場違いな感想を抱きながら抵抗する意思を見せないドッグドーパント。

その直後に喉に打ちつけられる衝撃と骨が砕ける音。ドッグドーパントはそのまま持たれた壁から滑るようにして力無く地に両膝を着き、頭を垂れ下げたまま動かなくなる。

放っておいてもこのまま絶命することは間違いない。ヒートドー

パントは背を向け歩き出す。数歩進んだところで足を止めると、右手を掲げ、その手に紅蓮の炎を燃え上がらせる。

「じゃあね」

振り返ることなくその炎をドッグドーパントへと放つ。炎はドッグドーパントの全身を包み込み激しく燃え盛る。

死に逝く存在への紅蓮の抱擁。これを情けとるか残酷ととるか、それは散り逝くものにしか分からなかった。

ああ、終わりが……

自らが燃え尽きていくなか男は、炎の荒々しさとは正反対に静かに今までのことを振り替える。

俺は結局、あのメモリに踊らされていたのかな……？

自らの楔を解き放ち、仲間を殺すきっかけとなった元凶、しかし、男の中に不思議と恨む気持ちはない。

色々やれたし、まあ、いいよな

自分が望むような自分で最期を飾れた、この充実感には彼にとって地位や名誉よりも価値のあるものだった。

ああ……それにしても……

万感の思いを込め最期の思いを紡ぐ。

ほんと、楽しかった……

レイカはバイクを停めると、ヘルメットを脱ぎ、ポケットの中に入れておいた通信機を取り出す。

今、レイカがいるのは倉庫街から離れ、風都の中心へと向かう道路。あの倉庫街へ長居すれば増援が来る可能性を危惧し、ここまでの走ってきた。

通信機を操作し目当ての人物に連絡を入れる。

「ああ、克己。……そうアタシも手に入れたよ。このまま克己に合……」

そのとき、レイカの眼があるものを捉える。前後が黒と緑に分けた色をした風変わりなバイクに乗った二人乗り人物。

バイクを操作しているのは男性。黒のズボンとベストを着たあまりバイクに乗るのに適さない格好をしている。後ろには小柄な女性が乗っており前の男にしがみついている。

目の前を通過した時間は一秒ほど、しかも両者はヘルメットをきちんと被っている。しかし、並外れた身体能力を持つレイカの眼には、その二人の顔がしっかりと見えていた。

「……合流は少し遅れそう。……ちょうど見つけたの。この街の仮面ライダーの片割れ。少し遊んでみる。いいでしょ、克己？」

レイカは通信機越しの答えに満足したのか微かに笑う。

「まあ、一人でも大丈夫だと思うけど……ああ、京水たちも声を掛けておくの？ ……まあ、いいけど。遊びで済ますつもりだけど、もしかしたら潰すかもしれないけど、いい？ ……そう、また後で連絡する」

通信機を切り、ポケットに仕舞ったとき、レイカはふて自らの手を眺めた。

手を軽く握り締める。返ってくるのは熱の無い冷たい感触。T2 ヒートメモリを体内に入れたときに生まれた全身を駆け巡る熱は既に冷めていた。

かつて、人だったときの名残、心のどこかでそれを求めていたことが、自分とこのメモリを引き合わせたのかもしれない。

レイカは自嘲気味に笑うとヘルメットを被り、走っていったバイクの後を追いかけた。

失ったモノは戻らない、だがその失ったモノを完全に諦めるほど自分の心の熱は冷めきっていない。

この思いは、レイカにとって馬鹿馬鹿しく思えると同時に少しだけ嬉しかった。

Hの灼熱／羽原レイカの章その3（後書き）

今回は無口スナイパーの彼が主役です。

ああ、それと本来五人で話を終わらせるつもりでしたが、あの人の話も書いてみようと思っています。

誰かはこうご期待。

レイカ編ドーパント設定（前書き）

レイカ編のドーパントの設定です。

レイカ編ドーパント設定

ドッグ・ドーパント

身長・215cm

体重・100kg

特色/力：卓越した五感に強靱な脚力を備え、爪や牙を用いて高速の戦闘を行う。

動物の「犬」の記憶を持つガイアメモリを使用して変身したドーパント。

五感が発達し、特に嗅覚、視覚、聴覚が強化され、例えば眼が見えない状態になっても他の感覚で補えるほど正確な機能を持っている。脚力も強靱なものとなっており、最高時速三百キロの早さで数十分走り続けることが出来る。また、両手両足を使えば瞬間的ではあるが、両足で走っているときの倍のスピードを出すことが可能。

両手両足に生やした爪は、コンクリートを貫くことができ、口に並ぶ牙は鉄をも噛み砕くことができる。数十分走り続けることの出来る優れた肺を使い、一気に空気を吸い込み咆哮とともに相手に叩きつけ、脳にダメージを与える裏技を持っているが、ドーパント相手には一時的に運動能力を奪うことが限界、ただの人間だった場合は死亡させることが可能。

変身するのは茶髪の男。生体コネクタの位置は肘。

飄々とした態度とは裏腹にその性格は非常に好戦的で闘争に楽しさを見出だす戦闘狂。

常に血の匂いがするような死地を好み、自らの命よりも戦いで得られるモノを優先する。

ミュージアムと敵対する相手と戦い続けた結果、本人の意思とは無関係に出世してしまい、最前線から遠ざかることになってしまっ

た。このことは本人にとっては非常に好ましくないことはあるが、組織に対して恩があるので渋々今の立場にいる。

複数いる部下との関係は良好で交流もあるが、男にとってはあくまで立場としての役目を果たしているだけに過ぎず、部下との交流も道具の手入れか設備のメンテナンスぐらいの感覚で行っている。

ヘリの爆破事件後、NEVERを始末する仕事を与えられたが、部下の頼みにより傍観することになったが、そのときT2ヒートメモリを拾う。本来ならすぐに報告すべきことだが、今の立場のストレスとゴタゴタの多い組織への不満からか、ささやかな反抗として報告を先送りにした。

その後、羽原レイカの戦いを見て、戦いたい欲求に駆られたところをT2ガイアメモリの力によって増幅され、ドッグドールパントとなり、部下のマスカレードールパントたちを皆殺しにし、自らの欲望と向き合い覚醒、羽原レイカにT2ヒートメモリを渡し、戦いを繰り広げる。

最終的には相手との実力の違いにより完敗。炎によって燃やされが、戦いによる充実感を得られ、楽しかったと最期に思い、死亡。

ちなみにT2ヒートメモリが男のもとに現れたのは、男に引き寄せられたからではなく高い相性を持つレイカに会う為の仲介役にする為に現れた。

Ｔの銃口／芦原賢の章（前書き）

ようやくVシネマを見ました。

個人的には、好きな展開だったので楽しめました。

今回の主人公は、そんなVシネマで映画よりもセリフがあった彼です。

丁の銃口／芦原賢の章

乾いた複数の靴音が反響し、静寂に満ち、生のなかった空間に一時的な生を吹き込む。

靴音の主たちは、全員が同じ黒のスーツで統一した格好をしている。そして、頭部もまた服装と同じく統一され、黒の地に白い骨のような模様が浮き出た覆面に覆われていた。

全員が全く同じ格好をする。見る人間によつてはひどく滑稽な集団に映り、指を差して笑うかもしれないが、覆面の男たち全員が手に持つ黒光りする拳銃を見たのならば、すぐに笑うのを止め、震え上がるだろう。

男たちの正体はマスカレードードーパントと呼ばれる怪人。ガイアメモリと呼ばれる地球上に存在する記憶を宿す装置で「仮面舞踏会」の記憶を秘めたガイアメモリを使用してその身を変えた者たちである。

彼らがいる場所とはある廃ビルの三階。数ヶ月前に倒産し、人が寄り付かなくなった場所ではあるが、埃やゴミなどが所々に積もり、机やイスなどがまだ置いてあることに人がいた名残を強く感じさせていた。

マスカレードードーパントたちは、数人で行動し、前後左右に気を配りながら壁伝いにビルの廊下を歩いていく。

先頭にいるマスカレードードーパントが曲がり角に差し掛かると慎重に進みながら曲がり角の先に頭を出し何もなければ確認をする。

何もないことが分かると先頭のマスカレードードーパントは後ろに控えているマスカレードードーパントたちに指で合図を送り、先に進むことを促す。一人一人曲がり角の先に消えていき、最後の一人が曲がり角を曲がるとしたとき、突然背後から伸びてきた手によって口を押さえつけられる。

「……！」

咄嗟に声を出そうとするが、凄まじい握力によって締め付けられ声を出すことが出来ない。

そのまま後ろに引つ張られると壁に顔面から叩きつけられ、拳銃を握っていた手を後ろに持っていかれ鉤状に曲げられると、それを背中に押し付けて拘束される。

マスカレードドーパントが逃れようと行動するよりも早く、マスカレードドーパントの後頭部に冷たい塊が押し付けられる。

その覚えのある感触に背筋を凍らせ、必死になって仲間知らせようとする。

「ゲームオーバー」

が、後ろに立つ人物の声と同時に押し付けられた塊――拳銃から弾丸が吐き出されマスカレードドーパントの頭部を撃ち抜いた。

突然鳴った発砲音に、曲がり角の先にいたマスカレードドーパントたちは弾かれたように後ろに振り向く。最後尾にいたマスカレードドーパントの姿は無く、慌てて来た道を戻っていくマスカレードドーパントたちが見たものは、地面に横たわった仲間が塵に変わり果てる姿だった。

マスカレードドーパントたち全員を包み込む恐怖や悲しみに満ちた沈黙。

「周りを確認しろお！」

マスカレードドーパントの一人の怒声で、我にかえったように急いで円陣を組み、拳銃を構えて周囲に敵の姿が無いかを確認。些細な変化も見逃さないように目を凝らし、物音一つ聞き逃さないように耳にも神経を集中させる。

先程の沈黙とは違い、空気が張り詰め、緊張感に満ちた沈黙。それが、いつまでも続くかと思えたとき、唸るような音が響く。反射的に拳銃を向けるマスカレードドーパントたちだったが、その先にいるのは同じくマスカレードドーパント。

「ちよつ、ちよつと待て！」

拳銃を向けられたマスカレードドーパントは、慌てて他のマスカレードドーパントたちを制すると、スーツの内ポケットに手を伸ばし、中からマナーモードになって震えている携帯電話を取り出した。

「もしもし、俺です」

マスカレードドーパントは、通話ボタンを押し、携帯電話の向こう側にいる人物に話し掛ける。

『遅いですね。十分置きに連絡を入れて下さいと言ったはずですが？』

電話の向こう側から聴こえてくるのは、丁寧な口調で話してくるも、まるで鉄のように無機質で体温を感じさせない声。その声にマスカレードドーパントの体は緊張で硬直し始める。

「す、すみません！て、敵が攻めてきてそれで！」

『そうですか、分かりました。それで被害の方は？』

「ひ、一人殺られました」

『分かりました。これで敵はまだビル内に居たということが分かり

ましたね。引き続き探索をお願いします」

人が一人死んだという事実にも携帯電話の向こう側にいる人物の態度は変わらず事務的な口調で話し続ける。

「わ、分かりました引き続き探索を続行します」

彼らマスカレードーパントたちがこの廃ビルを探索することになった切っ掛けは一つの情報であった。

『配られた資料にある人物を見つけた』

そのような情報が仲間から入り、急いで仲間の元へと向かったが、到着するよりも前に資料の人物がとある廃ビルに入ったので後を追う、という連絡を最後に仲間との情報は途絶えてしまった。

そして今、その仲間の情報にあった廃ビルへと足を踏み入れ、姿を隠した襲撃者に仲間の一人の命が奪われた現状に至る。

通話ボタンを切り、周りを見るマスカレードーパント。他のマスカレードーパントたちの様子は暗く、仲間が殺られたことで士気が落ちていた。

「しっかりしろ！ もうすぐ応援もくる！ それまでに終わらせるぐらいの気概を見せる！」

声を荒げ、他のマスカレードーパントたちを叱咤する。その声には自らも感じている不安を払拭しようとするのが感じられるが、重苦しい空気を払うのには十分だった。

残りのマスカレードーパント全員が、気力を回復させ気持ちを高ぶらさせる。姿を見せない襲撃者に対して怯えるのではなく、仲間の仇をとるぐらいの気持ちで再び歩を進める。

三階を警戒しながら進んで行くが、先程とは違い全く襲われることなく四階へと続く階段へと辿り着く。

前後に細心の注意を払いながら階段を一段一段昇っていく。

階段の昇りきった先にあったのは三階とほぼ同じ光景。三階、四階とも同じ部屋の構図になっているらしい。

（いくぞ）

声は出さず、手の動きで回りに合図を送ると周囲を警戒しながら歩を進める。

マスカレードードーパント全員が一步一步進む度に、胃の内容物がせり上がってくるようなストレスを感じながらも気力で無理矢理それを押し込め、一瞬たりとも気を緩めないようにする。

そんな状況が十数分続き、四階も半ばまで探索し終えたとき、カツンという物音が響く。

マスカレードードーパントたちが一斉に物音がなった方へと銃を向ける。

物音が鳴ったのは、通路の先にある右に曲がる角の先。そのまま数十秒待つが角の先から誰かがくる気配はなく、また物音もそれ以降鳴らない。

痛い程の沈黙。

しかし、それを一人のマスカレードードーパントの足音が破る。

革靴の乾いた音を響かせ、通路の先に進んでいく。慌てて別のマスカレードードーパントが彼の肩を掴み、それを制止する。

「止める！ 危険だ！」

掴んだマスカレードードーパントの音量は出来るだけ抑えられ、掠れたような声であったが、そこに込められたモノは並々ならぬものであった。

「このままじゃ埒があかない……誰かが確かめないとな……」

「なら全員で行けば」

「最悪の場合全滅する罠が仕掛けられている可能性もある。一人で行けば犠牲も最少で済む」

「だからと言って……！」

「温いこと言うなよ？　ここで変に善人ぶるな、その態度は逆に周りを不安にさせるだけだと自覚しろ。大人しく下がれ」

有無を言わせない言葉に、制止したマスカレードーパントは何も言い返せず、無言のまま掴んでいた手を放した。

「それでいい」

そう言うつと拳銃を構え、音の鳴った場所に向かって歩き始める。マスカレードーパントが曲がり角に近づく度に、他のマスカレードーパントの心臓が早鐘のように鼓動を早め、緊張によるストレスが彼らの手足を震わせていた。

曲がり角への距離が二メートルを切る。曲がり角の先が音の発生から一向に変化しないことに何の意味も無いただの物音に過ぎないのではないか、とどこか楽観的な思考が生まれてくる。

（ただの杞憂……だったらどんなに楽か……）

長い時間、精神に負担がかかり続けていることから、それを少しでも和らげようとする現実逃避に近い思考、それを否定する現実的

な思考、二つの思考が死地になるかもしれない場所に進んでいくマスカレードーパントを静かに蝕む。

知らず知らずのうちに呼吸が荒くなり、運ぶ足も鉛のように重くなる。

自らが望んで行っていることだが、覚悟をしたところで、恐怖や不安を消せるほど人間という生き物は単純では無いらしい。

曲がり角まであと三步の距離にまで来た。

マスカレードーパントの緊張は限界まで高まる。

呼吸するのも忘れ、自分の進んで行く先を凝視し続ける。

(三……二……)

心の中でカウントダウンを始める。もう後戻りすることは出来ない。

(一……ゼロ！)

カウントがゼロになったと同時に曲がり角の先に一気に飛び込み、拳銃を構える。

が、そこに人の姿はなくゴミが所々に落ちている通路があるだけであった。

警戒を解かずに周囲を確認するマスカレードーパント。

するとマスカレードーパントの頬を撫でるように風が吹き、再びカッンという音が足元から鳴る。

見ればそこには捨てられた空き缶が、風に吹かれ別の空き缶にぶつかっていた。

それを見てマスカレードーパントは思わず脱力してしまう。

いま来た通路もゴミが所々に落ちていたが、マスカレードーパントたちが歩いてきた通路と曲がり角の先にある通路には違いがあった。

曲がり角の先の通路は窓ガラスが何枚か割られていたり、窓を開放してあつたりと随分と風通しの良い状態にされていた。

物音は、そこから吹く風にゴミとゴミが衝突していたのが原因らしい。先程まであつた緊張はすっかり霧散し、待機しているマスカレードドーパントたちの方へ振り替える。

「全く、人騒がせな風だよ！」

他のマスカレードドーパントたちに良く聞こえるような通った声で物音の原因を話す。

その言葉を聞き、マスカレードドーパントたちの不安はようやく消えた。

タン

そのとき新たに響く、通路の上に何かが降り立ったような重みを感じさせる音。

「え？」

曲がり角からマスカレードドーパントたちへと合流しようとしていたマスカレードドーパントは足を止め振り向く——ことは出来なかった。

振り向こうにもマスカレードドーパントのコメカミに突きつけられた拳銃がそれを拒んでいた。

マスカレードドーパントたちの息を呑む声が聞こえる。

あまりに唐突に現れた死を前にして、突きつけられたマスカレードドーパントの時間は何十倍にも引き延ばされたかのような感覚に陥る。

辛うじて目だけを動かし、拳銃を突きつけている人物を見る。

黒のグローブで覆われた両手が拳銃を固定、赤のラインが入った黒のジャケットのせいで拳銃から腕まで同化しているような錯覚を覚える。

軽く撫で付けた髪に、刃を彷彿させるような冷たく鋭い眼、その眼からは鋼のような眼光を放っている。顔には表情らしい表情は浮かんでおらず、人を殺そうとする人間の表情としてはあまりに淡々としていた。

死にゆくマスカレードードパントの目に焼き付けられる最期の光景、一秒にも満たない時間が過ぎたとき、拳銃から発射された弾丸はマスカレードードパントの頭蓋を貫いていった。

横殴りにされたように倒れていくマスカレードードパント。倒れたマスカレードードパントは爆発し塵になる。その姿を他のマスカレードードパントたちは、呆然と眺めていた。

安堵した瞬間に訪れた突然の襲撃、現実の余りの落差に精神が一時的な空白状態を造り出す。

そして、襲撃者はそれを狙ったかのように曲がり角から飛び出す。それと同時に鳴る二発の発砲音。

こちら側の配置を全く把握していない状態にもかかわらず、襲撃者の放った弾丸の一発目は一番手前にいたマスカレードードパントの胸部に命中、そして立て続けに額に命中した。

撃たれたマスカレードードパントが塵になるよりも速く、三発目の銃弾が別のマスカレードードパントの心臓に撃ち込まれ、最初に撃たれたマスカレードードパントが塵になったと同時に四発目の銃弾が三人目のマスカレードードパントの額を撃ち抜いた。

この間、五秒にも達していない。

三人目が殺られたときに全員が正気へと返り、構えていた拳銃の引き金を引こうとするが、その間にも五発目の銃弾が一番最初に正

気へと返ったマスカレードードーパントの顔面を穿ち、死ぬのを見届けずに、襲撃者は駆け出した。

この時点になってマスカレードードーパントたちの拳銃から銃弾が弾き出される。しかし、それを見越していたのか、襲撃者は壁際に向かつて走るとあるうことが勢いを殺さないまま壁を踏みつけ、壁を上を走り始める。

その不安定な状態狙いを定め、六、七発目の銃声を鳴らし、二人のマスカレードードーパントを地に伏せさせた。

すぐに壁を駆けている襲撃者に拳銃を向けるが、向けられる前に壁を蹴り、マスカレードードーパントたちの前に飛び出す。

相手の一歩先を行く行動に完全に振り回されるマスカレードードーパントたち。

拳銃の向きを修正する前に、襲撃者は拳銃を構えたまま一番近くにいるマスカレードードーパントの右脇腹を蹴り、すぐ隣にいたマスカレードードーパントを巻き添えにして壁まで飛ばす。

それによって後方にいたマスカレードードーパントの姿が露になり、襲撃者は引き金を引き、合わせるかのように崩れ落ちていくマスカレードードーパント。

襲撃者の動きはいまだに止まらず、次に狙いをつけたマスカレードードーパントの懐に潜り込むと、マスカレードードーパントの顎を肘で叩き上げる。

仰け反るマスカレードードーパントに銃口を向けるが、先程壁に叩きつけたマスカレードードーパントたちの内の一人が、拳銃をこちらに向けようとするのを視界の端に捉える。

すぐに身を低くし、体勢を変えると、その二人のマスカレードードーパントに銃口を向けるが、今度はマスカレードードーパントたちの方が早く引き金を引いた。

しかし、銃弾は襲撃者のジャケットを僅かにかすり、通路にめり込んだだけで終わってしまう。

銃弾が外れると今度は、もう一人が傷付いた体に鞭打ち構えるが、

その少しの時間のロスが相手に攻撃の機会を与える。

男は地を蹴り上げて一気に加速。先程銃を撃ったマスカレードードーパントの手を拳銃のグリップごと掴むと、引き金に掛かっていた指に自分の指を重ねる。そして、そのまま手首を返し、もう一人のマスカレードードーパントの頭に無理矢理ねじ曲げた。

その流れで、自らの持つ拳銃を拳銃を掴んでいるマスカレードードーパントの胸に押し当て、同時に相手と自分の引き金を引いた。重なる発砲音、そして二人のマスカレードードーパントが塵へと還っていく。

「う……あ……」

先程男に殴り倒されたマスカレードードーパントが、ようやく立ち上がる。

一瞬、自分の周囲を見回し、自分以外立っていないことに驚愕し、そして目の前に立っている男に恐怖した。

「う、ああああ！」

半狂乱状態で銃を構え、ろくに狙いをつけずに引き金を引こうとするが、それよりも早く、男の靴底がマスカレードードーパントの胸の中央に押しつけられ、密着した状態で一気に蹴り飛ばした。

マスカレードードーパントの体は宙に浮き、背後にあった窓ガラスを突き破り、ビルの下へと落ちていく。

「ゲームオーバー」

それが落下していくマスカレードードーパントが最期に聞いた言葉であった。

廃ビルの前に一台の黒塗りの高級車がエンジンを止め、停車する。ドアを開け、中から現れたのは黒のスーツで身なりを整え、眼鏡をかけた三十前後の男。

男は腕に巻いてあるブランドものの腕時計の時間を確認すると、ため息を短く吐き、スーツの懷から携帯電話を取り出し、誰かに電話をかける。

その直後、目の前にある廃ビルの窓からガラスを突き破り、人が落ちてくる。

もがくように空中で手足を動かすが意味も無く、やがて落下地点に停めてあった車の屋根に衝突した。

屋根はひしゃげ、ガラスも全て砕け散り、車を大きく変形させる。それでも落ちてきた人物は僅かに息があり、自分が落ちた階に、震える手を伸ばす。

眼鏡の男は眉一つ動かさず、落ちてきた人物——マスカレードード——パントを一瞥すると、携帯電話を切り、仕舞う。

「ご苦労様でした」

眼鏡の男が短く告げるとマスカレードードパントは、伸ばした手を力無く下し、やがてその身を塵に変えた。

「遅れた分、きちんと仕事はするつもりですよ」

再び、眼鏡の男は懷に手を入れ、今度は携帯電話とは違う物を取り出す。

骨のような生物的な装飾を施され、中央にアルファベットが描かれたUSBメモリに酷似した物体——地球の記憶をその中に宿したガイアメモリ。

眼鏡の男はガイアメモリを起動させ、その内に眠る記憶を呼び起こした。

「ん？」

全てのマスカレードパンツを葬った男——芦原賢は、この廃ビルを後にしようとし不意に足を止めた。

何かがいるわけではない。しかし、賢の中で培われてきた経験が彼の意識に囁く、油断するなど。

周りを見渡し、再び足を進めようかとしたとき、賢が弾かれたかのように背後へと振り向き拳銃を構える。

構えた先には誰もいない。しかし、今この空間には誰かが存在する。見えざる者の敵意がこの場所に渦巻いているからだ。

「いい勘です」

賢の耳のすぐそばで聞こえる声。咄嗟に声の方へ向くが誰もいない。

次の瞬間、通路の壁に張られた窓ガラスが奥側から順に砕け散っていく。

「ッ！」

賢のすぐ隣の窓ガラスが割れると同時に賢の体は藁屑のように宙に舞った。

丁の銃口／芦原賢の章（後書き）

意外なことに妻子あり設定の賢。

この設定を生かせるか頑張ってみたいです。

丁の銃口／芦原賢の章その2（前書き）

芦原編のその2です。

様々な方の応援で、この小説も三分の二が終わりました。
ありがとうございます。

Tの銃口／芦原賢の章その2

体勢が上下左右と激しく入れ替わっていくなか、賢は冷静に今の状態を判断し、通路に頭から落下していく瞬間、直ぐ様足を降り下ろし、片手と両膝を着いた姿勢で着地する。

先程立っていた場所から数メートルほど飛ばされ、現在は通路の突き当たりで壁を背にした状態で立っているが、少なくとも賢にとっては都合の良い状況であった。

姿の见えない相手を前にして、背後から攻められる可能性を無くしたからだ。

座ったままの状態、片手で拳銃を構え、通路の先に神経を集中させる。

「成る程、判断能力や身体能力は常人とは別格ですね。マスカレードでは対処できないはずだ」

耳のすぐ側で喋りかけてくる声。まるですぐ隣にいるかのような錯覚を覚えてしまうが、気配は無く、先程と同様そこには誰もいない。

賢も言葉に惑わされず、前方に向かって弾丸を発射。弾倉に残された弾を全て弾き出す。発射された弾丸は、視界では捉えられない速度で空中を駆け抜けていくが、その疾走は突然止められる。

見えざる壁にぶつかったかのように、弾丸は全て空中で留まる。まだ力が残っているのか、激しく回転をしているが、それでも一ミリたりとも先に進む様子は無い。

やがて力を失い、回転を止めた弾丸は、下に落ちていった。

「残念ですが、ただの拳銃では私に届きませんよ」

今度は、耳のすぐ側ではなく、通路全体に響く声。敵は恐らく前方にいないはずなのだが三百六十度、全方向から聴こえる声が、その考えに揺さぶりを与えてくる。

賢は、素早く空になった弾倉を抜くと新たな弾倉を取り出し、拳銃に装填。一秒以内に行われた動作に隙はなく、相手に攻撃させる時間は与えない。

賢の離れた距離での攻撃は既に封じられている。なら次にとるべき行動は決まっている。

拳銃を片手に持ち、賢は見えざる相手に向かって突撃する。

最初に牽制の弾を数発放つ。やはり先程と同様、空中で静止する。しかし、賢にとっては有り難いことである。何故ならまだ敵は場所を移動していない確率が高まったからだ。

静止した弾丸がある場所目掛け、加速によって勢いをつけて、飛び上がり右爪先を刺すよう放つ。

爪先にかえってきたのは厚手のゴムに包まれたかのような弾力的な感触。その弾力に押し返され、後方へと飛ばされると、瞬時に姿勢を整え両足から着地する。

このとき僅かな時間、敵から意識を逸らしてしまう。その代償は、すぐに支払われることになる。

初めは軽い衝撃であった。賢の左胸を指先で押されたかのような感触。しかし、その感触は徐々に凶悪なものへと変化していく。

黒のジャケットの上に浮かぶ小さな窪み、それが次第に螺旋状に捻れていき、左胸にかかる圧力も増していく、やがて賢の体内に響く肉の潰れていく音と骨の軋みを上げる音。

螺旋が限界を越えたとき、賢は弾けたように吹き飛ばされた。

通路の上を二転三転と転がっても勢いは止まらず、仰向けになった状態で数メートルも通路を滑っていった。

ようやく止まると、賢は咳き込む。咳き込む度に口から血が吐かれ内臓にも強いダメージを与えられたことが分かる。

だが賢はすぐに咳き込むのを止め、口に付いた血を拭いとると機

敏な動きで立ち上がる。

NEVERの持つ再生能力が負傷した箇所を迅速に回復させているせいでもあるが、再生をしても痛みが消える訳ではなく、すぐに立ち上がったのは一重に賢の持つ精神力の強さによることが大きい。

賢は相手の能力について理解し始めていた。

今までに相手が使用した能力は、自分の姿を消すこと、自分の声を好きな位置から出すことが出来ること、弾丸を止める防御手段を持つていること、見えない力で相手を吹き飛ばすことの四つである。この情報から推測して相手の能力の正体も大体は把握したが残念なことに、もし賢の推測が合っていたのならば、今の賢の手元に相手を仕止める確率は大きく減ってしまう。

隠密行動を重視して普段使用している銃器は、別の場所に置いてきてしまったことが仇になってしまった。

しかし、だからといって戦いを放棄し逃走を選択するほど芦原賢という存在は臆病ではなく、また諦めの良い人物ではない。今ある手元にある武器で、やれることをやるのみである。

再度、賢は拳銃を構え、前方に撃ち始める。

前と同様に見えない壁にぶつかり弾は空中に留まる。

「無駄ですよ。それでは私には届かない」

響く声を見殺して前に走り出し、再び弾丸を数発発射した。結果は、さっきと同じく空中で弾丸が静止する。

「距離を詰めても意味がありませんよ？ 往生際が……」

そこで声は止まる。何故途中で止まったのか、それはあるものが入ったからであろう。

空中に留まる無数の弾丸。どれもが、未だに力を失わずに回転を

続けている。

その中で一つだけ、他とは異なる弾丸。他の弾丸がほぼ同じ位置に静止している。

だが一つの弾丸だけが他の弾丸よりも前に押し出されていた。

賢はその前に押し出されている弾丸がある場所目掛け、拳銃を握った右手を突き出す。

銃口が弾丸の底に当たり、固い感触が返ってくる。賢は、その感触を感じたのと同時に引き金を引く。

金属と金属とが接触する固い音。

二重になった弾丸が、見えない壁を突き破り、その先にあるものに当たり火花を散らす。

「くっ！」

聞こえた声は、耳元や四方八方から聞こえるのではなく、前方から聞こえる普通の声。

賢は更に踏み出し、拳銃を前に押し込む。分厚いゴムのような感触はなく、代わりに人の体に近い感触が銃口に伝わってくる。

「今度は届いたか？」

接触した状態で引き金を引く。立て続けに鳴り響く発砲音、スライドする度に排出される薬莢。

「おぐっ！」

見えない相手に撃ち込み続ける弾丸は、火花を散らし続け、その火花が散るごとに敵の姿を浮き彫りにしていく。

初めは何もない空間であったが、一発目の銃弾が撃ち込まれると、その空間が歪み、陽炎のように揺らぎ始める。

二発目が撃ち込まれると、その陽炎の中から人の形が浮き上がり、賢の銃口が相手の脇腹辺りに突き付けられていたのが分かるようになる。

三発目、四発目を撃ち込んだとき相手の姿が完全に露になった。薄い水色の体をし、胸部の至る所に細い管状の器官を生やしている。顔は細く縦長で口や耳といったパーツはなく、黄色く光る目が、左右非対称の大きさを備えてある。

また、右腕と左腕も非対称で、右腕は普通の状態だが、左腕は手首から肘にかけて、胸部と同じ管状の器官を生やしていた。

ようやく姿を表した敵——ドーパントに五度目の引き金を引こうとしたとき、賢の左肩をドーパントが掴む。

「これ以上はさせませんよ！」

つい数分前に吹き飛ばされた自分の光景が賢の脳裏に浮かぶ。が、賢は迷うことなくその場に留まり、五発目の銃弾を敵に浴びせる。

「ぐっ！」

「ッ！」

左肩が碎ける音を感じながら、賢は天井まで飛ばされ、背中を強打すると、そのまま地面へと落下。相手のドーパントも賢の銃弾で姿勢を崩すが、両足でしっかりと地を踏み締め、倒れることはなかった。

「ふう……やはりドーパントになっても痛いものは痛いですね……」

脇腹を押さえ、呟くドーパント。賢は拳銃を構えながら立ち上がるが、左腕はだらりと力無く垂らした状態であった。

「人を超えた身体能力と技術。NEVERがドーパントに対抗できる力を持っているという話は本当ですね……」

そう言うところ、ドーパントは足元に視線を向ける。そこにはいくつもの弾丸が落ちていたが、その中で一つの弾丸に注目していた。

弾頭が潰れて、他の弾丸と比べると半分程の長さに変形した弾丸。あのとき壁を突き破るきっかけになったのは恐らくは、この弾丸である。と考えるドーパント。恐らく相手は、防がれるのを前提に数発の弾丸を最初に放ち、空中に留まらせると、二度目の連射でカモフラージュ用に弾をばら蒔き、本命の一発を空中に留まっていた弾丸に直撃させ、一発分押し込ませたと推測した。

しかし、自分で推測した割には、非現実な考えである。

弾の幅は余りに狭く、また押し込むとなると弾丸を弾丸の中心に当てなければならぬ。ましてや相手は走っている状況でこのような芸当をやったことになる。

普通ならば一笑に伏すか、ただの偶然だと思ふような考え、だが何故だろうか、目の前で拳銃を構え立つ敵の姿を見ているとそれが真実であると思えてしまう。

「やれやれ……小細工だけでは、そろそろ限界ですかね」

そう呟くと、ドーパントは両腕を力無く下げ、その場で直立した状態になる。

相手の無防備な状態を不審に感じたのか賢の眉間に僅かに皺が寄る。

その時、ヒュンという棒を振り回したかのような風切り音が響く。音の鳴る場所にあるのはドーパント。指一本動かしていないはずだが、ヒュンヒュンと、音の数が増え始めていた。

このままでは不味いと思い、ドーパントに向かって銃弾は放つ。

しかし、キーンというと、弾丸は弾かれ、通路の壁に当たり、破片を散らす。

今までは、壁にぶつかったかのように空中で静止させるだけであつたが、今度は弾丸を弾く程の防御力を持った見えざる壁が立ち塞がっているのだろうか。

「？」

弾丸を弾かれた賢は、ドーパントを注意深く観察するが、そこであることに気付く。よく見ればドーパントの周囲を高速で動く細かい粒のようなもの、更に目を凝らせば、大中小と大きさのまばらである、その粒は、ドーパントを中心に土星の輪のような状態となっている。しかもそれは一つだけではなくドーパントを囲むように何本もあつた。

輪が動く度に鳴る風切り音。見えない壁とは違い、今度は視界に映るようになっていたが、賢は不用意に近付こうとはしない。

「防御だけではありませんよ」

手を突き出すと、輪の内的一本が、通路を切り裂き――否、削り取りながら賢へと迫る。

床を覆うタイルは、耳障りな摩擦音を鳴らしながら破片を散らし、その破片を輪が取り込み、更に深く床を抉り取っていく。

先程までは目を凝らさなければ見えなかった輪は、今では完全に見えるほど残骸を吸収し、直径二メートル程の大きがあつた。輪が回る度に鳴る風切り音は、砕かれた破片が悲鳴を上げているかのような凶悪なモノへと変貌していた。

縦に回転しながら迫ってくるそれを賢はサイドに移動して回避しようとするが、いざ眼前に來ると、突如縦から横へと向きを変え、通路一杯にまで拡がる。

チツ、と短く舌打ちをすると、賢は通路の隣にある部屋の窓を突き破り中へ逃げ込む。

安堵は一瞬、凄まじい轟音を上げ、賢のいる位置から七、八メートル離れた場所の壁が吹き飛び、噴煙を取り込みながらドーパントが姿を現す。

目を剥く賢のことなど構いもせず、瓦礫を更に取り込み、最早石の鋸と化したソレを身に纏った状態で前屈みの姿勢をとる。

脳から伝わってくる警告に従い、賢は拳銃を構える。

ドーパントは背中に生やした管状の器官を動かし、体から約九十度生えていたものを下斜め約四十五度の角度に変えた。

相手が何をするのかは、自ずと想像が出来る。しかし、問題はその先、想像と現実にとれ程の落差があるのか。

大気が突き破られたかのような轟音。賢は、このとき自らの認識の浅さを悟った。

自ら体を一つの武器に替え、超高速で賢目掛け一直線に飛ぶドーパント。拳銃などこの飛来する脅威に対しては余りにも無力であった。賢は、回避のみに全ての集中力と力を注ぎ込み、全神経を脚部に集中させると今、自分の出せる限りの力を振り絞り、地を蹴った。真っ直ぐに突っ込んでくるドーパントに対し、真横に避けるように動くが、ドーパントの周囲を動く輪の一本が、賢の脇腹を僅かにかすっていく。

触れるか触れていないか分からない程の一瞬の出来事であったはずだが、輪は賢のジャケットを易々と引き裂き、その奥にある肉を抉り取る。

ドーパントは、再び壁に接触すると、そこに初めから何も無かったかのように、軽々と破壊して、撒き上がった粉塵の中へと姿を消す。

賢は、抉られた脇腹に手を当てる。押さえた手の指の隙間からは止めどなく血が流れ、足元を濡らす。

単純な傷ならばすぐに再生を始めるが、ドーパントにつけられた傷

は傷口の状態が悪く、再生する速度を鈍らせていた。

粉塵の奥から鳴る轟音。その音が賢の耳に届いたときには、すでにドーパントは眼前にいた。

地面に身を投げ出し、転がって埃まみれになりながらも、ギリギリで回避することに成功したが、賢は実力で避けたというよりも運が良かったと実感していた。

傷のせいでやや前屈みになっていたので、地面にすぐ身を投げ出したこと、粉塵のせいで相手の飛んできた位置が、賢からややずれていたこと、この二つの要素が賢の首の皮一枚繋がらせていた。

また直撃を避けられたドーパントが壁を突き破っていく。威力は尋常ではないが、方向転換と停止に難がある攻撃手段らしい。

次の攻撃に備え、意識を集中させる賢。痛い程の沈黙が場を包む。一秒経つ、攻撃は来ない。五秒経つ、まだ攻撃は来ない。十秒経つ、音一つ鳴らない。

賢の中で違和感が生まれる。胸の奥で言葉に出来ないモヤモヤとした感覚。

自分は何か重要なことを見逃していないか。

そう思ったとき、賢の首に締め付けるような圧迫感に襲われ、賢の両足が地面から離れる。

この瞬間、賢は自分の不注意に気付く。

集中するべきは物音が鳴ることでは無かった――

「やはり小細工は大技を混じえてこそ真価を発揮する……そう思いませんか？」

空間が歪み、その中からドーパントが片手で賢を持ち上げた姿を現す。

あの技は、賢に透明化能力を意識させないことを目的としたものに過ぎない力モフラージュ。

真の目的は、この透明化。一度破られた能力で、今度は賢を追いつ

む、策とプライドの入り交じった手段であつた。

死人の体であつても窒息の苦しみは変わらないのか、賢の顔色が変わり始めていく。

だが、賢はこのまま黙つて絞殺されていくような人物ではなく、拳銃をドーパントに押しつけようと腕を動かそうとするが――

「駄目ですよ」

その動きはすでに読まれており、賢の首を締めたまま、腕を降り下ろし、後頭部から床に叩きつけた。

「がつ！」

床の碎ける音、賢の苦鳴。叩きつけられた衝撃で、賢は拳銃を離してしまふ。

「次は上です」

今度は逆に腕を振り上げ、そのまま掴んでいた手を離す。ドーパントの頭上にと投げ出された賢の腹部にドーパントは左手を当てる瞬間、ドーパントの左腕の管に周囲の空気が吸い込まれ、腕は倍近い太さになり、そして圧縮された空気が当てられた左手の掌から賢へと撃ち込まれた。

音よりも先に衝撃が伝わる。鉄の杭が音速で自分の体を通過したような感覚。喉の奥に冷たいモノを感じる。それが血だと気づいたとき、背中に衝撃が走り天井に体が沈み込んでいく。

「まだですよ」

静かに告げるドーパント。全身の管が下を向き、吸収された空気

が噴出され、そこから生まれる速さがドーパントの体を再度凶器に変える。

天井にめり込む賢の胸部に肩から突撃した。

賢の体内に鳴り響く骨の碎けていく音。天井にめり込んでいた体は押し込まれ、上へ上へと押し潰されていく。

背中に天井を構築していた資材が破壊されていくのを感じ、賢は四階の突き破って屋上へと持ち上げられていく。

空に吸い込まれていくような場違いな気分を味わいながら、屋上から数メートルの高さまで押し上げられた地点で、ドーパントの突撃は終わり、賢は空中に放り出される。

腹部、胸部に受けたダメージのせいでろくに体を動かすことの出来ない賢は、背中から屋上に落下し、受け身も取れないので体が碎けてしまいそうな衝撃を直に受けてしまった。

「っ……！」

口から血塊を吐き出し、屋上の床を赤く染める。

「これで終わりです」

左手を高々に上げると、周りの空気が尋常ではない勢いで集まります。その勢いは地に倒れている賢が、体が浮き上がるのではないかと錯覚してしまう程であった。

やがて、ドーパントがその手を降り下ろしたとき、賢の全身に味わったことのない圧力が加わったかと思うと、まるで電源を切られたかのように賢の意識は途切れ、視界が黒く染まった。

誰かが自分を呼ぶ声がした。

目を開けて見ると、今自分は見馴れない場所に立って、見馴れない格好をしていた。

足元には、隙間が無い程に咲き誇った花々。空は雲一つ無い青空。自分にはあまり縁がない場所である。

また、誰かが自分を呼んでいる。

その声がある場所に目を向けると、二人の人物がいた。一人は自分と変わらないぐらいの年齢の女性、もう一人はまだ幼い子供。

二人ともしきりに自分に手を振り、呼んでいた。

懐かしく、見覚えのある顔、名前も知っている。声を出して二人の名前を呼ぼうとするが、何故か声は出ない。

どんなに声を出そうとしても、何一つ音が出ない。

それでも二人は、必死に手を振り、こっちに来るように招いていた。

それにつられて一歩一歩、花畑を歩き始める。

少しずつ二人との距離が近付いてくる。距離が近づく度に、二人に対して感じていた懐かしさが強くなっていった。

二人との距離が約五メートル程になったとき、幼い子供が木漏れ日のような笑顔を浮かべながら、こちらに走ってくる。

自然に膝を突き、両手を広げ、子供を抱き止めようとしたとき、膝に何かが当たる。

何かと目を向けたとき、そこにあっただのは鮮やかな花々とは対極の位置にある一丁の無骨な拳銃、まるで何かを訴えるようソコにあった。

足元の拳銃を見続けている姿に子供は戸惑いの表情を浮かべながらも、自分と呼ぶ。

しかし、それを無視し落ちていた拳銃を拾ったとき——改めて実感した。

一体化したかのように馴染んだ銃の感触。この感触で染まった手で抱き締めるには、目の前の子供はあまりに繊細で、抱き上げるには自分には重過ぎる。

もう二度と触れることは出来ない。

拒絶の言葉を言い、立ち上がる。子供の戸惑いの顔は消え、替わりに泣き顔が浮かぶ。

泣きながらも自分に追い縋ろうとするが、女性が子供を後ろから抱き締めて、それを止める。

子供を止める女の顔も泣いていた。

――、――。

先程が嘘だったと思えるほど簡単に喉から滑り落ちるかのように自然と呼べた二人の名前。だが、もう二度と呼ぶことはない。

二人に背を向ける。

振り返り、目に映った光景は、花畑などではなく草一本も生えていない荒野。服装も元に戻り、手にはしっかりと拳銃を握っている。

荒野の先に向かい、歩み始める。

先は見えない、道しるべもない。

しかし、後悔をする気などはなかった。

頬に何かを当たる感触で目が覚める。しかし、周りは闇に覆われ、何一つ見えない。

何かにもたれ掛かっている体を動かそうとするが、両足に力が入らない。今度は、両腕に力を入れると右腕だけが辛うじて動かすことが出来た。

おそらく最後に受けたドーパントの攻撃で、体に障害が発生したと考えられる。両足と片腕だけでなく体内に感じる違和感で肋骨が数本折れ、内臓も損傷を受けていることを把握した。

ミシリ、という石の擦れ合うような音が鳴ると、再び賢の頬に何かが当たる。

暗くて確認することが出来ないが、恐らくは瓦礫の破片であると推測し、自分の今の状態もそこから推測する。

最後のドーパントの攻撃で賢と一緒にビルの一部が破壊され、瓦礫が崩れ落ちたが、偶然にも瓦礫は賢を避けるようにして積み木のように重なり、賢が座れる程度の空間を造った——しかし、あくまで一時的なものであり、その証拠に賢の頭上で再び瓦礫が崩れかけていく軋音がする。

あと数分、もしくは数十秒後には瓦礫は完全に崩れ落ち、賢は逃れることも出来ず圧殺される。

まだだ……まだ終わらせることは出来ない……！

賢がそう強く思ったとき、闇の中を青い光が照らす。

その光に驚き、目を向けた先にあったのは、自らの存在を標す為に光続ける長方形の物体。

それを見たとき、鉄面皮であった賢が、唇の端を少しだけ上げ、笑みを浮かべる。

「偶然——いや、運命か……」

右手の指先を噛み、黒の皮手袋を脱ぎ捨てる。手袋の下から現れた手の中央に刻まれた生体コネクタ。

探し求めていた存在に對し手を伸ばす。だが、頭上の軋む音の感覚は徐々に短くなり破片の量も増え始めている。

しかし、賢は焦ることなく光る物体——次世代ガイアメモリ、T2ガイアメモリをその手に収める。

「ゲームクリア」

賢は、崩れ始めている天井に右手を向け、新たな武器の引き金を引いた。

『TRIGGER』

半分が瓦礫とかし、崩れ落ちている屋上に着地すると、ドーパントはふうと息を吐く。

手摺にもたれながら相手が落ちていった瓦礫をじっと見つめる。

もつと壊してやろうか

そんな言葉が思い浮かび、左手を頭上に掲げ、周囲の空気を集め――ようとしたが、すぐに取り止め、左手の親指の付け根辺りからガイアメモリを取り出し、元の姿に戻る。

変身を解くと額を手で押さえ、軽く頭を振る。

（もう影響が出始めているか……）

ガイアメモリは体内に入れることにより超常的な力を身につけることが出来るが、副作用として体内に毒素を流し込む。

毒素による影響には個人差があるが、最もポピュラーなのが破壊衝動である。

とにかく力を使い、人や物を壊したくなり、大暴れする。ついさつき行動で自分にも兆候が見え始めているのを実感する。

これ以上の使用は人格に多大な悪影響を与えると判断し解除したが、まあ問題はないであろう、そう思いながら、瓦礫の山を見る。

「ん？」

何やら瓦礫の山が細かく震え始める。崩れるのかと思ったが、瓦礫の隙間から青い光が洩れ始める。

何が起こっているのかは分からない。だが、危険を知らせる自らの本能に従い、ガイアメモリを起動させる。

『AIR』

左手の親指の付け根に施された生体コネクタに突き差すと、人間の姿からエアードーパントへとその身を変えた。

直後に瓦礫を吹き飛ばして、空に向かって伸びる一本の青い光の柱。

砕かれた瓦礫が細かい礫となり、舞う埃は辺りを砂色に染めていく。

「まったく……」

疲れた様子で呟くエアードーパント。

「本当に楽に勝たせて貰えない相手ですね、あなたは」

砂煙の中に浮かび上がる人の姿。

「ゲームスタート」

戦いを告げるゴングは再び鳴らされた。

丁の銃口／芦原賢の章その2（後書き）

賢の奥さんと子供は既に他界しているという話を耳にしましたが、
実際の設定なんだろうかね？

Tの銃口／芦原賢の章その3（前書き）

これにて芦原編は終了。

そう言えば最初に設定上あるドーパントを使うと書きましたが
今回出てきたドーパントは完全オリジナルになってしまいました……
理由は簡単に見間違い。イアーと書いていたのをエアーと……

Tの銃口／芦原賢の章その3

辺りを覆い尽くす砂埃、空気中を漂うそれはエアードーパントの視界に写る色をを砂色に染め上げ、倒すべき存在をぼやかしていた。倒すべき存在——それはエアードーパントの数メートル先に佇み、砂埃が巻き上げられている中でもうつすらと影のように立っていた。エアードーパントが左手を払う動作をすると、それに合わせて砂埃を根こそぎ持っていくような風が発生し、辺りの砂埃を一掃する。視界に制限を与えていたものは消え、両者はようやく相手をきちんと視界に収めることが出来た。

「その姿……条件は五分と五分になったわけですか……」

現れた賢の姿を見て、エアードーパントは警戒心を込めた口調で言った。

賢の姿は、先程までの人の姿ではない。

全身をメタリックブルーの装甲で包み、顔の中心には照準機を彷彿とさせる十字サイトが描かれた単眼を持ち、ガイアメモリを挿入した右手は、ライフルのような長い銃身をもった銃器にと変化し、右肩も左肩と比べ厚みの増した形状になっていた。

賢は、絶体絶命の状況で手にした新たな武器、狙撃者の記憶と様々な重火器の記憶を宿したガイアメモリ、トリガーメモリによつて産声を上げた存在——トリガードーパントへと変貌を遂げていた。

一丁の銃へと変化した右手を構え、エアードーパントへ向けて発砲する。

トリガードーパントの右手から放たれた直径十センチほどの光弾は音よりも早く飛び、

エアードーパントに着弾しようとするが、それよりも早くエアードーパントは光弾に両手を突き出した。エアードーパントの両手に

よって作られる大気の壁。姿を消すときの空気の膜や周囲の物を取り込む空気の輪とは違い、防御のみに重点を置いたエアードーパントにとって最強の防御である。だが――

「く！ くううう！」

歯を食い縛るようなエアードーパントの声。荒れ狂う大気の壁によって光弾は防がれているが、一向に威力は弱まらず、防いでいるエアードーパントの体力を削り取っていく。

時間を掛ければ、第二、第三の攻撃が来ると考えたエアードーパントは完全に防ぐのを止め、身体に生やした管たちを左に向けると、そこから空気を噴出し、光弾の射線上から離れる。

射線上から離れたと同時に両手で作り出した大気の壁を解除する。止められていた光弾は、勢いを取り戻し、何もない空間を飛んでいった。

しかし、トリガードーパントは、エアードーパントに息つく暇を与えずに、再び銃口を向ける。エアードーパントもまた両手を突き出し、いつでも防げるように構えた。

エアードーパントが構えたのを見ると、トリガードーパントの銃口が下がり、エアードーパントの足元に向けられ、銃口から光弾が発射。

突然、相手が狙う場所を変更したことに対処出来なかったエアードーパント、その場から離れようと判断したときにはすでに手遅れであり、エアードーパントの真下で爆風と爆音、そして床の破片を巻き上げられた。

一瞬の浮遊感の後にエアードーパントは、足を引っ張られるような感覚とともに落下する。

砕けた破片と舞う粉塵。エアードーパントは、落ちていく刹那の時間考える――今の自分のすべき行動を。

一旦姿勢を戻し、落下を防ぐために、管から排出される空気を使

おうかと考えた。が、その考えはすぐに却下する。

空中で体勢を整えるとき、必ず静止した状態になってしまう。この隙を見逃す相手だとは考えづらい。

故にエアードーパントがとるべき手段は一つ。

エアードーパントは胴体に生やした管を一齐に上向きにする。そして、管から大量の空気を一気に噴射した。

落下を防ぐのではなく、逆に勢いをつけて落ちる。

向こうに自分の行動を操られないように、強引にでも自分のペースでいくための手段であった。

トリガードーパントの開けた穴に凄まじい勢いで落ちていったエアードーパント。右手の銃を構えていたトリガードーパントであったが、思惑が外れたと分かると構えをとき、エアードーパントの後を追って下に飛び降りた。

トリガードーパントが着地するタイミングを見計らって、エアードーパントの左拳が文字通り唸りを上げて襲いかかる。

狙いはトリガードーパントの側頭部、やや大振りで振られた拳をトリガードーパントは、一步後ろに下がり易々と回避した。だが――ドオンと表現するような衝撃が、トリガードーパントの頬に走る。体勢が僅かに傾くが、すぐに持ち直し、自分に向かって突き出されるエアードーパントの拳を再び回避するが、一撃目と同じ衝撃が一瞬の間を置き、トリガードーパントの鳩尾を貫く。

二、三步後退したが、トリガードーパントにダメージを受けた様子はなく、平然とした態度でエアードーパントを見つめる。

「……頑丈ですね」

エアードーパントの言葉の裏に若干の焦りが見える。攻撃を当てているのはエアードーパントであるが、余裕を感じるトリガードーパントの姿に、知らず知らずのうちにプレッシャーを感じているのかもしれない。

「フッ！」

上半身を振るって勢いをつけたエアードーパントの右拳が、今度はトリガードーパントの脇腹目掛け放たれる。

だが、その攻撃も前に踏み出したトリガードーパントによって防がれる。

前進されたことにより、エアードーパントの拳ではなく二の腕部分がトリガードーパントの脇腹に辺り威力を殺される。

その直後、トリガードーパントの頭の後ろを何かが凄まじい勢いで通り過ぎていった。

トリガードーパントは、すでに相手の攻撃方法について理解をしていた。相手は、振るった拳の動きにワンテンポ遅らせて空気の塊を叩きつけたのだと。

拳の動きに意識を捉えさせ、反射的に回避した場所に叩きこむ、ドーパントのような反射神経に優れた存在ならば十中八九引っ掛かるであろう。

そのため、トリガードーパントはエアードーパントとの距離を無くす。十分な距離がなければ、使用できない技であるからだ。

至近距離に來られたことを不利と思ったのか、トリガードーパントと距離を取ろうとしたとき、トリガードーパントの左手がエアードーパントの後首を掴み、引き寄せると同時に膝蹴りがエアードーパントの腹部に炸裂。

かは、というエアードーパントの苦鳴と合わせて、肺の中の空気を無理矢理吐き出させられる。

膝蹴りは一発では終わらず、二発、三発と的確に急所に突き刺さり、その度にエアードーパントの体がくの字に曲がっていった。

「う……ぐああああ！」

しかし、エアードーパントも黙っているわけではない。膝の猛攻の中で、可能な限りの空気を集めると、トリガードパントの胸に左手を押し当て、噴出した。が、空気を集めには意識を集中させる必要があり、膝蹴りの中では十分な集中が出来ず、トリガードパントを倒すような威力はなく、後退するだけで精一杯であると確信していた。

しかし、距離を離せるこに変わりはなく、エアードーパントの体の管を駆動させ、直ぐにでも距離を取る準備をする。

トリガードパントの体が、空気の圧力により離されていく。

今だ、と体内の空気を噴射しようとした刹那、エアードーパントの脳を揺らす衝撃。

コメカミから脳に突き抜けていくような痛みが、エアードーパントの思考を一時的に停止させる。

殴られた、そう感じたとき体が自分の意思に反して、膝から崩れ落ちていく。周りの光景がコマ送りのように緩慢に変化していく錯覚が見えていくなか、エアードーパントの瞳に敵の姿が映る。

振り下ろされていく右手の銃身を見て、自分がアレに殴られたのだと理解した。エアードーパントが、瞬きをする度に刻々と状況は変化していく。

飛ばされていくトリガードパントが両足を地面に着け、それでもまだ後ろに引かれていくのを両方の足で踏ん張り、無理矢理停止させる。

動きが止まると、崩れ落ちていくエアードーパントに向かって跳びかかった。

エアードーパントの体が地面に着くよりも早く、エアードーパントの胸板に足を乗せると地面に叩き伏せて動きを固定する。

「うはっ！」

背中から突き抜けていく衝撃に思わずむせるエアードーパントで

あつたが、トリガードパンツが向けた銃に今度は逆に息を呑む。

咄嗟に両腕を顔面の前で交差し、重要な部分を守るように見えな
い空気の膜を張る。エアードーパントの必死の防御の後のコンマ一
秒にも満たない間の後にトリガードパンツの銃が火を吹いた。

最初のときに放たれたような光弾ではなく、ビー玉程の大きさの
光弾が銃口から放たれる。

光弾は、エアードーパントの空気の膜で一瞬止まるが、直ぐに突き
抜けてエアードーパントの体に着弾し、火花を散らす。

「ぐっ！」

伝わってくるダメージは、そんなに大きなものではないが、無視
出来るようなものでもない。不完全な状態で形成した空気の膜が光
弾の威力を削った結果であつた。

だが、余裕があつたのは最初の一発だけであつた。最初の一発が
放たれた後、再びトリガードパンツの銃口から光が洩れ出したか
と思えば、次の瞬間、数え切れない程の衝撃がエアードーパントの
全身に浴びせられた。

「……！」

声を上げようにも、間を置かずに降り注がれるトリガードパン
トの無数の光弾が、エアードーパントの苦鳴を呑み込むように全身
を穿ち続ける。

一発の威力は大したものではない。しかし、その尋常ならざる数
が、その威力を際限なく高めていった。

一秒間に数十もの数の光弾。ライフルの形をしたトリガードパ
ントの右手は、形を変えないで、その中身を変え、機関銃のように
手も足もでない蹂躪を行い続けた。

周囲の空気を集めようにも絶え間無く撃ち続けられる弾丸の雨が

集中の妨げになり、また展開している空気の膜を維持するのになりの力を消費している。仮に防御を捨て、攻撃に持てる力を全て注げば反撃することが出来るかもしれない。しかし、そうすればこの弾丸の雨に身を晒すことになる。無事で済む確率は無きに等しい。仮に防御に徹していてもいずれは、力尽き無防備な状態を相手に晒すことになる。今のエアードーパントにこの状況を打破する力はない。

そうあくまで今のエアードーパントには――

（もう……これしか方法はないか……）

エアードーパントの脳裏に浮かぶ最後の手段。

彼はミュージアムのバイヤーとしてガイアメモリと深く結びつくとうなるか、それはガイアメモリを扱ってきた彼自身よく理解していた。

ガイアメモリを手に入れた人間の末路を何度も見てきた彼は、自分がガイアメモリと融合した際に深く結びつくことを恐れ、意識してガイアメモリの力を完全に引き出そうとはしなかった。それゆえに破壊衝動が思考を侵食しようとも、辛うじてそれを止めることが出来ていた。

だが、もしガイアメモリに己の全てを委ねることになったら、彼自身が真の意味でドーパントになったならば一体どうなるのか。その答えをいまこの瞬間に出す。

「あああああああ！」

今まで握ってきた理性という名の手綱を手放すと、意識せずに胸の奥底から獣のような咆哮が吐き出される。

全身に走る解放感。それは撃ち続けられる弾丸の痛みをかき消し、エアードーパントの中に泉のように力を湧き出させる。

防御のために交差していた両腕を開き、それと同時に空気の間も消し去る。

壁がなくなったせいで、威力を取り戻したトリガーパントの光弾がエアードーパントに着弾し続け、火花を散らす。今のエアードーパントに痛みを感じているどころか怯む様子もなく真正面から受けていた。

「あああああああ！」

二度目の咆哮。

トリガーパントは、その咆哮を聞いたとき銃撃は止め、何か危機を感じたのか後方へと飛び去る。

メキリ、という音がエアードーパントの方から聞こえる。

地面に仰向けに倒れているエアードーパントの背を中心に床に蜘蛛の巣の亀裂が走り始める。さらに亀裂は床だけに止まらず、離れた天井にも現れ始めた。

「うあああああああ！」

三度目の咆哮が響くとき、見えない圧力が全てを押し潰した。

エアードーパントを中心に通路全ての床が砕け、壁が粉碎されるときともに天井の亀裂が一気に走る。

エアードーパントから離れたトリガーパントも無事では済まず、トリガーパントの体を何かが包み込むような感触を感じたと思うと、見えない何かが弾け、トリガーパントを通路奥の壁まで吹き飛ばし、背中を強く打ち付けさせた。

背中から伝わって来る衝撃が、トリガーパントの肉体に痛みを与えるが、それを無視して壁から離れたとき――

「ああああ！」

叫びのあとに突如目の前に現れたエアードーパントの両手がトリガードーパントの首を締め上げる。

「ぐっ！」

声を出そうもエアードーパントの指はしっかりと食い込み、トリガードーパントの声と呼吸を絶つ。

「らあああああ！」

人の声というよりも最早ケモノの声と化した叫びを上げると、トリガードーパントを掴んだまま飛び上がった。

天井に両者とも頭から突っ込んでいくが、まるで障害にならないと言わんばかりに突き破って上昇していく。

天井を抜けた先にあるのは屋上の空。だがエアードーパントは止まらず更に上昇。首を締められているトリガードーパントも大人しくしているはずもない。密着に近い状態なので右手の銃が近すぎて使用することが出来ないが変わりにエアードーパントの顔面に肘で殴りつけたり、エアードーパントの胴体に膝で蹴り上げてみたりと抵抗をする。だが相手に堪えている様子はなかった。

やがて屋上から数十メートルぐらいの高さまで昇るとそこで反転、屋上目掛けて頭から落下し始める。更に管からも空気を噴出させ落下スピードを加速させていく。

「フッ！」

トリガードーパントの数発目の膝が、エアードーパントの腹部にめり込んだときに、ようやくエアードーパントの体勢が崩れ、腰を引いたような状態になる。

その僅かに開いたトリガードパントとエアードーパントとの距離にすかさず右手を捻り込むとエアードーパントの胸部に銃口を当てがい、高速で落下していくなか零距离で発射した。

両者の間で生まれる爆発が、エアードーパントの両手を引き離し、互いに二手に別れるように屋上に衝突する。

トリガードパントは、頭部を庇うために交差した両腕から屋上に叩きつけられ、破片と粉煙を巻き上げる。エアードーパントの加速落下からは逃れられたが、完全に速度を殺すことは出来ず両手が砕けたかと錯覚するような感覚と痛みがトリガードパントを襲ったが戦闘不能になるほどの重症ではない。

立ち上がるトリガードパントの眼前に、エアードーパントの大幅りの拳が迫る。全身を使って振るわれた拳であるが隙が大きく、トリガードパントは視界に入ると直ぐに身を低くしてそれを回避する。

攻撃を避けられたエアードーパントは、自らの拳に振り回されて姿勢を崩し前のめりになるが、両足で倒れそうになるのを止め、再び拳を大振りする。ほんの数分前とは別人のように大雑把で荒々しく無駄の多い動きをするエアードーパント。拳動の一つ一つに異様に力が込められ、そのせいでトリガードパントには易々と避けられてばかりであるが、その動きは衰えることを知らず、常に全力で動き続けていた。

斜めから振り降ろされた攻撃を避けられたのならば、今度はしたから突き上げる攻撃、それも避けられたのならば上半身ごと振るうかなような拳を放つ。

だが幾度となく振るうも動作の大きい攻撃のせいでトリガードパントには容易く見切られ全て空を切る結果となっていた。

やがて外れた拳が地面にと叩き込まれる。すると地面が音を立てて捻れ砕け、エアードーパントの拳を中心に螺旋状の破壊の痕を残した。

前に使った時間差攻撃の応用で、放つ筈の空の塊を拳に直接纏わ

せ、威力を上乗せする。単純な方法ではあるが、抉れた地面を見れば防御することの危険を理解し、回避することに専念しなければならないこともまた理解した。

エアードーパントが大きく拳を振り上げる。その隙の大きな動作によってエアードーパントの胴体はがら空きの状態となった。

その無防備な場所に向けて、トリガードーパントは槍のように自らの右手を突き出す。振り上げた拳よりも早く直線に進むトリガードーパントの右手の銃口がエアードーパントの胸部にと突き刺すように押し当てられた。

そして、そのまま銃口から光弾が放たれる。

零距离で放たれた光弾はエアードーパントを貫く——と思われたが、光弾はエアードーパントの胸の前で激しく回転をした状態で止まっていた。

「……」

トリガードーパントはその光景を静かに見つめる。

集中をして見れば、トリガードーパントの光弾とエアードーパントの間には僅かな隙間が有り、その隙間には最初に防いだときは比べものにならない程の膨大な量の空気を圧縮した壁を作っていたのであろう。

トリガードーパントの脳裏にある考えが浮かぶ。その考えに意識を傾けた刹那の時間、エアードーパントは光弾を受けたままの状態にあるにもかかわらず、トリガードーパントの胴体に振り抜くように右脚を打ち込む。

真横から来る衝撃にトリガードーパントは直ぐに意識をそちらに向けた。

メモリの影響で変化した皮膚が、エアードーパントの右脚に触れた瞬間に擦れ、外皮と一緒に中身ごと奪い取ろうと激しく暴れる。

押し当てられたエアードーパントの脚が、トリガードーパントの体の一部を削り取っていく状況の中、トリガードーパントは冷静に焦ることなく次の行動に移る。

大気の壁に阻まれている光弾に向かって、二発目を発射した。放たれた二発目が、空中に止まっている光弾に接触したと思えば、火薬に火を点けるかのように爆発を起こす。

強烈な熱と爆炎が両者を覆い尽くし、爆発の余波で屋上を囲んでいたフェンスは変形し、一部は吹き飛んでいった。

爆炎が消え去り、その中心部に立つ二つの人影。

一人はトリガードーパント、メタリックブルーの外装は所々焼け焦げ、黒く変色している箇所があるが、しっかりと地を踏みしめて立つ姿を見れば、軽傷であることが分かる。

そして、もう一人。エアードーパントの状態は――

「があっ！ ぐっ！ あああ！」

トリガードーパントとは対称的に地面に蹲り、胸を押さえながら苦悶の声を上げていた。

よく見れば、エアードーパントの胴体に生えている管が全て焼け、管の先からは白煙を上げていた。

あの爆発の起きる直前、トリガードーパントの右手から光弾が発射されたのを見たエアードーパントは、二発目の光弾を防ぐには大気の壁の防御力が足りないかと即座に判断し、胴体の管の吸引力を最大限にして周囲から一気に空気を取り込んだ。

しかし、光弾はエアードーパントではなく先に防がれていた光弾に命中。光弾同士が衝突し、中に込められていたガイアメモリの力が溢れ出し、爆発へと生じた。

この爆発によって生まれた熱は周囲一帯の空気を瞬時に加熱された。

時間にすれば一秒未満の出来事。故にエアードーパントは直ぐに

切り替えることが出来ず、高熱を帯びた空気を大量に体内に取り込むこととなってしまった。

その結果、臓腑を直接火で炙られるかのような地獄の苦しみを体感することとなった。

「ぐっ……うっう……！」

苦しみと痛みに満ちた声を搾り出しながら立ち上がろうとするが、重傷を負った体は自由には動かず、小さく震えるだけであった。

羽をもがれた羽虫のように足掻くエアードーパントにトリガードーパントは躊躇うことなく右手を動かし、ともに動くことの出来ないエアードーパントの眉間に銃口を突きつけた。

エアードーパントは、荒い息を吐きながら突き付けられた銃口の奥にいるトリガードーパントを睨み、左手を必死に動かす。

その思いに応えるかのように、震えながらも左手は上がり始める――がそれも長くは続かず、数センチ上がった所で限界を迎え、力無く地面に降ろされた。

動かない左手を見て、はあ、とエアードーパントは深く短い、一回だけの溜め息を吐いた。

それだけで、エアードーパントの中から何かが抜け落ちたかのように荒々しかった雰囲気が無くなり、最初のときのような状態へ戻っていた。

エアードーパントは銃口を見つめ、一言。

「どうぞ」

静寂は一瞬。

その後には聞こえたのは三つの音。

静寂を破る一発の銃声。

その銃声にしし遅れて響いた、重く鈍い物音。

そして最後に聞こえたのは――

「……ゲームオーバー」

芦原賢の囁くかのような静かな声だった。

丁の銃口／芦原賢の章その3（後書き）

次回は堂本さんと愉快的仲間たちの戦いです。

賢編ドーナツ設定（前書き）

賢編に出てくるドーナツの設定です。

賢編ドーパント設定

エアー・ドーパント

身長：200cm

体重：80kg

特色/力：周囲の空気を取り込み、それを自由自在に操る能力を持つ。攻撃、防御など幅広く応用出来る

「空気」の記憶を宿したドーパント。

左手と胴体には複数の管を生やしており、そこから大量の空気を取り込んで自らの武器にする。

空気を圧縮して左手から弾丸のように飛ばすことができ、鉄板すら陥没させる威力がある。

また、体中から生やした管から逆に空気を吐き出して周囲に空気の膜を張ることもでき、拳銃ぐらいの威力ならば防ぐことも可能な程の強固さを持つ。

この空気の膜を応用して光を屈折させ自らの姿を透明にしたり、音を消して無音状態で行動することもでき、反対に全く別の場所から相手に音を届け、近くにいると錯覚させるなどの攪乱も可能。

さらに管から空気を噴射することによって短時間ではあるが飛行することが出来るが、この間は透明化は使用不可能になる。

弱点としては常時大量の空気を必要とする。またあくまでも空気を操る能力なので、空気の中の成分を分けることが出来ず、空気の中から酸素だけ取り出したり、二酸化炭素だけ取り出したりするということとは出来ない。

変身するのは眼鏡の男。生体コネクタの場所は左手の親指の付け根の部分。非常に冷静な性格で、どのようなことがあっても眉一つ動かさないような鉄面皮の男。ただし、感情を表に出さないだけ

であり、内心は非常に負けず嫌いな性格をしている。

廃ビルの中で芦原賢を探していたマスカレードドーパントが全滅後に参上。

最初に透明な姿で賢に奇襲をかけて何度も攻撃を加えるが、致命的なダメージを与えられず、透明化を撃ち破られるが、破れた後に別の方法で賢を追い詰め、二度目の透明化によって賢に多大なダメージを与えた。

しかし、直後にトリガードーパントとへと姿を変えた賢と戦い苦戦。一か八かの賭けで意識的に抑えていたガイアメモリの力を解放し半ば暴走状態になるが、そのぶん力が増し、トリガードーパントと互角の戦いをする。

だが、トリガードーパントの策により体の内部に再起不能寸前に成る程のダメージを与えられる。

最期まで戦おうとするが、もう動かない左手を見て、自分の敗北を完全に受け入れ、暴走状態から元の状態へと戻り、落ち着いた様子で相手に「どうぞ」とトドメの合図を出し、その生涯に幕を下ろした。

Mの剛力／堂本剛三の章（前書き）

五人目のNEVERの戦いですが、他のメンバーも出ます。

Mの剛力／堂本剛三の章

途切れなく流れ続けていく川の中で絶え間なく水泡が生まれ、弾けては消え、弾けては消えていく。ゆらゆらと揺れている川のすぐ側にはコンクリートで固められた足場があつた。

そこには三人の男性が立っており、皆が揃って同じ黒のスーツを身に纏っていた。

一人は三十代ぐらいの男性、毛髪一本もないほどに丁寧に剃り上げられたスキンヘッドが目立ち、空を見上げながら煙草を吹かしていた。

もう一人は煙草を吸っている男性と同じぐらいの年齢で、ただジツと海面をつまらなさそうに見ていた。そして、最後の一人は一番若く二十代半ばといったぐらいの年齢で双眼鏡を構えて、ある一点を見続けていた。三人ともが全く別々の行動をとっており、双眼鏡を覗いている男性を除き、他の男性には覇気が感じられず気だるそうな雰囲気滲ませていた。

「あー、まだ来ないかー」

海面を見ていた男が退屈そうな口調で、顎に生えた無精髭を撫でながら双眼鏡を覗いている男性に聞く。

「あー、まだです」

若い男は双眼鏡を覗いたまま、素っ気なく答える。

無精髭の男は、ハアと溜め息を吐いて腕時計を見ると再び溜め息を吐いた。

「おせえなおい……本当に来るのか……なあ、来るのか？」

「知りませんよ……情報持ってきたのは貴方でしょうが……」

無精髭の男の問いに若い男は呆れたような口調で返した。

「偵察専門の奴らから聞いた確かな情報なんだが……こつも遅いと心配にならねえか？」

「そりや分かりますが、だったら最初に言っただけにうちの連中を使って逐一連絡する方法をとっていいたら……」

「あー、ダメダメ」

若い男の言葉を手を振りながら即座に却下する。

「マスカレードの連中なんてすぐ死んで消え失せていくのがオチだよ。所詮数合わせみたいなのが仕事みたいな奴らだし」

無精髭の男は、今ここにいない人物たちに向けた、容赦の無い辛辣な言葉。

「今回の被害を知ってるか？ 製品のガイアメモリの使用を許可されている奴らが六人、マスカレードの連中はその数倍だぞ？ 墓石と墓穴がいくつあっても足らねえよ」

「だが、死んだ後には塵一つ残らず消えるのが一番の長所だ」

処理が楽で済む、と今まで会話に入ってこなかったスキンヘッドの男がボソリと呟くように言う。

「まあ、確かに」

スキンヘッドの男の言葉に同意して、無精髭の男は愉快そうに笑った。

「……あいつらが聞いたら泣くな……」

溜め息を吐きながら、双眼鏡を覗き続ける若い男。

「……あ」

若い男が小さく声を洩らすと、少し間を置いた後に鼓膜を震わすような爆発音が、三人の耳に届く。音自体は大きなものではなく、遠く離れた場所で爆発したのが分かる程の音量だが、双眼鏡を覗いている男以外の視線を向けさせるには十分であった。

「どうなってる？」

先程まで浮かべていた笑みはなりを潜め、変わりに眼光鋭い仕事をする男の表情が浮かぶ。スキンヘッドの男も吸っていたタバコを捨て足で揉み消して、双眼鏡を覗いている男に注目する。

「情報通りに来ましたよ。数は二人。一人はドーパント——あいつらの一人が変わったものだと思います——そしてもう一人は、やはり情報通り仮面ライダーです」

「はっ！ この街の噂のヒーローさんの登場か、こりゃ仕事が無くなるかもな」

若い男の言葉を聞き、楽しげな口調で冗談ぽく言うが、言った本人の目は一切笑っていない。

「あつ！ 一人増えましたよ。バンダナを巻いた男です。」

若い男は、自分の見ている光景を逐一、報告する。

双眼鏡の向こうでは、黒のジャケットを身に纏い、頭にバンダナを巻いた筋肉質な男が、自分の背丈程ある棍を振り回して、左右二色のヒーローに襲い掛かっていた。

「なんか生身で仮面ライダーと戦っているんですけど……人間ですかね？」

「知らねえ。一応生体改造に近い処理を受けている連中らしいが……」

双眼鏡の向こう側の光景に、何とも言えない表情を浮かべる。

「あ……投げられた」

「死んだか？」

無精髭の男の言葉に首を左右に振って否定する。

「生きてますが……何か変な方向向いていた腕を無理矢理治してました」

「さっすが！ 不死身の傭兵部隊と呼ばれることはあるな、タフだ」

「そういう問題じゃ……あ」

若い男の間の抜けた声に、無精髭の男は片眉を上げる。

「どうした？」

「え〜と……その……あの……」

しどろもどろになっている若い男。双眼鏡を覗いたまま言葉を必死に選んでいた。

バンダナの男が地面から何かを拾ったかと思えば、いきなりジャケツトを脱ぎ、上半身を晒したかと思えば、その全身に鈍色の光が覆い尽くすと、鉄片のような物体が周囲に現れ、男にと張り付いていく。

全て張り付き終わると、そこには鋼鉄の彷彿とさせる外見の鈍色の異形が立っていた。楕円状の顔は左右非対称になっており、右半分のみにある目が紅く輝いていた。

バンダナの男がドーパントへと変貌したことに驚きを隠せない若い男であったが、更に別の場所から突然、もう一体のドーパントが現れた。

「あの……バンダナの男がドーパントになりました……あともう一人金色の火星人みたいなドーパントも現れました……」

「ああ、そりゃまた」

「大盤振る舞いだな」

無精髭の言葉の後を継ぐようにスキンヘッドの男が言葉をかぶせる。

「いやいや、そんな落ち着いている場合じゃないでしょ」

若干焦ったように言う若い男。実際彼が聞いた情報には、この二名のことは含まれていなかった。

「いやー、組織といつてもうちの情報網も結構ザルだな」

「これといって情報戦を行う相手がいないからな。その辺の人材はまだまだ何だろう」

「まあ、あいつらをうちの庭の中に入れちまった時点でアウトか。とりあえずこの情報くれた奴には後で灸をすえないとなあ？」

「ある程度は加減しろ。死んだら二度手間だ。あと多目に見てやれ、こちらの情報網の狭さも問題だ」

焦っている若い男とは逆に、二人の男は余裕のある態度で淡々と会話をしている。

「あの……いいんですか？ 当初の予定じゃ、戦って弱ったところを一对三で倒すはずだったはずですけど……このままだと三対三の戦いになりますよ」

「仮面ライダーの様子は？」

「三対一で押されています」

そうか、と呟くと無精髭の男はおもむろに立ち上がり、双眼鏡を覗いている男の隣へと並ぶ。

「やることは変更なし。このまま、まとめてあいつらを殺るぞ」

「勝算は？」

「ないな、まあある程度は何とかなるだろ」

無精髭の男の言葉に若い男はガツクリと肩を落とす。

「貴方のそういうポジティブな所は尊敬しますよ……絶対に見習いたくはありませんが」

「だが、指をくわえて見ている訳にもいかない」
いつの間にかスキンヘッドの男も隣へと並んでいる。

「ミュージアムに対して奴らは少人数で挑んできた。普通ならば自殺行為だ。だが、この街での奴らの行動には妙な自信のようなものを感じる」

「自信……ですか？」

神妙な若い男の声にスキンヘッドの男は頷く。

「奴らは俺達 ミュージアム に対抗出来る手段があるかも……
あくまで勘だな」

「勘ですか……」

双眼鏡を覗いたままの状態で、スキンヘッドの男の言葉を噛み締めるようにして呟く若い男。

スキンヘッドの男に何かを言おうと口を開きかけたとき、双眼鏡

の向こうで、飛び上がった仮面ライダーが、金色のドーパントの長く伸びた腕に叩き落とされた所を赤い女性型のドーパントの放った炎によって吹き飛ばされ宙にと舞っていく。

「仮面ライダーがピンチみたいですね。どのタイミングで行き――」

「今から。お前アイツらを惹き付けておけよ」

「――は？」

このとき初めて双眼鏡を覗くのを止め、どういふことかと無精髭の男に尋ねようとしたが、時既に遅し。

二人の男はガイアメモリを取り出すと、それを起動させると同時に走り出し、無精髭の男は、右コメカミに設けられた生体コネクタに差し込み、スキンヘッドの男は喉元にある生体コネクタに差し込むと、そのまま水の中に飛び込み姿を消した。残ったのは双眼鏡を片手に、男二人が盛大に上げた水しぶきのせいでズブ濡れになった若い男の呆然とした姿のみ。

若い男は数秒ほど魂の抜けたような状態になっていたが、意識を取り戻すと長く重い溜め息を一つ吐き、スーツの内ポケットから紅色のガイアメモリを取り出した。

「……とりあえず行くか」

はあ、ともう一度溜め息を吐くとガイアメモリを起動スイッチを押し、右手の中央に刻まれた生体コネクタに差し込みながら、水面へと飛び出していった。

「あゝ、いつちゃった……」

金色の軟体生物のような姿をしたドーパント——ルナドーパントの変身者である泉京水は、大空を飛んでいく自然現象ではまずありえない小規模かつ局地的に発生した翡翠色の竜巻を見ながら残念そうに呟く。

「まったく、どうなってるんだよ」

鈍色の体を持ったドーパントが、不満を漏らすと光が体を包み、それが消えると人間の姿へと戻っていた。

「せっかくメモリを手に入れたっていうのによお、これじゃあ収まりがつかねえぜ」

手に持ったモノ——T2ガイアメモリを握りしめ、不完全燃焼だったと言わんばかりの表情を浮かべる。

「まあ、いいんじゃない。うちの目的のモノも手に入れられたし、倒すよりもそっちが重要でしょ、剛三？」

真紅の炎のような印象を与える赤のドーパント——ヒートドーパントも男と同様に変身を解き、長髪の若い女性——羽原レイカの姿へと戻った。

剛三と呼ばれたバンダナの筋骨隆々とした男——堂本剛三は、レイカの言葉に「分かっているんだがな……」と返すが、やはり表情から不満の色は消えない。

「もう！ 仕方ない子ね剛三は！ ならその不満アタシが解消して

あ・げ・る！」

いつの間にか変身を解除したルナドーパントが本来の人間の姿になつて後ろから剛三の両肩に手を置いた。

「だあー！ 離せ京水！ お前が言つと何か変な感じになるだろうが！」

勢いよく両肩を上げると肩に手を置いた男——泉京水は、剛三にやや劣るも立派な体格を女性的にクネらせながら、いやん、と言いながら手を離す。

「変な感じつて、どんな感じ！ どんな感じ！ さあ、言つて見なさい！ アタシをどう感じたのか言葉で言つて見てちょうだい！」

興奮したかのように言葉を捲し立てる京水に、剛三は呆れと疲れを混ぜたような表情を浮かべ、レイカは溜め息を吐く。

「何言つてんだか……克己を待たせているんだからとつと行くよ、オッサン」

レイカの言葉が京水の耳に入った瞬間、京水的首だけが、凄まじい早さでレイカに向けられる。

「ム、ム、ムキイイ！ 言つたわね！ 純情なる乙女に対してタブーを言つたわね！」

レイカの発言が心底気に触つたのか、顔を真っ赤に染めて抗議する——がレイカは馴れているのか、そんな京水の怒りもどこ吹く風といった様子で軽く流す。

「はいはい、悪かったねオッサンたち。じゃあ克己のところに早く行くよ」

「また言ったわね！ また言ったわね！ 純情で華麗でどこに出しても恥ずかしくない乙女に向かって――」

「俺も入れるな！ あと京水！ いい加減黙ってる！」

互いに文句を言いながら、一先ずこの場を後にしようとする一行。そのとき、三人の背後でパシヤリと水気を含んだような音が鳴る。音が鳴った瞬間、騒いでいた三人は電光石火の早さで背後に振り返り、各々が持つ武器を構える。

レイカは、右足を半歩踏み出し、踵を浮かした状態でいかなる敵にも対応出来るように構え、京水は何処から出したのか、黒の革で造られた鞭をその手に握りしめ、剛三は手に持っていた棍を突き出すように構えていた。

「ああ、気持ちわる……」

三人の前にいたのはずぶ濡れのスーツから水を滴らせ、気だるげな表情を浮かべた二十代ぐらいの男性。

「あら、意外と好みの顔かも、嫌い？ 嫌いじゃない？ むしろ嫌いじゃないわ！」

「どうもみなさん」

騒ぐ京水を見無視して若い男は、三人に対して普通に挨拶をする。

「誰だ、てめえ」

棍を構えたまま警戒を解くことなく睨み付けながら問う剛三。

「まあ、何となくは察しがついていると思いますが、ミュージアムの者です」

事も無げにさらりと返答する男。

「しつこいね、あんた達は何人消えればあきらめるんだろうね」

「まあ、敵を排除するまでは続くと思いますよ」

相手の敵意ある言葉に淡々と答えるが、男の言葉にも隠しきれない敵意の色が滲み出ていた

「名前は！ お名前は！ 可愛い顔が濡れているのが、とてもそるわ！」

「すみませんプライベートなことは勘弁して下さい。本当勘弁して下さい。」

京水の個性には流石に動じたのか顔ごと視線を逸らして答えていた。

「はっ！ まあいい、出てきたんだからやることは一つだよな？」

剛三はおもむろにジャケットを脱ぎ捨て、鍛え上げた上半身を晒す、それに伴い京水とレイカもT2ガイアメモリを取り出す。

「ええ、こちらそのつもりです」

男もまたガイアメモリを取り出す。紅色のケースに中央には「C」の文字。

そして、男はガイアメモリを起動させ、右手に差し込もとするが、何かを思い出したのかようにその動きが止まる。

「ああ、いい忘れていましたが、別に一对三でやるつもりはありませんから」

その言葉が切っ掛けとなって、剛三たちの足元が急激に震え始める。

立ってられない程の震動。だが、数メートル先にいる男は微動だにしていない。

「何しやがった!」

吼える剛三に男は微かに笑みを浮かべる。

「何もしてませんよ。これから何かが起こるんです」

ピシリ、と剛三たちの周りの何か所か亀裂が入る。

それが何かと疑問に思った時には更なる変化が剛三たちを襲う。

ゴオオ、という轟音が響くと亀裂が更に大きく裂け、そこから天に向かって水が昇っていった。

高さは数十メートル、幅は少なくとも人間が余裕で入る程の大きな水柱、それが三人を囲んでいくつもある。

「ちい! やっぱり何かしてるじゃねえか!」

そう言い男に向かって疾走する剛三、だがそこに京水鋭い声がした。

「駄目！ 避けて！」

京水の声が剛三の耳に入る。それと動じに感じる右側面から迫る悪寒。剛三は反射的に棍で防御の姿勢をとっていた。

構えた剛三に迫る悪寒の正体は、いまだ噴出し続ける水柱の側面から新たに噴射された大量の水。

鉄砲水のように何百リットルの水が剛三に圧力となって呑み込もうとした。

「ぐっ！ らあああ！」

両腕にかかる骨が押し潰されそうな力、両脚にかかるどんなに力を込めても嘲笑うかのように後退させていく、歯を食い縛り、その圧力に膝を屈しないように必死に耐える。しかし――

「我慢比べはそこまでですよ」

『C R A B』

剛三の背後から聞こえた囁く声と電子音声。

次を感じたのは、胴体を突き抜けていく衝撃。そちらに意識が向いてしまったことで僅かに水流を防いでいた剛三の棍握る手が緩む。その隙を逃さないかのように水の圧力は剛三の手から棍を無理矢理引き離し、何処かへと飛ばしてしまった。

剛三の視線が飛ばされた棍に追う前に根のように踏み締めていた足が地面から離れていくのを感じ、視界が百八十度反転したかと思えば、近くの建物の壁を突き破って中を転がっていた。

しかし、すぐさま立ち上がり構えたが、一瞬顔をしかめ口から何かを吐き捨てた。

「塩辛え……こいつは海水か……」

口の中をヒリつかせる塩気と濡れた体から漂う潮の香り。あの巨大な水柱は全て海水だったらしい。

「あー、ピンピンしてますね……離れた所から見ていましたが、本当に頑丈ですね」

感心した言葉を言いながら、一体の怪人が剛三の前に姿を現す。その姿は甲殻類の蟹と酷似していた。

赤銅色の甲殻で覆われた全身は、生物特有の無骨があり鎧を彷彿とさせ、右手は手首から先が大きく変化しており、地面に擦れる程の長さで大きさを持ったハサミとなっていた。

頭部からは、触角のような器官が生えており、両目もゴーグル状に変わっており、生物と非生物のような特徴的な外見をしていた。

「へっ！ たかが一発喰らったぐらいでどうにかなると思っただか、この蟹野郎」

「他の二人と離れさすのが本来の狙いでしたが……お望みならどうにかなるまで攻撃してあげましょうか？」

剛三の挑発に同じく挑発で返す異形——クラブドローパント。

剛三は、ハッと笑うと手に持ったT2ガイアメモリのを起動させる。

『METAL』

「やってみろ、俺に殻ごとぶっ潰される覚悟があるならなあ！」

手に持ったガイアメモリを放ると、見えない力に操られ剛三の背中に刻まれた生体コネクタへと吸い込まれる。

「しゃあああああ！」

咆哮とともに、その肉体は文字通り鋼の肉体へと変化。

鋼鉄と闘士の記憶から生み出された怪人——メタルドーパントは力強く拳を握りしめると、大きく振りかぶるとクラブドーパントに一直線に飛び掛かった。

新たな変化が起きたのは、敵によって剛三の姿が視界から消えたときに起こった。

京水たちが剛三の後を追うよりも先に、京水たちを囲むように地面に亀裂が入り、そこから再び水が噴き上げた。

「今度は何？」

「あら？」

異変を察知し、ただちにこの場から離脱しようとするが、水柱から飛び出してくる水がそれを拒み、足止めをする。

今度は水柱のような状態ではなく幕のように薄く、向こう側が透けて見えるほどであったが、噴き上げた水は落ちることなくどんどん上昇していき、ある高さまでいくと空を囲み、ドーム状になり完

全に外と隔離された状態へととなった。

それ合わせて今まで轟音を上げていた水柱は消え、後には二人の脛辺りまでを浸すほどの水を残していった。

大きな音が消えたことによって、周囲がやけに静かに感じてしま
う。

『H E A T』

『L U N A』

メモリを挿し込みドーパントへとその身を変える二人。姿を見せない人物が放つ肌を粟立たせるような感覚が、静寂した空間に満ちているからこそその行動。

フシューウウウ

前触れもなく、何もなかった筈の水面から突如として黒い煙のよ
うなものが噴き出して二人を覆い尽くした。

「……毒ではないね」

視界が悪くはなったが、息苦しくはなく、普段通りに呼吸が出来る。ただ、この黒い煙は何故か生臭い匂いを含み、それが鼻につく。

「！」

背後から来た気配に咄嗟にヒートドーパントは振り替えるが、だ
がそこに立っていたのは腕を震わせているルナドーパント。

「……紛らわしいからジツとしてなよ。京水」

呆れた声を出してヒートドーパントは、前に向き直る。
それを見たルナドーパントは鞭のような腕を振り上げると、ヒートドーパントの背中目掛け無言で振り下ろした。

Mの剛力／堂本剛三の章（後書き）

唯一、本編でガイアメモリを手に入れた剛三。いろいろ考えて書いていきたいと思っています。

Mの剛力／堂本剛三の章その2（前書き）

メタルドールパントが主役の話ですが、なんだか影が薄く見えてしまう内容になってしまいました。

Mの剛力／堂本剛三の章その2

ルナドーパントの鞭のようになる腕が、ヒートドーパントの無防備な背中を引き裂こうと勢いよく振り下ろされる。しかし――

「バレバレだよ」

ヒートドーパントが一言、それと同じタイミングで、軽く上げた右足を水の張られた地面に踏み降ろした。

その瞬間起こったのは強烈な水蒸気の発生。むせ返るような潮の香りと高熱を含んだ水蒸気は爆発したかのように一気に拡散し、ルナドーパントへと襲いかかる。

ルナドーパントは両腕を顔の前に交差して熱に耐えようとするが、それでも持ちこたえることが出来ず、たまらず水蒸気の熱が届かない場所まで退避した。

水蒸気の爆発は、ルナドーパントを後退させるだけではなく、周りに立ち込めていた煙幕も一気に吹き飛ばし、視界を正常に戻した。

「あーあ、道理で静かなわけだ」

納得といった様子で呟くヒートドーパント、その視線の先にあるのは二メートル程の高さの水柱。その水柱の中で、先程ヒートドーパントのすぐ近くにいた筈のルナドーパントが手をばたつかせ、水泡を出しながらもがいていた。

「ゴボ！　ゴボボボ！　ゴボボボボボ！」

ヒートドーパントと目が合つと助けてくれと言わんばかりに水泡を更に激しく出す。

「分かったよ」

ヒートドーパントの掲げた指先に火が灯ると、瞬時に数十センチ台の大きさの火球となった。そして、ヒートドーパントはそれを躊躇いなくルナドーパントを捕らえている水柱に放った。

水柱と火球が接触した瞬間、鼓膜を激しく震わす轟音とともに白い蒸気が大量に発生。

「い、やーん！」

ルナドーパントの悲鳴が聞こえたと思えば、蒸気の中から飛び出して、そのまま顔面から地面へと突っ込んで倒れ伏せた。

「痛い！」

「まあ、本物が出てきたわけだし、そろそろ正体でも見せたら」

倒れ伏せたルナドーパントは無視し、少し離れた場所にいるもう一人のルナドーパントにヒートドーパントは喋りかける。

「何？ 何！ イヤだ、わたしがもう一人いる！」

ガバツ、と地面に倒れ伏せていたルナドーパントが上体を起こし、もう一人のルナドーパントの姿に驚愕する。

「誰、誰なの！ どう見てもわたしだけど、どう見てもわたしだけど！ でも一体誰なの！ 誰？と言っても見た目は完全にわたしだけど！ 一応、誰へボ！」

勢いよく捲し立てるルナドーパントの様子に話が進まないと判断したのか、ヒートドーパントがルナドーパントの後頭部を踏みつけ、海水の張った地面へと顔を無理矢理押し付けて強制的に黙らせた。

「姿は完全に再現したはずだが、どこか落ち度があったか……」

もう一人のルナドーパントが声を出すと、それを合図にルナドーパントの全身が波打つかのように震え、金色の体色も色褪せていくかのように変化し始める。

体の震えが止まったときには体色は金から灰色へと変化し、体型もまた著しく変化していた。

筒のような頭部は大きく膨らみ、逆さにした瓢箪のような形状へと変わり、また、人間でいう顎の辺りからは腕ぐらいの太さがある吸盤のついた触手が四本生えており、長さが一メートル以上ある触手を髭のように垂らしていた。

両腕は鞭のような形から五指の揃った人間の手に近い形になったが、触手と同じく吸盤が隙間無くついていた。両脚も同じく吸盤があり、太股の付け根にまで生えている。

生物でいう蛸の姿をしたドーパントがルナドーパントの姿を捨て、二人の前に本来の姿で現れた。

「へえ……それがアンタの姿ね……物真似しなくても結構アンタに似てるね」

踏みつけていたルナドーパントに声をかけると、ヒートドーパントの足を押し退け、再び上体を起こす。

「失礼しちゃう！ 私の方が腰の周りがくびれているわ！」

喚くルナドーパントを放ってヒートドーパントは軽く肩を竦める。

「まあ、こんな一秒でも黙ってられない奴が、何も言わずに立つてるわけないでしょ？」

「成る程、確かに失敗したな」

ヒートドールパントの答えに納得がいったという様子で肩を揺らし、軽く笑う。

「やーれやれ。不意打ちなんてもんは中々成功しないもんだな……」

ヒートドールパントたちの背後から聞こえる別の男性の声。目の前にいる蛸のドールパントを警戒しつつ背後にと目を向ける。

張っていた海水が盛り上がり、二メートルぐらいの高さまで上がると水柱が弾け、中からもう一体のドールパントが現れた。

水色の半透明の体に深い青色の目、鎧を彷彿させるような装飾が施され、魚類の尾のような後頭部は束ねた髪のように後ろへ垂れ下がっている。その手には黄金の三ツ又の槍が握られ、肩に担ぐようにして持っていた。

「あらあら、そんなに簡単に姿を見せて良いの？」

いつの間にか、自分の世界から戻ってきたルナドールパントが立ち上がりながら半透明のドールパントに問う。

「はっ！ 一回失敗したら二度目も上手くいかない、っていうのが俺の持論だからな、二度目の奇襲なんてしたら痛い目に合いそうなんだね」

そう言つと肩に担いでいた槍を器用に回し、ルナドールパントたち

に突き出すようにして構える。

「ここからは力押しでやらせて貰うか！」

構えた槍を地面に向けて一閃。すると斬られた海水は一気に隆起し、ルナドーパントたちを呑み込まん勢いで覆い被さるようにして降り注いできた。

それに合わせて蛸のドーパントも行動に移る。体を震わせたかと思うと、そのまま足元の海水へと飛び込む。足首まで浸かる程の深さにも関わらず、飛び込んだ瞬間にドーパントの姿は消え、後には波紋だけが残っていた。

襲いくる海水の壁に向けてヒートドーパントの手を掲げ、そこに火球を生み出す。生み出された火球は周囲の酸素を一気に取り込み、数十センチの大きさまでになると、ヒートドーパントはそれを海水の壁目掛けて放った。

海水の壁に接触すると、水蒸気と一緒に壁を構築していた海水も弾け飛び、海水の壁を縦に引き裂いた。

相手の攻撃を防いだと思った矢先、ヒートドーパントの目は海水の壁の向こうへ見る。先程までいたドーパントの姿はそこにはいない。

何処だと周り一気に見渡すヒートドーパント。探すヒートドーパントの背後、先程引き裂かれた海水の壁から突如として黄金の槍がヒートドーパントへと突き出される。

不意討ちに気付かないヒートドーパントに対し、それを見れる位置にいたルナドーパントが咄嗟に声を出す。

「避けなさい！」

ルナドーパントの声に反応し、ヒートドーパントは殆ど直感といった様子で地面を蹴り真横へと回避する。

黄金の槍は直撃出来なかったものの、ヒートドーパントの脇腹を掠り、小さいながらもダメージを負わせた。

致命傷は避けられた、僅かに安堵するルナドーパントの足を水面から現れた四本の触手が絡めとり、地面へと引き摺り倒す。

「あふん！」

水面から浮き出てくるかのように姿を現した蛸のドーパントは、ルナドーパントの両足に絡めた触手を上に上げると、ルナドーパントの体も持ち上げられ、高々と上げた状態から勢い良く触手を降り下ろし、ルナドーパントを地面へと叩きつけ派手な水しぶきを上げさせた。

「あうん！」

苦鳴を洩らすルナドーパントをもう一度持ち上げ、再度叩きつけようとするが、そうはさせじとルナドーパントが両腕を蛸のドーパントに向けると、両腕が矢のように宙を駆け抜け、蛸のドーパントの鳩尾にめり込み、体をくの字に曲げさせる。

「ぐっ！」

体内から息を吐き出させられ、その結果ルナドーパントを掴んでいた触手の動きが止まる。その隙に長く伸ばされたルナドーパントの腕が掴む触手を上から断つように降り下ろされた。

湿った打撃音、蛸のドーパントの掴んでいた触手は地に叩き伏せられ、ルナドーパントは両足の自由を取り戻す。拘束から解除され地面へと落ちていくルナドーパントは、手を地面へと着け勢いをつけて放し、その姿からは想像出来ない程軽々とした動作で後方へ宙返りをし、蛸のドーパントとの距離をとった。ルナドーパントが、

再度その腕を鞭のように振るおうとするよりも早く、蛸のドーパン
トは触手を叩き伏せられたことでうつ向かせていた頭を起こし、触
手の隙間からルナドーパントへ何かを吐き出した。

ルナドーパントは、咄嗟にそれを左手で弾く。パチャリと液体のこ
ぼれたような音と共にルナドーパントの金色をした左手が黒く染ま
る。

それは、粘性を帯びた黒い液体——蛸のスミであった。

「イヤだ！ 私、汚されちゃう！」

叫ぶルナドーパント。しかし、蛸のドーパントは容赦なくスミを
吐いた。ルナドーパントは、また左手で防ごうと腕を振るおうとす
るが、ルナドーパントの意思に反し腕が動かない。

「あら？」

キョトンとしたような態度のルナドーパントにスミの塊は待つは
ずもなく、ルナドーパントを黒く染めようと迫る。

「何ボーっとしてるんだよ」

当たる直前、真横から現れた火球によりスミの塊は相殺され、跡
形もなく消え去った。

ルナドーパントの隣にヒートドーパントが並び立つ。先程の攻撃
で脇腹には裂傷があったが、押さえたり痛がったりするような動作
は見せず、毅然とした態度をとっていた。

「あら、ありがとう。ついでにもう一つお願い出来る？」

「何？」

ルナドーパントの言葉を聞きながらヒートドーパントは蛸のドーパントへ牽制の火球を放ち続けていた。

「こーこから先、切ってくれない？」

ルナドーパントがすんなりと衝撃的な言葉を出しながら、だらりと垂れ下がった左手のスミが付着していない半ば辺りに右手を当て、鋸を引くようなジェスチャーをする。

「毒でもあつた？」

特に驚く様子もなく、蛸のドーパントと姿を隠したもう一体のドーパントを警戒しながら視線僅かにルナドーパントの左手に向ける。

「スongoイ痺れてるわぁ！ もうビリビリよビリビリ！ しかもどんどん上に上がってきちゃってるし！」

早口で言葉を吐き続けるルナドーパントに、ヒートドーパントは、ふーん、と納得するとヒートドーパントの右足が赤熱し、躊躇することなくルナドーパントの左手を蹴り上げた。

高熱を帯びた脚から繰り出される蹴りは、ルナドーパントの腕を易々と焼き切り、宙へと舞い上がらせた。

「ああ！ これでスッキリ！」

片腕を無くしたにもかかわらず、いつも通りの態度をとるルナドーパント。だが、ルナドーパントが軽く左手を振るうとまるで手品のように切断された筈の箇所が現れ元通りの状態になった。

「うへえ……トカゲの尻尾もビックリだな」

呆れと驚嘆を含んだ声を出しながら、水面から半透明のドーパントが姿を見せ、蛸のドーパントの隣に立つ。

「あんたさつき一度失敗したことは二度目も上手くないかなんて言った割には、すぐに不意打ちしてくるなんて良い度胸してるね」

「ああ、あれ？ 信じちゃった？ 意外とピュアだね」

ヒートドーパントの棘を含んだ言葉を小馬鹿にしたような態度で返す半透明のドーパント。その言葉でヒートドーパントの纏う熱気と殺気が濃さを増す。

「まあ、ちまちま手足を潰しても無駄みたいだし、ここは全身まるごと逝って貰おうとするかね」

半透明のドーパントが片手を水面へと浸ける。すると手首から先が水面に溶けるようにして消える。

「こいつはどうだあ！」

片手を持ち上げた瞬間、浸かっていた水面の周囲が丸ごと持ち上げられ、人の身長よりも遥かに巨大な手が海水によって造られていた。

持ち上げられた手は、そのまま振り下ろされ、ヒートドーパントの頭上から迫り来る。

「長い戦いになりそうだね」

「もう！ 早く克己ちゃんの所に行きたいのに！ もう！ 克己ちゃん！」

ヒートドーパントは炎を起こし、ルナドーパントは鞭のように両腕を振るう。

隔離された空間の中、蛸のドーパント——オクトパスドーパントと半透明の姿をしたドーパント——シードーパントとの戦いは今だに終わりを見せない。

ルナドーパントたちがいる場所より少し離れた所にある倉庫内でもまた二体の異形が戦いを繰り広げていた

「うおりゃああああ！」

雄叫びと共に振り下ろされたメタルドーパントの左拳が、クラブドーパントの右肩に命中。その鎧のような甲殻にヒビをいれ、拳の形が残る程に陥没させる。

しかし、クラブドーパントは声一つ漏らさず、めり込む腕を掴むと、メタルドーパントの空いた脇腹に向かってハサミを振るう。

「しゃらくせえ！」

振るわれたハサミに向けて右肘を上から叩きこみ、直撃を防ぐ。

「おらぁ！」

「ぐっ！」

クラブドーパントの顔面に鉄槌のようにメタルドーパントの頭突きが入ると、たまらず掴んでいた手を放し、後ろに二、三步後退してしまう。

衝撃で焦点が合わないのか、目線が定まらないクラブドーパントにメタルドーパントは一気に近づくと、右手に持った両端に直刃のついた鉤爪を肩に食い込ませると反対の脇腹にまで刃を走らせ火花を散らす。

「ちい！」

が、切り裂かれたクラブドーパントの体には二本の裂傷がついたものの致命傷には程遠く、メタルドーパントは不満げに舌打ちする。反撃とばかりにクラブドーパントはハサミを振り上げ、メタルドーパントに振り下ろそうとするが、メタルドーパントは避ける素振りは見せず、逆に左手を下に引き攻撃の構えをとる。

両者ほぼ同時に攻撃を繰り出すが、一瞬早くクラブドーパントの巨大なハサミがメタルドーパントの右肩に食らいつく。倉庫内に反響する金属音、音の大きさが物語るその威力は、メタルドーパントの両足に蜘蛛の巣状のヒビが入れ、その膝をも僅かに沈ませる。

だが、その一撃を持つてしてもメタルドーパントの闘志は衰えず、逆に激しく燃え上がる。

燃え盛る感情を拳に乗せ、下から突き上げられた拳がクラブドーパントの胴体を叩き割る。

「でいあああああ！」

溢れる闘志を叫びに変えて、メタルドーパントの拳はそのまま振

り抜かれた。

胴体を覆う殻の破片を撒き散らしながら地面を飛び石のように跳ねていくクラブドーパント。

第三者から見ればメタルドーパントの勝利に見える。しかし、当の本人には勝利を喜んでいるような様子はなく、何故か苛立っている様子であった。

メタルドーパントが走り出す。走る先に居るのは仰向けに倒れたクラブドーパントの姿。

しかし、クラブドーパントはすぐに上体を起こすと、その口からシャボン玉のように空中を浮遊する泡をメタルドーパントに向けて無数に吐き出した。

「くっ！」

スピードをつけて走っていたメタルドーパントは、その場で急停止すると、足元目掛け拳を突き立てた。

メタルドーパントの拳で地面を覆うコンクリートが碎ける。メタルドーパントはその碎けたコンクリートの破片を驚掴みにし、握力で粉々にすると自分に迫る泡の群れに対し、無数の破片を撒いた。

小さくなった破片が一番手前にある泡に触れた瞬間、轟音と共に泡は爆発、爆炎と衝撃を辺りに撒き散らす。一つの爆発では留まらず、爆炎によって他の泡が割れると更に爆発、衝撃で飛ばされた泡同士が接触することで更に爆発。連鎖的に起こる爆発によってメタルドーパントは無理矢理後退させられてしまう。

メタルドーパントはすぐにクラブドーパントの姿を探すが、爆発による煙りによって視界を遮られ見つけることが出来ない。

「くそ！ 鬱陶しいことじゃがって！」

戦いの中、何度か使用された為、嫌でも理解した泡の特性を知っ

ていた上で、使った回避策であつたが、直撃によるダメージは避け
たものの相手を見失つたことで結局は敵の思惑通りになってしまつ
たことに、メタルドーパントは更なる苛立ちを募らせる。煙が収ま
り視界が良好になると、メタルドーパントはさっきまでクラブドー
パントが倒れていた場所を見る。そこにクラブドーパントの姿はな
く、どこに行つたのか探そうとしたとき。

「ここですよ」

相手から声を掛けられた。声のした方向を見ると、倒れていた
た場所から十数メートル離れた場所にクラブドーパントが立ってい
たが、その姿は倒れていたときとは違う点があつた。

全身が紅色をしていたはずだが、今のクラブドーパントの体色は
色素が抜け落ちたかのような白く変色していた。

「またそれが……！」

苛立ちの言葉を吐き捨て舌打ちをするメタルドーパント。

「すみませんね。こういう能力なので」

しれつとした態度でクラブドーパントが返すと、おもむろに頭頂
部を掴み、一気に引つ張つた。

布の裂けるような音を出しながら、クラブドーパントの全身に纏
う白は引き剥がされ、その下から元の紅色の姿を現す。元に戻つた
のは色だけではなく、メタルドーパントの殴打によって碎かれた甲
殻も傷一つ無い状態に戻っていた。

「それじゃあ続きといきますか」

傷を完全に回復させたクラブドーパントがメタルドーパント挑発な言葉を送った後に構える。

メタルドーパントの喉の奥から獣のような唸り声を出しながらクラブドーパントを睨み付けた。

戦いが始まってから、今ので四回目となるクラブドーパントの脱皮による完全回復、この能力のせいでメタルドーパントは徐々にではあるが不利な状況へと追い込まれていた。

傷一つ無いクラブドーパントに対し、メタルドーパントの体には幾つもの傷が目立っていた。ハサミによってつけられた切り傷、泡の爆発によってつけられた煤けた跡に小さいながらも抉れた箇所。傷の一つ一つは大きくはないが、このまま長期戦となればどちらが危うくなるか明白である。

どうにかしてあの能力を使用させないように何度か速攻を仕掛けてみたが、クラブドーパントは、ほんの少しでも危ういと感じるとすぐに大きく後退してメタルドーパントとの距離を取り、爆発する泡によって時間を稼ぐという行動にでる。

近距離を得意とするメタルドーパントにとって、離れた場所から攻撃出来る、メタルドーパントの攻撃に耐えられる程の防御力を持っている、自己回復能力を持つなど、かなり相性の悪い相手である。相手を倒す術は、今のところメタルドーパントには無い。

だが、躊躇うことなくメタルドーパントは、両足に力を込めると足の裏から溜めた力を一気に放ち、クラブドーパントへと迫る。

確実な方法は無い、有効な手段も無い、ならばメタルドーパントは何をするべきか。

答えは一つしかない。

「でいやああああ！」

己の積み重ねてきた力を余すことなく振り活路を決じ開ける。それがメタルドーパント——堂本剛三の生き方であり、戦い方であっ

た。

横殴りに振るった鉤爪がクラブドーパントの首を狙う。クラブドーパントはそれを閉じたハサミを盾のように防ぐ。

火花を散らし止められるが、メタルドーパントは鉤爪を押し当てたまま、クラブドーパントの肩を空いている手で掴み、引き寄せると膝を腹部に叩きつけた。全身を鋼鉄で覆うメタルドーパントの膝は破砕槌のようにクラブドーパントの腹部の甲殻を砕き、軋ませる。しかし、クラブドーパントも黙って攻撃を食らってばかりではなく、鉤爪を押し当てられていたハサミを振るい、鉤爪を持つ手を弾き上げる。クラブドーパントは、ハサミを開くと弾き上げられた腕を挟み、万力のような力で締め上げる。

「ぐっ！ このやろう！」

メタルドーパントの鋼鉄の肉体により切断まではいかないものの、ハサミはメタルドーパントの腕の肉を少しずつ潰しながら食い込む。腕に力を入れて抵抗するが、それすら些細な抵抗と笑うように相手はギリギリとメタルドーパントの腕を両刃を締め続ける。

「ならよお！」

メタルドーパントの右足がクラブドーパントの足首を払うと、僅かの間クラブドーパントの体が宙へと浮く。

「しっかり掴んでろよ！」

掴まれた腕を無理矢理捻る。捻ってことで挟まれた腕は決まていくが、メタルドーパントは躊躇をしない。クラブドーパントは宙へ浮いた不安定な状態から掴んでいた腕が捻られたことで体勢が反転、頭が地面へと向けられた状態になる。

「うおらあああ！」

ありったけの力を乗せ、杭でも打ち込むかのようにクラブドーパントを頭から叩きつけ、地面を粉碎し破片を散らす。

「ッ！」

流石のクラブドーパントも無事では済まないのか、メタルドーパントを掴んでいたハサミが離れ、また衝撃で息の塊を吐き出したつきり声すら出すこともできない様子であった。

地面に倒れたクラブドーパントの首を掴むと、その体を持ち上げる。

鉤爪を構え、クラブドーパントの頭へ狙いを絞る。短時間で傷を修復しようとも頭を潰されれば終わりだと判断しての行動。

ダラリと力無く四肢を垂らしているクラブドーパントに抵抗する意思は見えない。この機械を逃す筈もなくクラブドーパントの頭へ鉤爪突き出した。

キイイイイイン

「なにー！」

突き出した鉤爪を左右から挟みこむようにして止める二本の爪のような物体。それはクラブドーパントの脇腹から生えている。

「蟹の足って何本か知ってます？」

今まで沈黙していたクラブドーパントが言葉を発すると更に両脇腹から一本ずつ蟹の足が生え、メタルドーパントを捕えるとクラブ

ドーパントに密着するように引き寄せた。

「ぬお！ 離せ！ この野郎！」

「すぐに離れますよ」

クラブドーパントの体が一瞬で白く変色。そして、背中を突き破り、真新しい状態のクラブドーパントが姿を現す。

「このお！」

捕まえようと必死に手を伸ばすが、僅かに指先が触れる程度で捕まえることは出来なかった。

「！」

「これでどうです？」

完全に脱皮をし終わると同時にメタルドーパントに向けて放たれた無数の泡。身動きを封じられ、自由に動けないメタルドーパントに避ける手段は無く、泡が触れたとき爆発がメタルドーパントを包み込んだ。

室内になる爆音。

音の余韻がまだ残る中、爆発の影響で地面は陥没し、土煙が舞い上がっていたが、それも次第に収まり爆発の中心に影が現れる。

「つてえなあ！」

「本当にタフですね、あなたは……どうすればそんなに頑丈になれるのだか……」

煙から姿を現したメタルドーパントにクラブドーパントは呆れ混じりで愚痴るように言う。

しかし、メタルドーパントは五体満足ではあるが、金属が溶けたような傷や深く抉れた傷が何カ所も有り無事とは言えない状態であった。

メタルドーパントは爆発する直前に全身に力を込めることで硬直させ、相手の攻撃を受けきるように守りを固めた結果である。しかし、まだドーパントの能力を得て数十分しか経ってないメタルドーパントは自分の能力を完全には把握しておらず耐えきれるかどうかわからない殆ど賭けのような行動であった

首を軽く回して鳴らし、メタルドーパントは今だに萎えない闘志を全身から滲ませ構える。

クラブドーパントも傷付いたメタルドーパントに対しても甘く見ることなく半身に構え攻防どちらにも対応出来るハサミを前方に出し隙の無い状態を造る

「へっ！ なげえ戦いになりそうだぜ」

奇しくもこのこと離れた場所にいる仲間と同じ言葉を呟くとメタルドーパントは駆け出していった。

Mの剛力／堂本剛三の章その3（前書き）

なんとか今年中に更新できました。

今までで一番長い話ですが、気になった点や疑問などがあればお知らせください。

Mの剛力／堂本剛三の章その3

巨大な水の手ヒートドーパーントの放った火球が直撃し、接触した部分から容赦なく蒸発をさせていくが、その手を構成する膨大な量の海水を全て消し去るには熱量が足りず、水の手勢いを止めることは出来ず、立ち込める水蒸気を掻き分ながら振り下ろされていく

「そあらあ！」

シードーパーントの巨大な手が大きく開かれ、ルナドーパーントとヒートドーパーントを握り潰そうとするが、巨大なせいで動きはやや鈍く、握り潰される前に二人は左右に別れるようにしてそれを回避した。

目標を見失った手が地面へと叩きつけられる。そのせいで地面に張っていた海水ははね上がり、大きな水しぶきを上げた。高く上がった水しぶきがやがて雨のようにして閉ざされた空間内に降り注ぐ。

「そんな攻撃じゃ捕まらないよ」

「いや、そうでもないさ」

ヒートドーパーントの言葉を即座に否定するシードーパーント。

「もう捕まっている」

その言葉の直後にヒートドーパーントの肩に走る鈍い痛み。見ると肩に通常サイズとなっていたシードーパーントの手が、指先を食い込ませるようにして背後から掴んでいた。いつの間に付いたのか、その疑問は掴む手の手首から下が視界に入ったことで氷解した。水の

張った地面から蛇のようにヒートドーパントの体を伝っているシードーパントの手。

地面の海水から近付くと、巨大な手で巻き上げられた海水で濡れた体の表面の水分を取り込みながらヒートドーパントの身体を這い上がり、十分な大きさになったときには、ヒートドーパントに攻撃を加える準備は整っていた。

ヒートドーパントが体の熱を一気に上昇させ、掴んでいるシードーパントの手を消し去ろうとするが、相手の行動を既に読んでいたのか、シードーパントが腕を上には振るうと、水面からロープのように長く伸びた腕が浮き上がり、掴まれていたヒートドーパントは、軽々と空中に持ち上げられそのまま手を離された。

ヒートドーパントは空中に放り出され自由に身動きが出来ない。シードーパントは、槍を構え、投擲の姿勢をとり、狙いを定めると手に持った槍をヒートドーパント目掛け投げ放つ。

「そらよおー！」

空気を切り裂いて、黄金の軌跡を描きながら飛ぶ槍。その先端が無防備に晒されたヒートドーパントの背中に突き立てられようかとしたとき――

「えいさー！」

ルナドーパントの伸ばされた手が槍の柄に幾重にも巻き付いて勢いを殺して槍を止め、ヒートドーパントを守る。

しかし、大きく手を伸ばしたルナドーパントの状態を黙って見ている筈もなく、オクトパズドーパントが胸を膨らますと、触手の隙間から麻痺性の毒を持つ墨の塊を吐き出した。

「いつてらっしゃーいー！」

だが、ルナドーパントも同じく無防備を晒し続けず、もう一方の手を振るうと数個の光の球が現れ、それが急激に変化し人の形を造る。

人の形が出来ると、光の中から現れたのは、中央に白い骨のような線が描かれ、左右にも百足の足ののように線が延びている覆面を被った黒スーツの集団——マスカレードドーパントたちが、ルナドーパントを守る壁のように立ち塞がっていた。

そのうちの一体に先程吐かれた墨の塊が直撃。その威力で地面を二転三転転がると、黒く染め上げ全身を痙攣させて悶えるような仕草をすると、マスカレードドーパントの姿が崩れ、人間の形をした光になるとすぐに消滅していった。

「おいきなさい！」

ルナドーパントの声に反応し、マスカレードドーパントたちはシードーパントたちに一斉に向かっていった。

「ハッ！」

向かってくるマスカレードドーパントの姿を鼻で笑うと、シードーパントは一番近くに来たマスカレードドーパントの顔面に容赦なく拳を叩きつけた。走っていたマスカレードドーパントは、拳より上半身だけが後ろに反り、勢いの残った下半身が逆上がりでもするかのように足が地面から離れそのまま転倒した。

「いいサンドバッグだ。ありがとよ！」

そう言いつと転倒したマスカレードドーパントの胴体をボールのように蹴り飛ばした。

オクトパスドーパントも迫るマスカレードドーパントの一体に前蹴りを当てると、後ろにいたマスカレードドーパントたちを巻き込んで転倒させる。マスカレードドーパントたちが倒れたことで、ルナドーパントの前を守る壁は無くなり、オクトパスドーパントは四本の触手を伸ばした。

伸ばした触手は、ルナドーパントの持っているシードーパントの槍の柄頭に絡みつき、力強くで奪い取った。

「あ！ ドロボー！」

「その言葉はそのまま返そう」

奪い取った槍は、引つ張った勢いのままシードーパントへと投げられた。

「おっと！ ありがとう」

投げ渡された槍を難なく掴み取り、オクトパスドーパントへ軽く礼を言い、その槍を構えた。

マスカレードドーパントが懷から拳銃を取り出し、シードーパントに向けて発砲しようとするが、その指が引き金を引くよりも早く、一歩踏み出したシードーパントの槍の先が、マスカレードドーパントの手の甲に突き刺さり、なおも威力は衰えず手の甲を貫通すると、その先にある胴体にまで先端が届いた。

手と胴体を刺し貫いてマスカレードドーパントの動きを止めると、シードーパントは槍を上げ、貫かれたマスカレードドーパントを軽々と持ち上げる。

「こいつはあんたらに返すぜ！」

地面を力強く踏みつけ、上体を大きく回転、振るう槍に速度を乗せ、突き刺さったマスカレードドーパントを振り払った。

成人男性の体格であるマスカレードドーパントが、重さを感じさせない程の速さで、飛んで行く先にあるのは、今先程、地面へと着地したばかりのヒートドーパント。

背を向けて立つヒートドーパントに凶器と化したマスカレードドーパントが迫りくる。

「ふん」

だが、ヒートドーパントは余裕を感じさせるように鼻で笑うと、全身を捻り、マスカレードドーパントへと体を向けると、僅かに遅れて正面へと向けられたヒートドーパントの燃え盛る脚がマスカレードドーパントに衝突。マスカレードドーパントの体は爆散し、光へと戻っていった。

ヒートドーパントの蹴りに、シードーパントは称えるように口笛を鳴らす。

その口笛を吹くシードーパントの隣では、オクトパスドーパントが残りのマスカレードドーパントを始末していた。

墨を全身に塗られたマスカレードドーパントの一体が消え、オクトパスドーパントの触手に首を掴まれ捕らえられているマスカレードドーパントが二体いるが、それぞれ別の触手がマスカレードドーパントの頭に絡みつく、ペットボトルのキャップを外すかのように頭を捻られ、頭部が背中を向く格好のまま光に還っていった。

「面倒な力を持つてるなあ、そっちの金ぴかのは」

槍を担ぎ、ルナドーパントの姿を見ながら呟くシードーパント。

「あら！ さっきのビックリした！？ ビックリした！？ もーっ

と凄いの見せちゃおうかしら！」

ルナドーパントが両手を左右に広げ、胸の前で交差するように振るうと、先程と同じように光の玉が生まれる。しかし、先程とは大きく違い、光が変化し形を作って出来たのはマスカレードドーパントたちではなくルナドーパントたちが無数に現れた。

「うへえ……」

「これはまた……」

「気色悪」

「こんな素敵な光景のどこが気色悪いの！」

視界一杯に広がるルナドーパントたちの姿にシードーパントとオクトパスドーパントは驚きを越え呆氣にとられたような声を洩らし、ヒートドーパントは率直な感想をいいルナドーパントを怒らせていた。

「もう！ それじゃあ気を取り直して……いつてらっしゃーい！」

ルナドーパントの号令で全てのルナドーパントの分身が、シードーパントたちに群がるよう迫る。

「ちい！」

シードーパント舌打ちをし、ルナドーパントの分身の一体に槍を突き放つ。しかし、マスカレードドーパントのときとは違い。ルナドーパントの分身は両手を交差して槍を受け、急所に当たらないよ

うに守る。

「さつきとは出来が違っ、うお!？」

最後まで言う前に別のルナドーパントの分身が、シードーパントの足首に腕を巻き付け、シードーパントを宙吊りにしようと持ち上げようとする。

「させるか！」

足を持ち上げられ逆さまになろうとしている状態で持っている槍を地面へと突き刺す。すると槍の刺された部分から間欠泉のように海水が噴出しルナドーパントの分身に直撃、海水の勢いはなおも衰えず、ルナドーパントの分身の背後に立っていた分身も巻き込んでいった。

オクトパスドーパントも複数のルナドーパントに囲まれ苦戦を強いられていた。

真横から迫る黄色の影、オクトパスドーパントの触手が一瞬消えたかと思えば、黄色の影——ルナドーパントの腕を弾き飛ばしていた。四方から伸びてくるルナドーパントの腕を触手で弾きながら直撃を避けていたが、反撃の機会が窺えず焦りのような表情を浮かべていた。

圧力の増していくルナドーパントたちの攻撃。オクトパスドーパントは奥歯を噛み締め、神経を磨り減らしながらもその攻撃を防ぎ、拮抗する。

が、突如ルナドーパントたちの攻撃は止まり、先程まであった圧力が消える。

オクトパスドーパントが戸惑いを感じるよりも先に、濡れた肌をチリチリと乾かせていく熱の感触を覚え、気付けばそこには迫ってくる巨大な火球。

墨による相殺が無理だと反射的に判断したオクトパスドーパントは、限界まで体を平面化させ、火球と地面との間にある海水の中に体を潜り込ませた。

間一髪の状況を脱したオクトパスドーパント。その心に刹那の安堵が訪れた――が、それも彼の目に映る第二の紅蓮の光景によって見事に打ち砕かれた。

オクトパスドーパントのいる位置よりほんの少し前に落ちた熱の塊は、周囲の海水を僅かな時間で生物の耐えきれない程の温度まで上昇させる。それでも有り余る熱は、やがて海水を気化させ一瞬間に周囲の状況を変化させた。

沸騰した海水により思わず目を閉じてしまい、肌が熱で爛れていく感覚から逃れるために暗闇の中から、方向など決めず進もうとするが、僅かに残った皮膚の感覚から何かが迫ってくるのを感じた。

（これは……！）

覚えのある熱を纏ったソレは、オクトパスドーパントの鳩尾に突き刺さると掬い上げるようにしてオクトパスドーパントの体を水中から飛び出させた。

（熱い……）

どこか他人事のように腹部に残る今でも燃え盛っているのではないかと錯覚する程の痛みを冷静に感じながら宙へと舞い上がるオクトパスドーパント。閉じた目を開けば、熱の発生源であるヒートドーパントが、脚を振り上げていた姿が映っていた。

ヒートドーパントは一直線に伸ばしていた脚を振り下ろすと、その勢いのままその場で前方宙返りをしたかと思えば、回転する身体よりもやや遅れて振られたもう片方の脚が、落下してきたオクトパスドーパントを狙って垂直に伸ばされた。オクトパスドーパントの

身体に伸ばされたヒートドーパントの脚が触れたとき、天に向かつて火柱が昇り、オクトパスドーパントの全身を包み込み、その意識を断ち切った。

オクトパスドーパントの全身が火に呑み込まれ、地面へと落下し、下に張つてある海水を派手に巻き上げる光景をシードーパントは、一枚一枚撮影された写真を見るかのようなゆったりとした感覚で目に捉えていた。

真正面から見ているわけではなく、ルナドーパントの分身たちからの攻撃を捌きながら、視界の端で見ていたのにもかかわらず、わけにはつきりとソレが見えた。

思考の片隅で相棒の悲惨な姿を嘆くような感情が滲むようにして現れてくるが、戦いの最中に感傷に浸ることを許さない合理的な感情がそれを無理矢理押し込めて、ルナドーパントたちとの戦闘を継続させる。

ルナドーパントの分身の一体が、シードーパントの両脚を薙ぐように、低空を走るようにその手を振るう。

（ここは……この攻撃への対処は……）

シードーパントが思考を巡らせようとしたとき、不意にフラッシュバックして浮かぶ上がるオクトパスドーパントの燃えていく姿。感傷に浸らないようにすれど、隙間から這い出てくるように現れ、シードーパントの思考に揺らがせた。

その結果、ルナドーパントの攻撃に対し、シードーパントは意識せずに飛び上がり、振るう手を足元に通過させた。だが――

(……しまった！)

回避したことに対する安堵は無く、あるのは己の失策を悟った焦りのみ。

仲間を倒されたことによる動揺かもしくは焦りか、本来ならば水に接していなければ自らの力を十二分に発揮することが出来ないことは、重々理解していたはずだが、攻撃されたとはいえ、あろうことか自分から離れるようなことをしたことにシードーパントは表情を歪める。

そして、敵であるルナドーパントも相手のミスを見逃すほど甘くはない。

「ソレはダメダメよねー！　そーれ高い高いー！」

喜悦に満ちたルナドーパントの声を号令代わりにし、シードーパントの周りにいたルナドーパントの分身たちが、一斉に両手を振るい、シードーパントを上にも更に高く上げるように殴打。シードーパントの身体は、玩具のように跳ね上がり、十数メートルの高さまで叩き上げられた。周囲にはシードーパントを守る水は一滴もない。周りを囲う水の壁や地面に満たされた水がシードーパントにはやけに遠くにあるように思えてしまう。無数の鞭によって全身を殴打されたシードーパントは自由に動かない身体を何とか動かし地面を見た。

そこには、指先に炎を灯すヒートドーパント。アレが自分へと放たれるのかとシードーパントは思った。が、シードーパントの予想は外れ、指先に灯った炎はシードーパントのいる上空ではなく、真正面へと放たれた。

相手の意図が分からないシードーパント。

「ナイスボール！」

しかし、その答えは放たれた炎の先にいたルナドーパントの音が示していた。

上体を大きく捻り、右手を地面と水平にして構えるルナドーパント。豪々と灼熱を巻く炎を前にしても慌てる様子はなく、むしろ楽しんでるかのように余裕が見える。

「さあーで、いくわよ！」

迫る炎。それから視線を外すことなく凝視し続け、ルナドーパントの構えた右手が届く距離まで近づいたとき。

「とんでけー！」

構えた右手を解き放ち、全身を大きく使い、炎を上へと打ち上げた。

打ち上げた炎が山吹色の光に包み込まれたかと思えば、一つの炎が無数に分かれ数を増やす、その数は八。

「冗談——」

シードーパントが言葉を言い終わる前に、シードーパントの胴体に一発目の炎が着弾、触れた炎は急速に広がり、シードーパントの苦鳴ごと飲み込みその身体を覆った。

炎に焼かれるシードーパントに向けて、まるで意志があるかのようになに方向を変えながら炎が襲いかかり、包む炎は大きさを増していく。

「これでラスト！ さよならあー！」

ルナドーパントの声に動かされた最後の炎がシードーパントへと直撃。

水のドーム内で激しい爆発が起こり、周りを囲む水の壁を激しく揺らす。突如として水の壁は崩れ、それにより地面に張られていた海水は貯めておくことが出来なくなり、四方八方へと流れていった。

海水の無くなった地面にカチャンという音が鳴り、その後、前よりも大きな音が鳴る。鳴った場所にあるのは砕けたガイアメモリ、そして、かつて人だった者の焼けた残骸がそこにはあった。

唸りを上げる拳がクラブドーパントの顎に命中すると、そのまま頸部と背中が密着するかと思わせるほどに激しく突き上げる。突き上げた勢いでクラブドーパントの足が地面から離れるとメタルドーパントは空いた手でクラブドーパントの腕を掴み、そのまま背負い投げて地面へと投げつける。

「ッハ！」

背中から地面へと叩きつけられたクラブドーパントが苦しげに息を吐くが、メタルドーパントは容赦なくその顔面に向けて足で踏みつけようとするが、間一髪のところまで転がるようにしてクラブドーパントは回避、メタルドーパントの攻撃は外れ、地面へと深々と足が埋まる。

陥没した足を抜くとコンクリートにはっきりとメタルドーパントの足形が刻まれていた。

頭蓋が陥没するどころか粉碎するかもしれない程の踏みつけにク

ラブドローパントは内心冷や汗を流すが、メタルドローパントは相手の心情などお構い無しに二発目の踏みつけを繰り返した。

「ぬうつ！」

ハサミを眼前に翳すと、痺れるような衝撃がハサミから左半身を駆け抜ける。踏みつける足を防ぐと、ありったけの力を込めてクラブドローパントはハサミを振るう。

踏みつけていたメタルドローパントは、片足で立っていたためハサミを振られた勢いでバランスを崩し、後ろへと後退してしまう。

この隙を逃さずクラブドローパントは素早く立つと、距離をとるための時間稼ぎとして無数の泡をメタルドローパントに向けて吐き出した。

「ふん！」

その泡に鼻を鳴らすメタルドローパント。次の瞬間、クラブドローパントの予想に反する行動を取った。

「おりゃああああ！」

雄々しい声を上げて、無数の泡に向けて突貫。流石のクラブドローパントも再生の準備をしながらも敵の真っ直ぐ過ぎる行動に啞然とってしまう。

案の定、メタルドローパントが泡に接触すると爆発が生じ、炎と煙がメタルドローパントを呑み込む。

爆発によりメタルドローパントが足止めを食らっている間にクラブドローパントの傷付いた外殻は浮き上がり、無傷の新しい外殻が透けて見えていた。

クラブドローパントが古い外殻を掴み、引き剥がした。

その瞬間、煙を突き破って、風を斬る音がクラブドーパントの耳に届いた後、間を置かずに軽い衝撃がクラブドーパントの左肩に走る。

「あ……？」

何事かと左肩に視線を向けると、そこには深々と突き刺さったメタルドーパントの鉤爪。自分の現状を理解したと同時に激しい痛みがクラブドーパントを襲う。

「あああああ！？」

「おお、おお。どうした随分と騒いで」

煙の中から、メタルドーパントが言葉に挑発の色を滲ませながら姿を現す。

「お前……！ 気付いていたのか！？」

痛みや怒り、動揺のせいで荒くなった口調で問い質すクラブドーパント。それに対し、メタルドーパントは指先を掲げる。

「指を少しだけだが……脱皮直後は随分と柔いじゃねえか」

クラブドーパントがメタルドーパントを拘束し、脱皮して逃れたあの瞬間、必死に手を伸ばし、クラブドーパントを掴まえようと指先を掠めたとき、メタルドーパントの指はまるでゴムのような軟質の感触を感じていた。

事実、クラブドーパントの防御力は脱皮直後の数秒間はゼロに等しくドーパントでありながら人間並みの脆さまでに落ちてしまう。

「くっ！」

刺さった場所が悪かったのかクラブドーパーントが左腕を持ち上げようとするが僅かしか上がらず、左腕は殆ど役に立たない状態へとなっていた。

激痛覚悟で引き抜くとするが、既に硬質化した殻が返しのように鉤爪に引っ掛けてしまう。自慢の殻が思わぬ所でクラブドーパーントを苦しめる。

鉤爪を抜くことに悪戦苦闘しているクラブドーパーントなど構うことなくメタルドーパーントが一気に距離を縮める。

クラブドーパーントがメタルドーパーントに注意を向けたときには、既にクラブドーパーントのすぐそばまで迫っていた。

「でやああああ！」

メタルドーパーントの鉄柱のような脚が、クラブドーパーントの胴体をへし折らんばかりの速度で繰り出される。

片腕だけでは防げないと判断したクラブドーパーントは後ろへと下がり、メタルドーパーントの蹴りを避けようとする。

「！？」

しかし、避けている最中にガクンと動きが急停止するクラブドーパーント。原因は先程突き刺さった鉤爪に引っ掛けられたメタルドーパーントの爪先、刺さった鉤爪の分だけ下がることを見落としていたクラブドーパーントのミスであった。

引っ掛けてられた爪先の勢いに身体を引っ張られ、再度地面へと叩きつけられるクラブドーパーント。

すぐさま立ち上がろうと上体を起こすが、メタルドーパーントの手

がクラブドーパントの喉元を掴み、地面に押し付ける。

「逃がさねえよ」

クラブドーパントを首を絞め上げる手は束ねたワイヤーのように強固で自らの力では引き剥がすことは不可能だとクラブドーパントに悟らせる。

（だったら……！）

拳を振り上げるメタルドーパントの姿にクラブドーパントも覚悟を決める。

自分も巻き込まれるのを承知で口から泡を吐き出した。

メタルドーパントの眼前に広がる爆発する泡、僅かでもクラブドーパントを絞めつける手の力が弛むことを願っての決死の攻撃。

メタルドーパントの身体に泡が触れると同時に紅蓮の炎がクラブドーパントの視界一杯に広がり、許容範囲を越える爆音が鼓膜を限界以上に震わし、その結果クラブドーパントの聴力を奪う。

だが、クラブドーパントの首にかかる圧迫感は消えない。

背中に冷たい汗が流れるような感覚、まさか、でも、いや、もしかしたら、そう言った言葉がクラブドーパントの脳内で激しく駆け巡る。

生か死の瀬戸際で思う、一生の願い。しかし、その願いは――

「――！」

空気を揺らす音無き咆哮

そして、爆煙を突き破りながらも繰り出されたメタルドーパントの鉄槌のとき拳が、クラブドーパントの口部へと打ち下ろされる。顔の下半分が消失したかのような錯覚を覚えるとともにクラブドー

パントの意識もまた打ち砕かれた。

口内にめり込む拳を引き抜くと、血が糸のように引く。メタルドーパントの拳に砕けたクラブドーパントの口内の破片が幾つも突き刺っていることからどれだけの威力を込めて奮われたのかが見てとれる。

ガクガクと小刻みに身体を痙攣させるクラブドーパント。致命的なダメージを与えが、今だガイアメモリを排出する様子は無く、死ぬまではまだ時間がかかることが分かる。

放っておいてもいずれは尽きる命だが万が一の可能性を考慮し、自分の視界に収まっているうちにトドメを刺すことに決めたメタルドーパントは、拳を再び固く握り締める。

相変わらず痙攣を繰り返しているクラブドーパント——だが、先程とは少し違い小刻みに動いているのではなく揺さぶられているかのような動きへと変化していた。

「あ？」

メタルドーパントもクラブドーパントの動きを不審に思ったのか、訝しげな声を出す。

クラブドーパントの動きは更に激しさを増し、身体が震えているというよりも地面に身体を叩きつけていると表現したほうが正確なほど、全身を硬直させて、コンクリートの床に四肢や背中を滅茶苦茶にぶつけ、不協和音を鳴らし続ける。

「なんだあ……？」

クラブドーパントの奇怪な動きに困惑するメタルドーパント。突如としてクラブドーパントの動きが止まる。胸を仰け反らせブリッジのような格好で静止画のようにピクリとも動かない。

ピシッ

何かが弾けるような音が建物内に木霊する。数秒の間を起き、またピシッという音が鳴った。

音がする中心に居るのはクラブドーパント、その仰け反らせた胸部には亀裂が走っている。

三度目のピシッという音が響く。クラブドーパントの胸部の亀裂が、先程まで胸の中心までだったのが腹部まで伸びていた。

バキン、という四度目の音が鳴る。だが、今度は亀裂ではなく、クラブドーパントの亀裂の中から甲殻を突き破り、二本の角のような物が現れた。

角のような物が左右に激しく揺れ、クラブドーパントの甲殻を内側から碎きながら這い出てくる。

「おいおい……」

二本の角らしき物が這い出てくると徐々にそれが何なのかを理解し、呆れ混じりの声を出すメタルドーパント。

二本の角らしき物、それは巨大な蟹のハサミの先端であった。突き破って出てきた蟹のハサミはメタルドーパントの身長を上回り、その大きさから持ち主の巨大さなど容易に想像出来る。このまま黙って巨大生物の誕生を見ているわけにもいかず、メタルドーパントは一刻も早くクラブドーパントの命を絶とうと動くが、時既に遅くメタルドーパントが近づいた瞬間、まだ形が残っていたクラブドーパントは弾け飛び、甲殻を散弾のように周囲に撒き散らした。

「くそ！」

両腕を眼前で交差し、甲殻の散弾を防ぐ。一発一発の威力が馬鹿

にならず、コンクリートの地面を軽々と吹き飛ばしていくそれは鋼の肉体を持つメタルドーパントの身体に痛みを教えるには十分であった。全身を穿つような痛みに耐え、散弾のような攻撃が終わったとメタルドーパントが思ったとき、身体の芯まで砕けるような衝撃が真横から襲いかかった。

メタルドーパントの身体が、吹かれて舞う枯れ葉のように宙へと上がると、そのまま落下。数回地面の上を跳ねるように転がっていき、途中で片手を地面に勢いよく突き立てブレーキをかける。そして、ダメージなどないかのように素早く立ち上がり、自分に攻撃を仕掛けた相手を見た。

「でけえな……」

最初は水平に向けられていたメタルドーパントの視線が、斜め上を見上げるように向けられる。

メタルドーパントの視線の先にいた存在は、人の姿をしていたクラブドーパントではなく、完全に蟹という生物の姿をしていた。片腕だけにあつたハサミは両腕に生え、その大きさはメタルドーパントがその陰に隠れることが可能なほどの巨大さを持っている。凹凸のある幅数メートルもある甲殻を支えるのは、電柱のように太く、杭のような鋭利な先端を持つ足。

甲殻から伸びた二つの無機質な眼がメタルドーパントを見る。その目に込められているのは憎しみや怒りといった人間の持つ負の感情ではなく、動物のような本能に満ちた目。

最早、メタルドーパントを倒す敵ではなく、狩るべき獲物としてしか認識していないのかもしれない。

ガチガチ、左右に開く口部を鳴らし、巨大クラブドーパントが足を曲げ、身体を深く沈めた。

相手の行動を警戒し、構えるメタルドーパント。しかし、次にとった相手の行動はメタルドーパントの予想の範疇を越えていた。

曲げた足を勢い良く縦に伸ばしたかと思えば、深く沈んでいた身体が上に引つ張られるかのように高々と持ち上がる。しかし、それだけでは勢いは止まらず、巨大クラブドーパントの身体はほとんど上昇、建物の天井を突き破って、メタルドーパントの視界からその姿を消した。

「跳びやがった……」

呆気にとられた様子のメタルドーパント。流石にあの巨体が軽々と跳び上がるのは想像するには無理がある。

だが、跳び上がった存在がその後どうなるかは、安易に想像出来た。

メタルドーパントは振り返ると間を置かずに一気な駆ける。目指すのは建物の外。

どれ程相手が跳び上がったのかは分からないが、少なくともメタルドーパントの頭の中で楽観的な考えが浮かぶことはない。

軽く見積もってもトン単位は有りそうな巨体から繰り出される落下は如何程の威力か。

その答えは、足元が消失したかと錯覚する程の揺れ、それにもない碎けていく地面、背後からの爆風のような衝撃、そして崩れ落ちる建物が示していた。

脱出しようとするメタルドーパントの頭上に影がかかる。

「ちい！」

倒壊する建物が押し潰すようにメタルドーパントに降り注いだ。

シードーパントとオクトパスドーパントが敗れ、周りを覆っていた水の壁も消え、ようやくルナドーパントたちは閉鎖された空間から解放された。

「あーあ、大分時間を喰っちゃたね」

「そうね、もう！ 早く合流しなきゃ！ 克己ちゃんが怒ってたらどうしましょ！」

ルナドーパントが激しく身体を揺らし、不安であることを表現しながらぐりりと周りを見る。

「剛三もまだ終わってないのかしら？ 大丈夫かしら？」

「まあ、あいつのことだし大丈夫じゃないの？」

ルナドーパントの言葉にヒートドーパントは、さして心配していない様子で言う。

「まあね、あら？」

何かに気付いたのか、ルナドーパントが、その場から離れタッタッタと小走りで走り出す。

「京水？」

「ちょっとそこまで」

そう告げ、ルナドーパントはヒートドーパントから離れていった。

「少し探してみるかな……」

口では心配していないといったが、やはり気になるのかヒートドーパントは周囲を見渡した、その時――

ヒートドーパントの背後から轟音と破砕音が鳴る。

振り返ったヒートドーパントの視線に映るのは、建物から跳びだし、宙に浮いた巨大な蟹の姿。

「何あれ……？」

現実離れたシュールな光景に思わずポカンとしてしまうが、落下し始めた巨大な蟹を見て、すぐにこの後の展開を察知、建物から離れ距離を置く。

直後、普通の人間ならば立っていらなくなる程の揺れが辺り一帯を襲い、落下地点にある建物を倒壊させた。

ヒートドーパントは直ぐ様巨大な蟹が落下した場所へ向かう。ルナドーパントに声を掛けるか一瞬迷ったが、ルナドーパントも先程の光景を見ていと判断し、後から合流しに来ると思い先を急いだ。

着いた先にあったのは、瓦礫と化した建物、そしてその建物を瓦礫に変えた元凶である巨大な蟹が立っていた。

見上げる程の大きさを持つ巨大な蟹に、少々骨の折れる戦いになりそうだと考えながらヒートドーパントが近付いていくが、突如、ヒートドーパントの前方にある積まれた瓦礫が盛り上がり始める。

咄嗟に構えようとするヒートドーパントであったが、その瓦礫の中から現れたモノを見て、構えるのを止めた。

「剛三……何処から出てくるんだよ」

「ああ！ 何だお前か」

瓦礫の中から姿を現したメタルドーパントにヒートドーパントは、若干の安堵と多大な呆れを含んだ言葉をかける。

「何であんなでかいのと戦う羽目になってんの？」

「知らねえよ。止め刺そうとしたら急にでかくなりやがったんだよ」

「詰めが甘いね」

「うるせえ！ あんなの予想出来るか！」

軽口を言い合う二人であったが、意識は常に巨大クラブドーパントへと向けられ、いつでも戦闘体制に入れるように準備もしている。口元に泡を吐きながら巨大クラブドーパントがゆったりとした動作で、二人を見た。巨大クラブドーパントのガラス玉のような目に二人の姿が歪んで映る。

そして、巨大クラブドーパントは身体の向きを変えたかと思えば、一瞬の間も無くメタルドーパントたちに向かって全力で疾走した。

「こいつ！」

メタルドーパントが言葉を言い終わるよりも早く、巨大クラブドーパントが襲い掛かる。その巨体に見合ったハサミを振るい、走る勢いのまま二メートル以上離れた距離から攻撃を始めた。

メタルドーパントは回避よりも防御を選択し、地に足を吸い付けるように踏み締めると、振るわれたハサミを両手を突き出し受け止める構えを取る。

ハサミがメタルドーパントの両手に接触したとき、腹の奥底まで響くような金属音が発生、メタルドーパントの両手はハサミをしっ

かりと掴んでいたが、巨大クラブドーパントはお構い無しにハサミを振り抜き、掴まっていたメタルドーパントを振り払う。

「うおおお!？」

軽々と投げられたメタルドーパント。巨大クラブドーパントはそれが落下するのを見届けずに、次はヒートドーパントにハサミを振るった。

地面のアスファルトを砕き、破片を撒き散らしながらの低い軌道でヒートドーパントの両足を狙う。

両足が刈られるよりも早く、ヒートドーパントは地を蹴り、後方へと跳びながら空中で炎弾を放つ。

放たれた炎弾。しかし、巨大クラブドーパントは意外な程に機敏な動きで、ハサミをかざし、盾のようにして炎弾を受け止める。僅かに焦げ目が着いただけでダメージは皆無であった。

舌打ちし、着地をするヒートドーパント。巨大クラブドーパントに視線を向けるが、先程までいた場所に巨大クラブドーパントの姿が無い。

すると頭上に突如影がかかる。見上げた先に在るのは跳躍して此方に飛び込んでくる巨大クラブドーパントの姿。

「なっ!？」

慌てて落下地点から離れると、一瞬の間を置いて巨大クラブドーパントが落ちてきた。

落下した衝撃で飛ばされた土煙とアスファルトの破片がヒートドーパントに向かって凶器のように襲い掛かる。ヒートドーパントを避ける暇もなく、辛うじて腕を交差しそれを防いだが、土煙のせいで巨大クラブドーパントの姿を見失ってしまう。

そのとき、ヒートドーパントの背中に冷たい感覚が走る。その感

覚を信じ、前方へと転がるようにして飛び込むと、先程まで立っていた場所に旋風のようなものが通り抜け、舞う土煙はその余波で吹き飛ばされてしまった。

ヒートドーパントが背後に目を向ければ、そこにはハサミを振り抜いた姿勢で立っている巨大クラブドーパントの姿。

あの時、自らの感覚を信じなければ、今頃は上半身と下半身が別々に別れ、惨状を描いていたであろうとヒートドーパントは思う。ヒートドーパントは立ち上がり、距離を取ろうとしたとき、ガクンと足が何かにとられ、その場に倒れてしまう。足元を見れるとそこにあつたのは地面の亀裂、巨大クラブドーパントが落下したときに出来たものが、今、ヒートドーパントの動きを止めてしまった。

「しまっ……」

慌てて立ち上がろうとするが、いつの間にか巨大クラブドーパントは距離を詰め、ヒートドーパントにハサミの届く位置でそのハサミを断頭台のギロチンの刃のように振り上げていた。

「おい！」

飛ばされたメタルドーパントが、瓦礫を押し退けて現れた時に目に映ったのは仲間の危機。どう見ても走って間に合う距離ではなく、それでも自分に注意を向けようと叫ぶが、相手は此方に見向きもしない。

終わる、そんな考えがヒートドーパントの脳裏に浮かび上がる。

グシャアアアン

碎ける地面の音。だがヒートドーパントに怪我一つ無い。

何故なら、地面は巨大クラブドーパントのハサミによって碎かれ

たのではなく、突然前のめりになって顔面から地面に激突した巨大クラブドーパントによって砕かれたからだ。

何故、巨大クラブドーパントは転倒したのか――地面に顔から突っ込んでいる巨大クラブドーパントの左右の後ろ足の二本が上に持ち上げられている。そして、その二本の足に絡まっている山吹色の鞭のようなモノ。

「セーフ！ ナイスセーフ！」

その鞭の伸びた先にいたのは、別の建物の屋上に立っているルナドーパント。間一髪のタイミングで現れ、ヒートドーパントを助けることに成功した。

「京水！ てめえ、今までどこで油を売ってやがった！」

「ごめんなさ〜い！ ちょっと拾い物してたら遅くなっちゃった〜！ レイカ大丈夫〜！」

メタルドーパントの怒声を伸ばし腕を戻しながら、いつもの様子で流しながらヒートドーパントに声を掛けるルナドーパント。ヒートドーパントも既に立ち上がり巨大クラブドーパントから離れていた。

「ああ……うん……ありがとう……」

顔を背け、恥ずかしそうな様子でボソツと礼の言葉を言うヒートドーパントにルナドーパントは耳に当たる部分に手を当て――

「え、何？ 聞こえない〜い！ 全然、聞こえない〜い！ も〜と大きな声で、ハッキリと感謝の言葉を――」

「絶対聞こえてるだろ！ ああ、もう！さつさと終わらせるよ！
京水！ 剛三！」

「はーい！ もう！照れちゃって。あ、そうそう！ 剛三！ 落とし物！」

ルナドーパントがメタルドーパントに向けて手に持っていた物を投げつける。メタルドーパントは、それを受け取ると、おお、と驚いたような声を出した。

「へっ！ お前もたまには気が利くじゃねえか！」

手に持った物は、クラブドーパントと戦う前に弾き飛ばされた愛用の棍。それが再びメタルドーパントの元に戻ってきた。

メタルドーパントは、それを手馴れた様子で回し、巨大クラブドーパントへと突きつけるようにして構える。するとメタルドーパントが握っていた棍に銀色の光を発し、全体を包み込んでいく。

「むっ！」

思わぬ現象に、若干戸惑いを浮かべた声を出す、光が消えたとき、そこには変化した棍の姿があった。棍全体が鋼のように強化され、先端には鎚が新たに装備され、より破壊力を増した状態となっていた。

「おお、おお。こいつもメモリの力かよ……おもしれえ……！」

メタルドーパントは、強化された棍――メタルシャフトを肩に担ぐと巨大クラブドーパントへと突貫する。巨大クラブドーパントは、

倒れた巨体を両手のハサミで起こし立ち上がろうとしていた途中だったせいで、易々とメタルドーパントを懐に入れてしまった。

メタルドーパントは走ってきた勢いを殺さぬまま踏み込みと、その足を軸にして身体を回転させながらメタルシャフトの鎚を巨大クラブドーパントの腹にと打ち込んだ。

巨大クラブドーパントの身体が一瞬波打ったように見える錯覚、そして聞こえる粉碎音、巨大クラブドーパントの巨体が自らの甲殻と体液を撒き散らしながら地面を転がっていく。

「はっ！ いい感触だぜ！」

振るったメタルシャフトを握り直しながら愉しげに笑うメタルドーパント。

メタルドーパントに殴り飛ばされた巨大クラブドーパントの胴体は大きく陥没して甲殻が剥がれ落ち、露出した中の肉も傷つき絶え間なく体液を流し続けている。

一目見ても重症。だが巨大クラブドーパントは震えながらもその身を起こし、立ち上がるうとしていた。

「いい根性だ。そこだけは褒めてやるよ。だがな、次の一発で終わりだ」

野獣のような殺意を載せたメタルドーパントの言葉。その殺気を敏感に察知したなか巨大クラブドーパントは怪我の状態を無視して身構える。

メタルドーパントも武器を構え、そしてヒートドーパントといつの間にか建物から降りていたルナドーパントがメタルドーパントに横に並び立つ

「じゃあ、いくぜ！」

「今度はきつちり決めてきなよ」

「さあさあいくわよー！ バッチリ決めちゃうわよー！」

メタルドーパントは巨大クラブドーパントに最後の攻撃を仕掛ける。地面を蹴りつけ、弾丸のように疾走。左右にいるルナドーパントとヒートドーパントは、その場から動かない。

ヒートドーパントは、両手の手のひらに炎を生み出すとそれを巨大クラブドーパントに向けて放つ。走るメタルドーパントの脇を通り抜けていくように飛ぶヒートドーパントの炎。しかし、当たる直前に巨大クラブドーパントが最初に防いだのと同様にハサミを盾のようにして構え、炎を防ぐ準備をしていた。

ハサミに炎が接触。爆炎が生まれるが、巨大クラブドーパントには届かない。だが、その爆炎に紛れ混んで飛び込んでくる人影。

メタルシャフトを振り上げ、巨大クラブドーパントの眼前に現れるメタルドーパント。振り下ろされる鉄槌が巨大クラブドーパントの額を叩き割ろうとしたとき、横から伸びてきたもう片方のハサミが、メタルドーパントの胴体を挟み、防ぐ。

巨大クラブドーパントのハサミは、容赦無くメタルドーパントの胴体を締め上げ、ギシギシと軋む音を上げさせながら、ハサミを食い込ませていく。

やがて、限界を越えた圧力に耐えきれなくなったメタルドーパントの身体は、ブチンという音と共に上下に分断した。

「じ、剛三オオオオオ！」

落ちていくメタルドーパントの上半身を見て絶叫を上げるルナドーパント。

「オオオオオオ——なあくんちゃって！」

ルナドーパントのおどけた声に合わせて、分断されたメタルドーパントの上半身と下半身が山吹色の光に包まれ消失する。

「じ・つ・は、偽者でしたあゝ！ 本物はどこででしょうっ！」

巨大クラブドーパントの目が周囲を見回すが、メタルドーパントの姿は見当たらない。その時——

「——アアアアアアア！」

頭上から聞こえてくる雄叫び。

見上げ先にいたのはメタルシャフトを振り上げて落下してくるメタルドーパント。ヒートドーパントの爆炎で巨大クラブドーパントの視界を遮った瞬間、メタルドーパントは大きく飛び上がり、ルナドーパントの造り出した幻と入れ替わっていた。

ハサミを交差し、メタルドーパントに防御する体勢と取る巨大クラブドーパント、しかし、メタルドーパントは構うことなく、相手に背中が見えるぐらいに捻る。自らも鉄槌の一部かのように鉄槌も自分の一部かのように。

落下のスピードに加え、自らも十全の力を発揮出来るように、全てを込めた必殺の一撃を放つために鋼の肉体を限界まで引き絞る。

メタルドーパントの間合いに巨大クラブドーパントが入ったとき——その力を解き放つ。

「でえやああああああ——！」

空気を震わす叫び、そして放たれた一撃。音すら置き去りにして

しまいそうなそれは、交差したハサミの盾が先端の鎚に触れた瞬間、そこに最初から何も無かったかのように、原型をとどめずに粉碎、残骸となって散る。

盾を砕いても止まらない鉄槌は防ぐ術の無い巨大クラブドーパントの目と目の中心に直撃。瞬時に砕かれ、その余波で巨大クラブドーパントの胴体の前半分は粉々となって消え失せ内容物を溢す。それでもまだ残った力は鉄槌を振り切ると巨大クラブドーパントの残った身体を地に叩き伏せ、そのままバウンドさせ、二回、三回と宙で回転させる。

メタルドーパントの着地、そして地面に叩きつけられたメタルシヤフトは、半径十数メートルの範囲に広がるひび割れを造りやっと止まった。

メタルシヤフトを肩に担ぐメタルドーパント。その背後で巨大クラブドーパントの亡骸が地面へと落下する。

メタルドーパントの身体が光り、体内からメモリが排出され、人間の状態に戻る。

剛三は軽く首を回し、背後へと視線を向けた

「まあまあおもしれえ戦いだったぜ」

「結構、時間を喰っちゃったな。早いとか合流しねえとな」

「あんたがきちんと仕留めたらもつと早く行けたんだけどね」

「ああん！ 早く行きましよ！ 行きましよ！ 克己ちゃんが待ってるわぁー！」

戦いが終わり、ルナドーパントとヒートドーパントも既に人間の
状態へと戻っている。

「ああ、しつけないなあ！ 過ぎたことだろ！ あと京水！ いい加
減黙ってる！」

「なんか、ジャケットから潮の匂いがしてくるしベタベタするし、
早く着替えたい……遅れた責任とってあんたが合流場所までの足、
探してきなよ、剛三」

「か・つ・みちや〜ん！ か・つ・みちや〜ん！」

「だああ！ もう、お前ら黙ってる！」

賑やかに騒ぎながら三名は目的の地に向けて歩き出す。その先に
自らの夢の始まりがあると信じて。

Mの剛力／堂本剛三の章その3（後書き）

これでNEVER五人の話が終わりました。
次の章で最終回です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8083r/>

仮面ライダーエターナル - NEVER SIDE STORY -

2011年12月29日20時46分発行